

砂子瀬遺跡  
水上(3)遺跡  
水上(4)遺跡

— 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2009年3月

青森県教育委員会

# 序

世界自然遺産として知られる白神山地がある西目屋村では、数多くの遺跡が登録されており、太古からブナの森の恵みとともに人々が生活していたと思われます。

当センターでは、津軽ダム建設事業に伴い平成15年度から埋蔵文化財の発掘調査を実施していますが、平成18年度には美山湖右岸地区と砂子瀬遺跡、平成19年度には砂子瀬遺跡・水上(3)遺跡・水上(4)遺跡の発掘調査を行いました。

本報告書は、これらの調査結果をまとめたものです。

砂子瀬遺跡は、礫層を掘り込んで作られた配石遺構や土器埋設遺構などが確認されました。

特に屋外配石炉は、礫を方形状に組み合わせたもので、県内では青森市的小牧野遺跡に次いで2例目となります。

また、水上(4)遺跡では、縄文時代の沢から大量の縄文土器が出土しました。

今後も引き続いて周辺の発掘調査が行なわれる予定であり、豊かな自然と厳しい環境の中での縄文時代の人々の生活が明らかになることと思われます。

この調査報告書が、青森県の文化財の保護と研究に役立つことができれば幸いに存じます。

発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力いただきました多くの方々に対しまして深く感謝の意を表します。

平成21年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 伊藤博文

## 例　　言

- 1 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが津軽ダム建設事業に伴い、平成18・19年度に調査を実施した西目屋村美山湖右岸地区及び砂子瀬遺跡の確認調査と砂子瀬遺跡、水上(3)遺跡、水上(4)遺跡の発掘調査報告書である。なお、平成18年度の確認調査の結果、美山湖右岸地区は上流域が水上(2)遺跡、中流域が水上(4)遺跡、下流域が水上(3)遺跡として青森県遺跡台帳に新規登録された。
- 2 遺跡の所在地及び青森県遺跡番号は以下の通りである。

砂子瀬遺跡	青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字宮元（青森県遺跡番号 25008）
水上(3)遺跡	青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上（青森県遺跡番号 25026）
水上(4)遺跡	青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上（青森県遺跡番号 25029）
- 3 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。なお、執筆者は依頼原稿については文頭に、その他は必要に応じて文末に付した。
- 4 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を受託した国土交通省東北整備局津軽ダム工事事務所が負担した。
- 5 拝図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、遺物写真的縮尺は統一していない。
- 6 土層等の色調観察には農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖（小山正忠・竹原秀雄 2006）』を使用した。
- 7 出土遺物の石質鑑定は国立大学法人弘前大学の柴正敏氏に依頼した。
- 8 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を複製したものである。
- 9 図中で用いたスクリーントーンは、以下のとおりである。



スリ範囲  
(石器)



タタキ・凹み範囲  
(石器)



被熱範囲  
(石器)

- 10 引用・参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献名については著者名と西暦年で示した。
- 11 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 12 発掘調査及び本報告書作成にあたり、次の機関並びに諸氏からご教示、ご指導を受けた。

青森県立郷土館、秋田県埋蔵文化財センター、滝沢村埋蔵文化財センター、西目屋村教育委員会  
泉 択良(国立学校法人 京都大学 大学院教授)、井上 雅孝(滝沢村埋蔵文化財センター)、岩井 浩介・  
成田 正彦・岡本 康嗣(弘前市教育委員会)、岡村 道雄(奥松島縄文村歴史資料館 名誉館長)、小笠原  
雅行(青森県教育委員会 文化財保護課 三内丸山対策室)、小笠原 豊(平川市教育委員会)、児玉 大成  
(青森市教育委員会)、小久保 拓也(八戸市教育委員会)、小林 克・高橋 学・菅野 美香子・宇田川  
浩一(秋田県埋蔵文化財センター)、島影 壮憲(大館市郷土館)、須藤 隆(前国立学校法人 東北大  
学院教授)、中田 書矢(鰺ヶ沢町教育委員会)、八木 勝枝(岩手県立博物館)

# 目 次

序

例言

目次

## 第1章 平成18年度の発掘調査

第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査要項	2
第3節 調査方法と整理方法	2
第4節 調査経過	3
第5節 遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第6節 調査トレンチと基本層序	5
第7節 検出遺構と出土遺物	
第1項 検出遺構	6
第2項 出土遺物	9
第8節 まとめ	15

## 第2章 平成19年度の発掘調査

第1節 調査要項	16
第2節 調査方法と整理方法	17
第3節 調査経過	18

## 第3章 砂子瀬遺跡

第1節 基本層序	19
第2節 検出遺構と出土遺物	
第1項 検出遺構	20
1. 穴住居跡 2. 土坑 3. 配石遺構 4. 屋外配石炉 5. 土器埋設遺構	
第2項 出土遺物	62
1. 土器 2. 石器 3. 土製品 4. 石製品	

## 第4章 水上(3)遺跡

第1節 基本層序	71
第2節 検出遺構と出土遺物	
第1項 検出遺構	72
第2項 出土遺物	73
1. 土器 2. 石器	

## 第5章 水上(4)遺跡

第1節 基本層序	77
第2節 検出遺構と出土遺物	
第1項 検出遺構	78
1. 土坑 2. ピット 3. 配石遺構 4. 遺物捨て場	
第2項 出土遺物	82
1. 土器 2. 石器	

## 第6章 理化学的分析

第1節 放射性年代測定結果報告書	90
第7章 まとめ	93
遺物観察表	95
写真図版	101

報告書抄録

## 第1章 平成18年度の発掘調査

### 第1節 調査に至るまでの経過

岩木川総合開発の事業の一環として建設される津軽ダムは、昭和35年に完成した目屋ダムの度重なる計画規模を超えた出水による洪水や渇水の被害などを繰り返さないため、昭和58年から建設省東北地方建設局青森工事事務所による予備調査や実施計画調査が行なわれ、平成5年11月に「ダム基本計画」が公示された。

平成14年には、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所から青森県教育庁文化財保護課へ、津軽ダム建設予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する協議の依頼があり、これを受け同年内に、津軽ダム工事事務所、県文化財保護課、西目屋村教育委員会の3者により、現地踏査と津軽ダム建設工事の工程・内容、津軽ダム建設予定地内の埋蔵文化財調査の進め方等についての協議が行われた。その後、文化財保護課による分布調査が実施され、津軽ダム建設予定地常時満水区域内の埋蔵文化財調査対象範囲を12地区、総面積約768,000m<sup>2</sup>と確定した。

発掘調査は、青森県埋蔵文化財調査センターが担当して実施することになり、平成15年度は、大川添(1)・(2)遺跡、川原平(1)・(4)遺跡の範囲・性格・内容等の確認調査、平成16年度～18年度には水上遺跡の調査が行われた。

平成18年7月に国土交通省津軽ダム工事事務所から、工事用道路及び骨材置き場予定地の要望が出された。これを受けて、県文化財保護課と県埋蔵文化財調査センターで協議をした結果、確認調査であれば9月～10月に対応が可能であることを回答し、同年9月5日から調査を開始した。確認調査の結果、美山湖右岸地区の上流域は水上(2)遺跡、下流域は水上(3)遺跡として青森県遺跡台帳に新規登録された。

平成18年11月に津軽ダム工事事務所及び県文化財保護課、県埋蔵文化財調査センターによって今後の発掘調査予定についての協議が行われ、平成19年度の発掘調査は、砂子瀬遺跡の湯ノ沢橋付け替え道路区域と水上(3)遺跡の及び美山湖右岸地区中流域のダム本体工事用道路拡幅区域を対象として発掘調査が行われることになった。なお、この調査によって美山湖右岸地区中流域は、水上(4)遺跡として新規登録されている。

平成19年度の5月8日から開始したが、周知の埋蔵文化財包蔵地に対する土木工事のための発掘に関する通知は砂子瀬遺跡と水上(3)遺跡が平成19年4月、水上(4)遺跡については同年10月に国土交通省津軽ダム工事事務所長から提出され、青森県教育委員会から事前の記録保存のための発掘調査を実施するよう指示がなされている。また、工事に伴う事前の準備や発掘調査時の安全管理及び設計変更に伴う調査区域の変更などについても、その都度関係諸機関と協議を行いながら調査を進めた。

## 第2節 調査要項

1 調査目的	津軽ダム建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する美山湖右岸地区外の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財活用に資する。	
2 調査期間	平成18年9月5日（火）から同年10月27日（金）まで	
3 遺跡名及び所在地	美山湖右岸地区（青森県遺跡番号 未登録） 中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上ほか 砂子瀬村元遺跡（青森県遺跡番号 25014） 中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字村元 砂子瀬遺跡（青森県遺跡番号 25008） 中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字宮元	
4 調査面積	美山湖右岸地区 約5,000m <sup>2</sup> （調査対象面積約155,000m <sup>2</sup> ） 砂子瀬村元遺跡 約300m <sup>2</sup> （調査対象面積約20,000m <sup>2</sup> ） 砂子瀬遺跡 約2,200m <sup>2</sup> （調査対象面積約50,000m <sup>2</sup> ）	
5 調査委託者	国土交通省 東北地方整備局 津軽ダム工事事務所	
6 調査受託者	青森県教育委員会	
7 調査担当機関	青森県埋蔵文化財調査センター	
8 調査体制	調査指導員 藤沼邦彦 国立大学法人 弘前大学 人文学部教授 (考古学・平成20年3月退職) 調査員 島口天 青森県立郷土館 学芸主査(地質学) 調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター 所長 白鳥隆昭(現青森県立郷土館館長) 次長(調査第一GL兼務)三浦圭介(平成19年3月退職) 総務GL 櫻庭孝雄 総括主幹 成田滋彦(現副参事) 文化財保護主幹 中嶋友文(現総括主幹) 調査補助員 小幡育恵・渡辺陽一・赤坂啓明	

## 第3節 調査方法と整理方法

### （調査方法）

平成18年度の調査は、当初津軽ダムの満水区域に所在する美山湖右岸地区（青森県遺跡台帳に未登録の3地域）について、包含層の厚さ及び遺構・遺物の分布密度の把握と遺跡範囲を確定ための調査である。しかし、10月上旬の豪雨により美山湖の水位が上昇したため、10月中旬から美山湖右岸地区的調査を中断して、砂子瀬遺跡の範囲確認調査に変更している。

グリッド設定については、津軽ダム工事の下請け業者が、津軽ダム貯水池用地測量で設置した4級水準点から、公共座標軸（旧日本測地系）に合わせて50mメッシュで基準杭を設置した（後の測量結果では西に70mほどずれているのが判明している）。また、標準原点を平成12年度付替県道実施

路線測量で設置した KBM3( H=185.6 m ) を与点として調査区内に数ヶ所設置した。

調査は基準杭を基点として、基準杭の両脇10mの立木の伐採と蓋などの下草刈りを行い4m幅で20~30mのトレンチを設定した。表土の除去や遺構・遺物に支障ない部分の掘り下げには重機を使用し、便宜上地域ごとにトレンチ番号を付けた。

遺構は、その種類に応じて仮の表記を付した。豊穴住居跡；S I、土坑；S K、焼土遺構；S N等であるが、精査していないため遺構かどうか判断できない風倒木痕などの落ち込みもとりあえず記載してある。

遺物の取り上げは、トレンチごとに層単位で行った。基本層序の注記は『標準土色帖』を用いた。

写真の撮影にあたっては、35mmの一眼レフカメラとデジタルカメラを併用し、フィルムはモノクローム、カラーリバーサルの各フィルムを使用した。

#### ( 整理方法 )

整理は、当センターにて美山湖右岸地区及び砂子瀬遺跡から出土した遺物を水洗いし、乾燥させ、注記をした後、地区ごとに分けて作業を行った。土器は地区ごとの接合作業が終了後に、復元実測の可能な土器と器種・時期がある程度分かる土器破片を選択し断面実測及び拓本を行った。石器は地区ごとに、器種や代表的な形態ものを選択し実測した。また、土製品・石製品はすべて実測し掲載した。なお、掲載遺物には観察表を付している。

## 第4節 調査経過

9月 5日 現場開始日。調査器材を搬入し周辺の整備を行うとともに、美山湖右岸地区上流域を重機（バックホー）によるトレンチの掘り下げを行う。

9月 6日 本日より重機を2台稼働させる。作業員はトレンチの遺構確認を行う。

9月19日 美山湖右岸地区の重機によるトレンチの掘り下げを終了する。

9月20日 砂子瀬村元遺跡の重機によるトレンチの掘り下げを開始する。

9月22日 美山湖右岸地区上流域、砂子瀬村元遺跡のトレンチ脇の排土が、増水時に流出しないよう重機で填圧する。

9月28日 美山湖右岸地区から中流地区への通路を確保するため草刈りを行う。

10月10日 10月6日からの豪雨により、美山湖右岸地区的上流域の一部を除いて、中流域、下流域、砂子瀬村元遺跡が水没したため、津軽ダム工事事務所担当者と協議の結果、10月17日より砂子瀬遺跡の重機によるトレンチの掘り下げを開始し、順次遺構確認を行うこととなった。

10月12日 藤沼調査指導員と島口調査員による現地指導が行われる。

10月20日 津軽ダム工事事務所にて、工務課、県文化財保護課、県埋蔵文化財調査センターの三者による今後の工事予定及び調査予定の協議が行なわれた。

10月27日 調査終了日。発掘調査器材及び出土遺物等を当センターに搬出して調査を終了した。

( 中嶋 )

## 第5節 遺跡の位置と周辺の遺跡（図1）

西目屋村には現在 29 の遺跡が登録（平成 20 年 12 月現在）されており、特に目屋ダムのある美山湖周辺に 14 の遺跡が周知されており、今後確認調査が必要な区域も 4カ所存在する。

平成 3 年に、青森県教育委員会が分布調査を実施し、砂子瀬地域では、水上遺跡、芦沢(1)(2)遺跡、川原平地域では、大川添(1)(2)遺跡、川原平(3)(4)(5)といった遺跡が新たに発見されている。平成 18 年度の確認調査結果から、新たに水上(2)(3)(4)遺跡が青森県の遺跡台帳に登録され、従来の水上遺跡は水上(1)遺跡に名称が変更となった。



番号	遺跡名	遺跡番号	時代	種別	番号	遺跡名	遺跡番号	時代	種別
	砂子瀬遺跡	25008	縄文	散布地	10	川原平(1)遺跡	25009	縄文	散布地
	水上(3)遺跡	25026	縄文	散布地	11	川原平(2)遺跡	25010	平安	散布地
	水上(4)遺跡	25029	縄文	散布地	12	川原平(3)遺跡	25016	縄文	散布地
1	稻葉(2)遺跡	25006	平安	散布地	13	川原平(4)遺跡	25022	縄文	散布地
2	灘の上遺跡	25024	縄文	散布地	14	川原平(5)遺跡	25023	縄文	散布地
3	芦添遺跡	25007	縄文	散布地	15	大川添(1)遺跡	25018	縄文	散布地
4	寒沢遺跡	25015	縄文	散布地	16	大川添(2)遺跡	25019	縄文	散布地
5	水上遺跡	25017	縄文	集落跡	17	燒山遺跡	25011	縄文	散布地
6	水上(2)遺跡	25025	縄文	集落跡	18	大川添右岸	未登録		
7	砂子瀬村元遺跡	25014	縄文	散布地	19	大川添左岸	"		
8	声沢(1)遺跡	25020	縄文	散布地	20	奥山湖左岸(中流域)	"		
9	芦沢(2)遺跡	25021	縄文	散布地	21	奥山湖左岸(下流域)	"		

図 1 津軽ダム周辺の遺跡

## 第6節 調査トレンチと基本層序(図2)

砂子瀬遺跡と美山湖右岸地区(上流域・中流域)は、広範囲な上に削平や造成が行われているため、本節では各試掘箇所(図4)の堆積状況に図示する。

### 水上(2) 遺跡(美山湖右岸地区上流域)

- I層：造成による盛土。層厚10~45cm。
- II層：褐色土 10YR4/4 層厚20~70cm。礫( $\varphi \sim 10\text{ cm}$ )を含む粘土質土。一部砂質土を含む。
- III層：黄褐色土 10YRS/6 層厚70cm。調査区の東側にのみ検出される粘土層。一部に小礫( $\varphi \sim 5.0\text{ cm}$ )を少量含む。
- IV層：にぶい黄褐色土 10YRS/4 層厚不明。砂質土。礫層( $\varphi \sim 30\text{ cm}$ )。

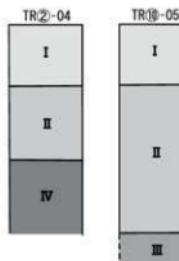
### 水上(3)・(4) 遺跡(美山湖右岸地区中流域・下流域)

- I層：水没による二次堆積土。層厚10~20cm。
- II層：暗灰色土 10YR3/1 層厚15~20cm。旧耕作土。
- III層：暗褐色土 10YR3/3 層厚10~30cm。小礫( $\varphi \sim 5.0\text{ cm}$ )、炭化物を微量に含む。
- IV層：黄褐色土 10YRS/4 層厚20~40cm。粘土質土。小礫( $\varphi \sim 5.0\text{ cm}$ )を微量含む。
- V層：にぶい黄褐色土 10YRS/4 層厚不明。砂質土。礫層( $\varphi \sim 30\text{ cm}$ )。

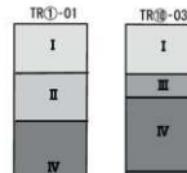
### 砂子瀬遺跡

- I層：造成による盛土。層厚10~80cm。
- II層：暗褐色土 10YR3/3 層厚10~40cm。小礫( $\varphi \sim 3.0\text{ cm}$ )、炭化物を微量に含む。
- III層：褐色土 10YR4/4 層厚10~20cm。小礫( $\varphi \sim 5.0\text{ cm}$ )、炭化物を微量に含む。
- IV層：黄褐色土 10YRS/8 層厚不明。粘土質土。小礫( $\varphi \sim 2.0\text{ cm}$ )、炭化物を微量に含む。
- V層：にぶい黄褐色土 10YRS/4 層厚不明。砂質土。礫層( $\varphi \sim 70\text{ cm}$ )。

### 水上(2) 遺跡



### 水上(3)・(4) 遺跡



### 砂子瀬遺跡

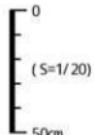


図2 基本層序

## 第7節 検出遺構と出土遺物

### 第1項 検出遺構（図3）

水上(2)遺跡（美山湖右岸上流地区）では、確認調査トレンチから縄文時代の竪穴住居跡1軒、石棺墓2基を確認できたが、水上(3)遺跡（美山湖右岸下流地区）・水上(4)遺跡（美山湖右岸中流地区）では、豪雨により充分な試掘調査ができなかったため遺構は確認されていない。砂子瀬村元遺跡では、確認調査トレンチから旧集落の石積みや礎石が確認したが、それ以上掘り下げていないため遺構の有無は不明である。また、砂子瀬遺跡では、確認調査トレンチから縄文時代と思われる土坑2基を確認した。



図3 確認調査での検出遺構

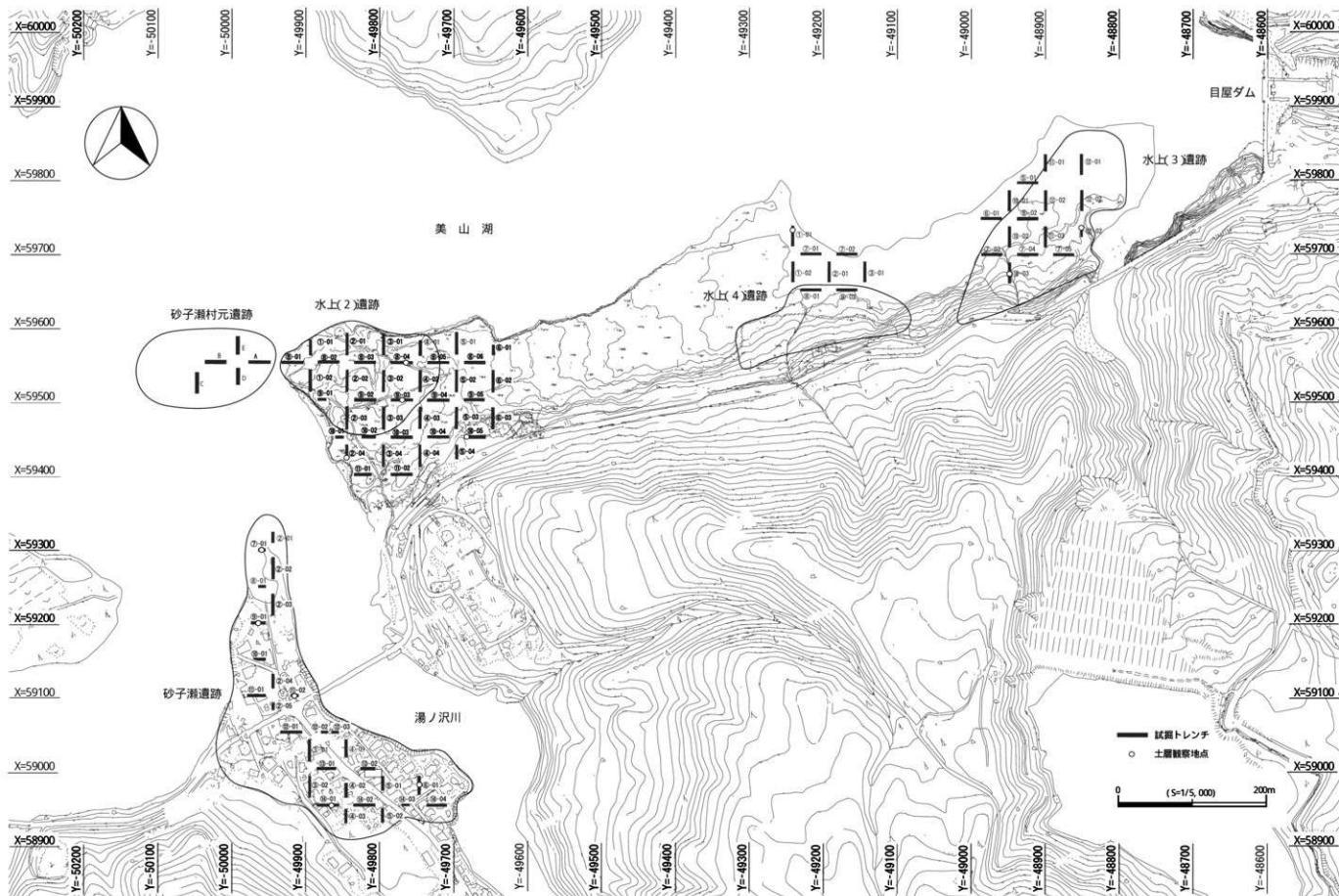


図4 トレンチ配置図

## 第2項 出土遺物

### 1 土器( 図5～6)

今回の調査で出土した縄文土器は、段ボール箱で12箱分である。水上(2)遺跡(美山湖右岸上流地区)から9箱、水上(3)遺跡(美山湖右岸下流地区)で数点、砂子瀬村元遺跡と砂子瀬遺跡からそれぞれ1箱が出土している。出土した土器は、各遺跡によって時期的に若干の違いがみられる。

縄文土器については、下記のとおり分類した。

第I群 縄文時代早期の土器

第II群 縄文時代前期の土器

第III類 縄文時代中期の土器

第IV群 縄文時代後期の土器

1類 後期初頭から前葉の土器 2類 後期中葉の土器 3類 後期後葉の土器

第V群 縄文時代晚期の土器

1類 晩期前葉の土器 2類 晩期中葉の土器 3類 晩期後葉の土器

水上(2)遺跡(美山湖右岸上流地区)

当該地区で出土した縄文土器は、中期から後期を中心に段ボール箱で9箱分であり、第I群の土器は出土していない。

第II群 縄文時代前期の土器(図5-1・2)

いずれも口縁部に側面圧痕が施されるものである。

第III群 縄文時代中期の土器(図5-3～25・32)

第III群では、中期後半の土器が比較的多く出土し、25・32は円筒上層d式、19～21は最花式とみられる。

第IV群 縄文時代後期の土器(図5-26～30)

1類 後期初頭から前葉の土器

26は切断蓋付土器の紐を通す把手と思われる。14は沈線、32は条線文で後期前半の十腰内I式土器とみられる。

第V群 縄文時代晚期の土器(図5-31)

小型の深鉢でやや薄手の土器である。

水上(3)遺跡(美山湖右岸下流地区)(図6-1～4)

当該地区的縄文土器は、後期後半から晩期とみられる土器破片が数点出土している。

砂子瀬村元遺跡(図6-1～4)

当該地区で出土した縄文土器は、中期後半(5～9)と後期初頭から前葉(10～12)の土器で、11は沈線文、12は網目状でいずれも後期前半の十腰内I式土器とみられる。

砂子瀬遺跡(図6-13～40)

当該地区的縄文土器は、後期から晩期の土器が出土しており、19・20は鍵状沈線と櫛齒状条線、22～24は網目状、33～37は壺形で、いずれも後期前半の十腰内I式土器とみられる。40は晩期前葉の土器である。

(中嶋)

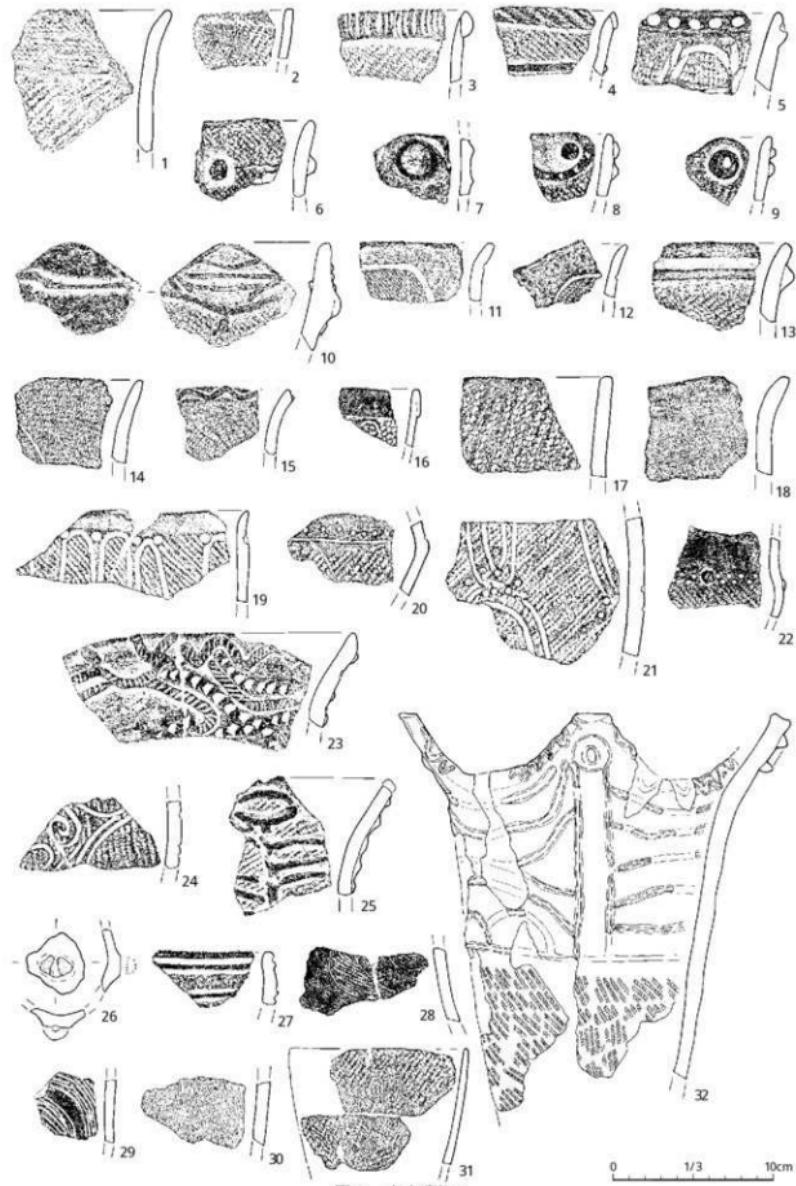


図5 出土遺物 1

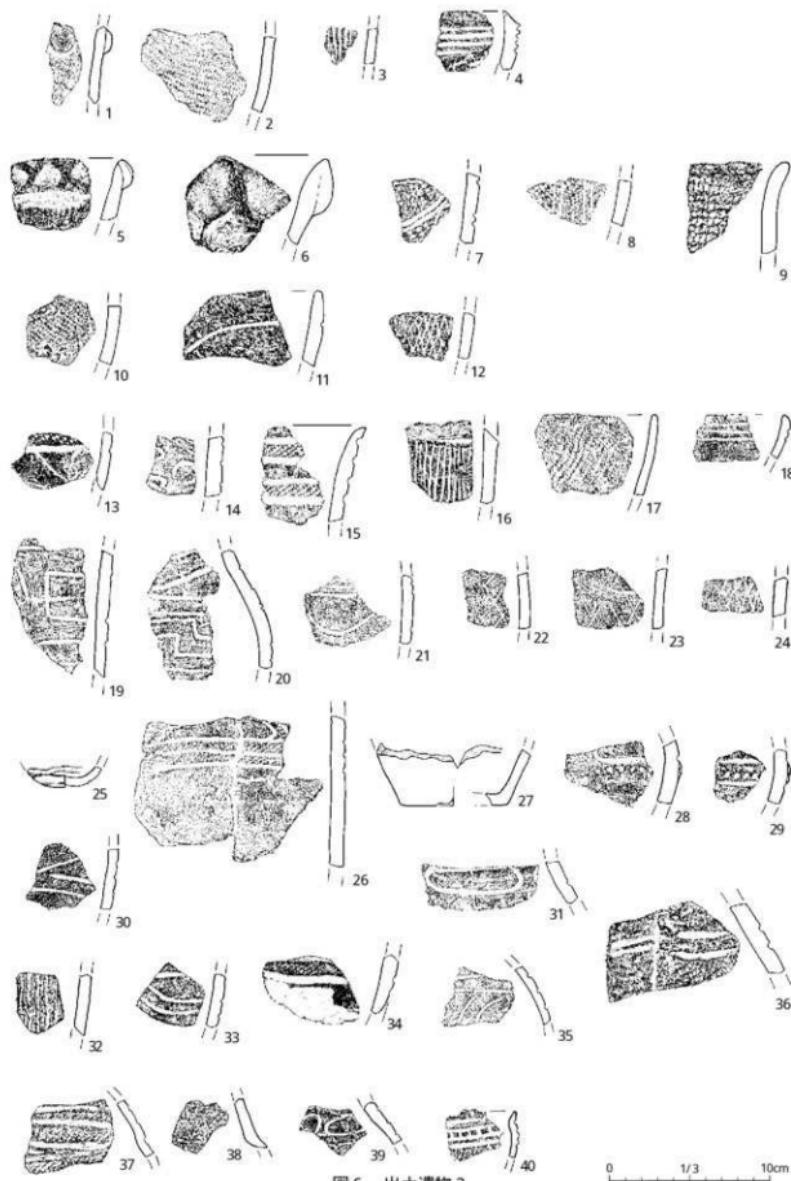


図6 出土遺物2

## 2 石器（図7・8）

水上(2)遺跡（美山湖右岸上流地区）

段ボール箱にして6箱分が出土した。剥片石器は20点を、礫石器は11点を図示した。

剥片石器（図7-1～20）1～5は凹基石鎌、6～8が有茎石鎌である。1～3は両面の基部にアスファルトが残る。9は形状と大きさから石槍とした。10、11は石範で、10は撥型、11は全体形不明である。12は横型の石匙である。13～15は捶器で13と14は下端部に急角度の刃部を形成しているが、15は幅広の洋梨型で石材のほぼ全周縁を調整して円形の刃部を作り出している。13は側縁を削器としていた可能性もある。16～20は削器で側縁に刃部を作る。

礫石器（図8-1～9）敲磨器類が大半を占める。使用痕により、次のように分類した。

I類 使用痕が擦りのみのもの：1は円柱形の礫の2面を使用し、端のややすぼった太鼓のような形に整形され、整形時の打痕や研磨、使用時の擦痕が、使用面も含め全体に残っている。

2は円礫の3面、3はしゃもじ形の礫の平坦面1面を使用している。

II類 使用痕が擦り+叩きのもの：4は側縁～下端部に叩き、残存する自然面には弱い擦痕が見られる。5は角柱状の礫の稜線部に擦り、端部の平坦面1面に叩きの使用痕が見られる。6は球状礫の1面ずつに叩きと擦りの使用痕が見られる。

III類 使用痕が擦り+凹みのもの：出土していない。

IV類 擦り+叩き+凹みのもの：出土していない。

V類 使用痕が叩きのみのもの：7は石範の再利用品で、2側縁を使用している。

VII類 使用痕が凹みによるもの：いずれも扁平な梢円礫を用い、8は表面1面、9は表裏2面を使用している。

磨製石斧（図8-10）基部が欠損しているもので刃部には擦痕と刃こぼれが見られる。断面は隅丸長方形に近い。裏面に整形時の叩き痕が残る。

石皿（図8-11）側縁部と表面に使用痕が見られるもので、裏面側縁部の一部に炭化物のような付着物が確認できる。縁の有無は不明である。

砂子瀬村元遺跡

段ボール箱で1箱分が出土し、剥片石器4点を図示している。

剥片石器（図7-21～24）石鎌は有茎と平基が1点ずつで、23、24は削器で側縁を使用している。

砂子瀬遺跡

段ボール箱で1箱分が出土している。このうち剥片石器が5点中4点、礫石器2点を図示した。

剥片石器（図7-25～28）28は有茎の石鎌で、基部の抉りが浅い。25は器体の上部と下部で幅が違い、石範の未製品か再加工品と思われる。26は削器で側縁を使用している。27は捶器で下端部を加工している。

礫石器（図8-12、13）敲磨器類のI類が1点、V類が1点出土した。12はデイサイト製で、円柱状の礫の両端部を使用している。13は凝灰岩製で、卵形の礫の下端部を使用している。

（佐藤・菅原）

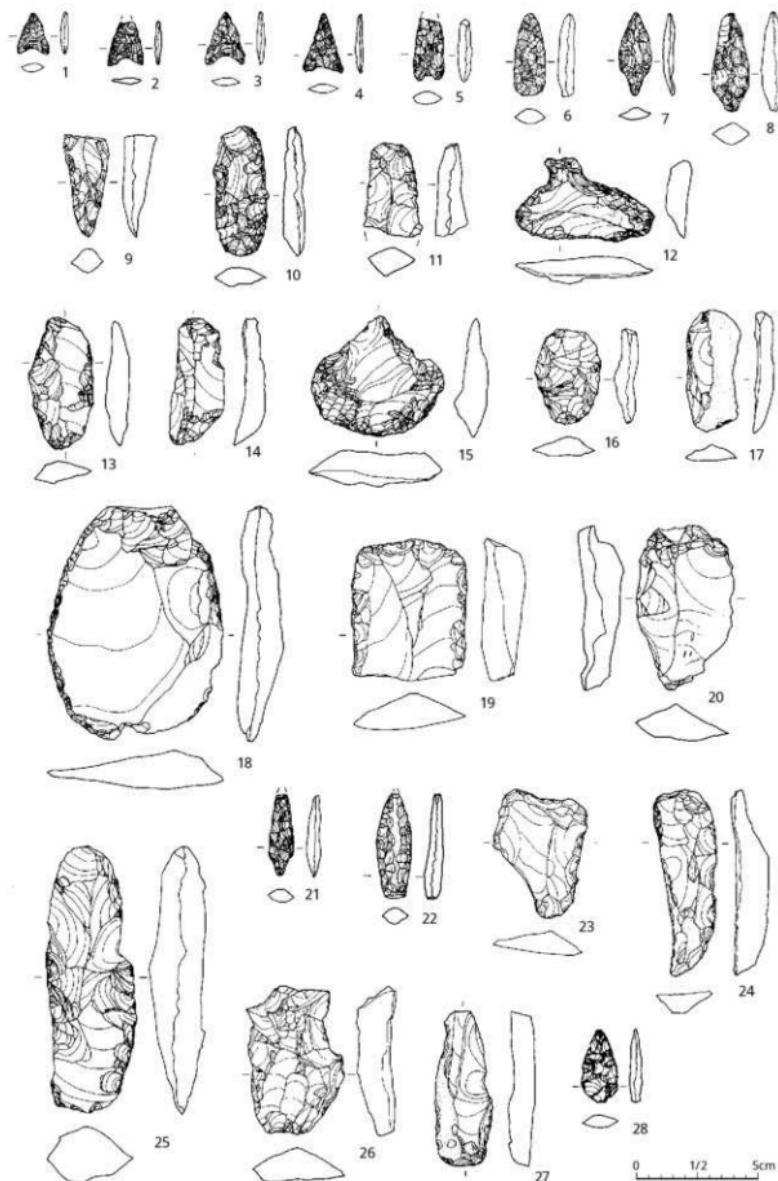


図7 出土遺物3

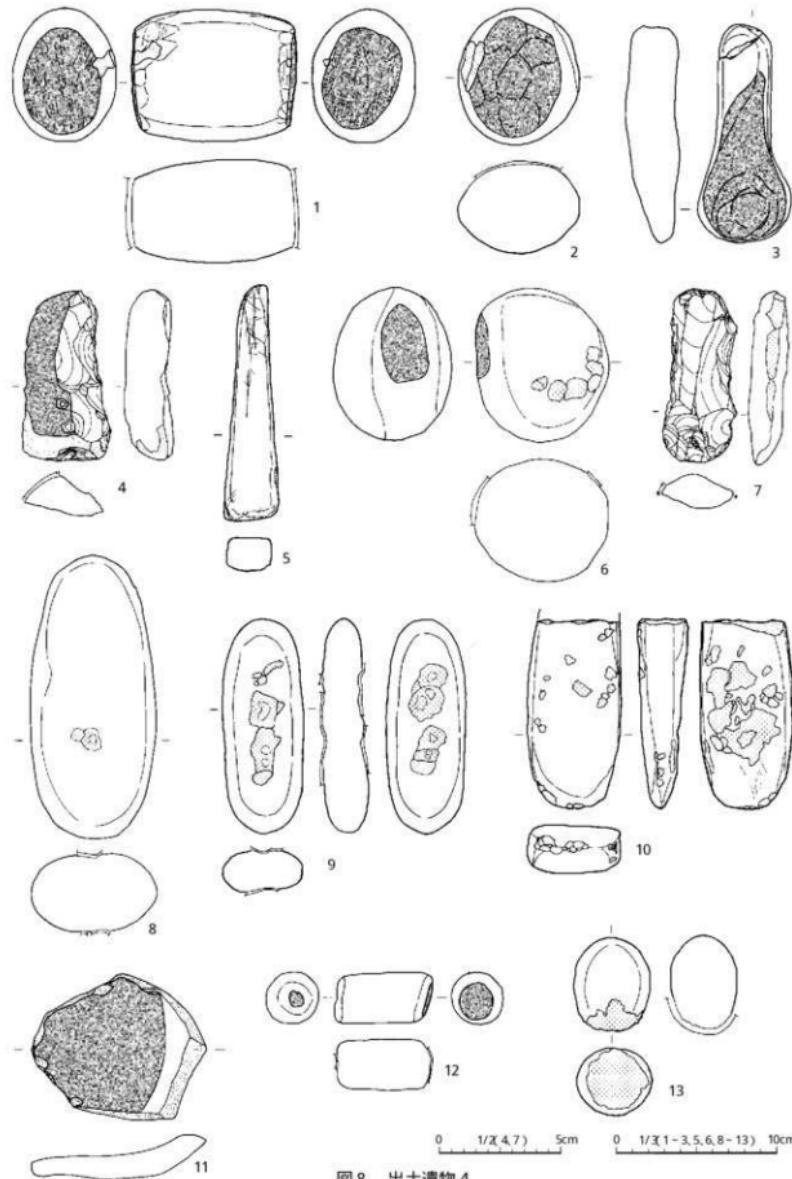


図8 出土遺物 4

## 第8節 確認調査のまとめ

今回の確認調査によって美山湖右岸地区の上流域は水上(2)遺跡、中流域が水上(4)遺跡、下流域が水上(3)遺跡として新規登録された。以下に調査成果について記述する。

### 1 遺跡の立地

白神山地の東部に位置する砂子瀬遺跡と美山湖右岸地区の遺跡は、岩木川右岸の河岸段丘上に位置する。調査区の標高は160～200mの緩やかな緩斜面で、砂子瀬遺跡を除いた美山湖右岸地区及び砂子瀬村元遺跡はダム湖の増水期には大部分が水没しており、特に砂子瀬村元遺跡は渇水期のみ確認できる状況である。現況は、砂子瀬遺跡は宅地や畠地であるが、美山湖右岸地区は旧砂子瀬集落が移転し40年以上が経っているため、里山のような雜木林と蘆原が広がっている。また、砂子瀬村元遺跡は、旧集落跡に1m以上の泥が堆積している状況であった。

### 2 検出遺構

確認調査で検出した遺構は、水上(2)遺跡で竪穴住居跡1軒と石棺墓2基を確認している。水上(3)遺跡及び水上(4)遺跡では、10月上旬の集中豪雨により調査を継続できなかたため遺構は確認されていない。砂子瀬村元遺跡も、堆積している泥を掘り下げ、旧集落の石積み跡まで確認したが、増水したためそれ以上の調査はできなかった。ダム湖の水位に直接関係ない砂子瀬遺跡では、縄文時代と思われる土坑を2基確認している。

### 3 出土遺物

出土した遺物は、おもに縄文時代の土器や石器で、水上(2)遺跡が段ボール箱で19箱、水上(3)遺跡、砂子瀬村元遺跡、砂子瀬遺跡でそれぞれ段ボール箱で1箱づつ出土している。

### 4まとめ

調査の結果、砂子瀬村元遺跡を除く調査対象区域の大部分が、旧砂子瀬集落の宅地や畠地の造成による影響と目屋ダム建設時の盛土や削平を受けていることが判明した。

水上(2)遺跡は、一部礫層まで削平されている区域がみられるものの、岩木川や湯ノ沢川に接する縁辺部には遺構や遺物を確認でき、次年度以降の調査必要面積は約20,000m<sup>2</sup>と想定される。

水上(3)遺跡と水上(4)遺跡では、調査の中でトレンチが水没したため詳細は不明である。しかし、確認できたトレンチは、田畑の造成により礫層まで削平されていた。次年度以降の範囲確認を含めた調査対象面積は、水上(3)遺跡が27,000m<sup>2</sup>、水上(4)遺跡が約16,000m<sup>2</sup>である。

砂子瀬村元遺跡は、旧集落の確認面で縄文時代の遺物が出土しており調査必要面積は約20,000m<sup>2</sup>と考えられる。

砂子瀬遺跡の平坦部は、旧砂子瀬集落の人々がダム建設に伴い移転した時、かなり大規模な宅地や畠地の造成が行われており、一部、湯ノ沢川縁辺部に遺構や遺物がみられる。本調査が必要な面積は約25,000m<sup>2</sup>で、未買収などにより確認できなかた区域の面積は約9,000m<sup>2</sup>である。

## 第2章 平成19年度の発掘調査

### 第1節 調査要項

1 調査目的	津軽ダム建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する西目屋村砂子瀬遺跡外の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財活用に資する。	
2 調査期間	平成19年5月8日(火)から同年10月31日(金)まで	
3 遺跡名及び所在地	砂子瀬遺跡 (青森県遺跡番号 25008) 中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字宮元9外 水上(3)遺跡 (青森県遺跡番号 25026) 中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上 水上(4)遺跡 (青森県遺跡番号 25029) 中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上	
4 調査面積	砂子瀬遺跡 約13,300m <sup>2</sup> (調査対象面積約22,000m <sup>2</sup> ) 水上(3)遺跡 約2,100m <sup>2</sup> (調査対象面積約27,000m <sup>2</sup> ) 水上(4)遺跡 約4,500m <sup>2</sup> (調査対象面積約16,000m <sup>2</sup> )	
5 調査委託者	国土交通省 東北地方整備局 津軽ダム工事事務所	
6 調査受託者	青森県教育委員会	
7 調査担当機関	青森県埋蔵文化財調査センター	
8 調査体制	調査指導員 藤沼邦彦 国立大学法人 弘前大学 人文学部教授 (考古学・平成20年3月退職) 調査員 葛西勵 前青森短期大学教授(考古学) 調査員 島口天 青森県立郷土館 学芸主査(地質学) 調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター 所長 末永五郎(平成20年3月退職) 次長(調査第一GL兼務)三宅徹也(平成20年3月退職) 総務GL 櫻庭孝雄 総括主幹 中嶋友文 文化財保護主査 工藤忍 文化財保護主査 佐藤純子 文化財保護主事 神昌樹(現文化財保護主査) 調査補助員 西本結美・館山昌生・小鹿伸輔 " 野月夕湖・新矢直之・成田巖人 " 斎藤裕恵・成田舞子	

## 第2節 調査方法と整理方法

### ( 調査方法 )

平成19年度の調査は、砂子瀬遺跡が湯ノ沢橋付け替え工事用道路部分の発掘調査とダム工事用道路の拡幅に伴う水上(4)遺跡と水上(3)遺跡の範囲確認を含めた発掘調査である。

グリッド設定は、砂子瀬遺跡は工事用基準杭(T1, T2)より移設した。水上(3)・(4)遺跡も工事団面に設けられた道路のセンター杭より移設し、公共座標軸(世界測地系)で位置を把握した。標準原点は平成12年度付替県道実施路線測量で設置した KBM 3(H=186.3m) を与点として砂子瀬遺跡と水上(3)・(4)遺跡の調査区内に数ヵ所設置した。

砂子瀬遺跡及び水上(3)・(4)遺跡の調査は、平成18年度の調査で確認したトレンチの層序を参考にして表土の除去には重機を使用した。また、基準杭を基点としたグリッド法を行い、4m四方のグリッドを設定した。グリッドは東西方向に算用数字、南北方向にローマ数字とアルファベットを組み合わせて付し、その呼称は南西隅の杭番号を使用している。

遺構は、その種類に応じて仮の表記を付した。竪穴住居跡；S I、土坑；S K、焼土遺構；S N、埋設土器；M P、配石(集石)；S Q等である。

遺物の取り上げは、トレンチごとに層単位で行った。基本層序の注記は『標準土色帖』を用いた。

写真の撮影にあたっては、35mmの一一眼レフカメラとデジタルカメラを併用し、フィルムはモノクローム、カラーリバーサルの各フィルムを使用した。

### ( 整理方法 )

整理は、当センターにて水上(3)・(4)遺跡及び砂子瀬遺跡出土の土器・石器を水洗いし、乾燥させ注記をした後、地区ごとに分けて作業を行った。土器は地区ごとの接合作業が終了後復元実測の可能な土器と器種・時期がある程度分かる土器破片を選択し断面実測及び拓本を行った。石器は地区ごとに、器種や代表的な形態ものを選択し実測した。また、土製品・石製品はすべてを実測し掲載した。遺物の実測が終了次第、写真撮影を行っている。なお、報告書の掲載遺物には観察表を付している。



### 第3節 調査経過

- 5月 7日～24日 砂子瀬遺跡C地区の重機による表土処理及び排土移動を開始する。
- 5月 8日 現場開始日、調査器材を搬入し周辺の整備を行い、午後から遺構確認を開始し、グリッド杭の敷設、ベンチ・マークの移動も並行して行った。
- 5月29日～31日 砂子瀬遺跡D地区の重機による表土処理及び排土移動を行う。
- 6月13日 西目屋村村長、村会議員ほか二十数名が現場を視察する。
- 6月19日～27日 水上(4)遺跡の重機によるトレンチの掘り下げを行う。
- 6月21日 島口調査員による地質の現地指導を行う。
- 7月 4日 砂子瀬遺跡D区のラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。
- 7月 5日 現場プレハブにて、津軽ダム工務課、工事課、工事担当者、埋文センターによる今後の予定についての協議が行われる。
- 7月10日～26日 砂子瀬C区の表土処理及び排土移動を行う。
- 7月26日～8月24日 水上(4)遺跡の重機による表土処理及び排土移動と遺構確認を行う。
- 8月 2日 水上(3)遺跡の優先地区的調査を開始する。
- 8月 7日 前日からの豪雨により美山湖の水位が上昇し、水上(3)遺跡の調査を一時中止する。
- 9月12日 水上(3)遺跡の優先地区的調査を終了する。
- 9月19日 水上(4)遺跡の発掘調査を開始する。
- 10月10日 現場事務所にて、津軽ダム工務課、県文化財保護課工事課、県埋蔵文化財センターによる今後の予定についての協議が行われる。
- 10月26日 水上(4)遺跡の発掘調査を終了する。
- 10月29日 豪雨の中、名古屋教育次長が現場を視察する。
- 10月30日 砂子瀬C区、E区の未調査部分をシートで保護し、午後から発掘調査器材等を越冬プレハブに収納する。
- 10月31日 発掘調査器材の一部と出土遺物等を当センターに搬出し、調査を終了する。 (中嶋)



## 第3章 砂子瀬遺跡

### 第1節 基本層序 (図9)

砂子瀬遺跡の平坦部は、旧砂子瀬集落が移転する際に造成したため削平や盛土による影響を受けており、基本層序のⅡ層やⅢ層が確認できない区域も存在する。

Ⅰ層：造成による盛土 層厚 10 ~ 80 cm

Ⅱ層：暗褐色土 10YR3/3 層厚 10 ~ 20 cm 小礫 ( $\varphi \sim 3.0\text{cm}$ )・炭化物を微量に含む。

Ⅲ-1層：褐色土 10YR4/4 層厚 10 ~ 20 cm 粘土質土 小礫 ( $\varphi \sim 5.0\text{cm}$ )・炭化物を微量に含む。

Ⅲ-2層：黄褐色土 10YR5/6 層厚 20 ~ 30cm 砂質土 小礫 ( $\varphi \sim 5.0\text{cm}$ )・炭化物を微量に含む。

IV層：黄褐色土 10YR5/8 層厚 30 ~ 60 cm 粘土質土 小礫 ( $\varphi \sim 2.0\text{cm}$ )・炭化物を微量に含む。

V層：にぶい黄褐色土 10YR5/4 層厚 50 ~ 80 cm 砂質土 磚層 ( $\varphi \sim 50\text{cm}$ )

VI層：褐灰色土 10YR5/1 層厚不明 砂質土 磚層 ( $\varphi \sim 70\text{cm}$ )

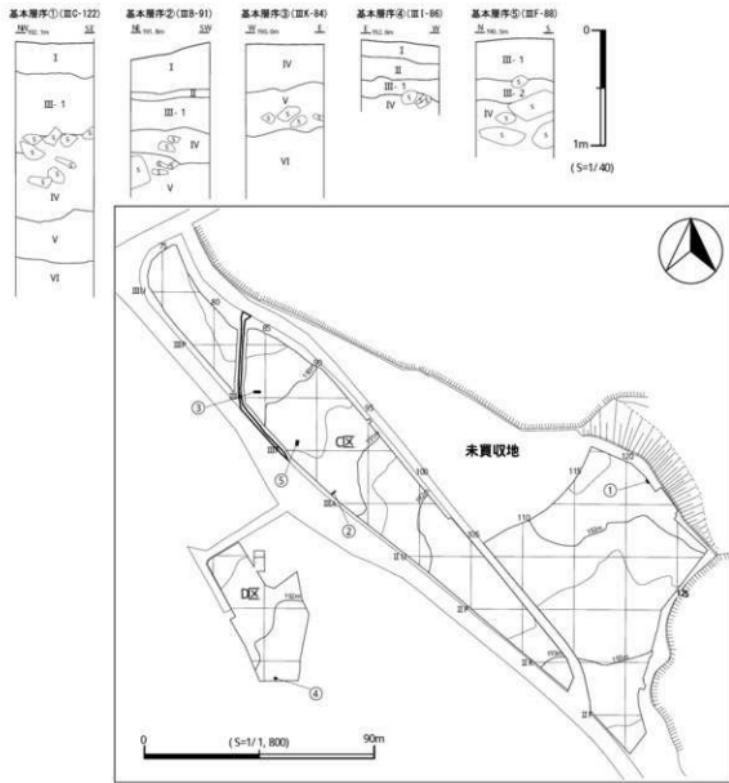
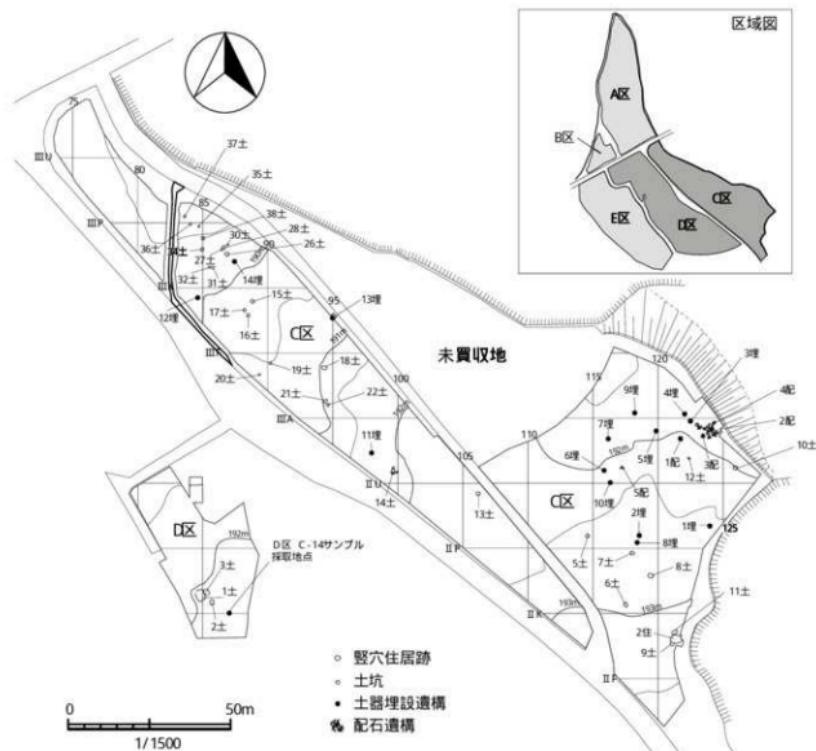


図9 基本層序

## 第2節 検出遺構と出土遺物

砂子瀬遺跡の発掘調査では、対象区域が広範囲におよぶため、便宜上道路で分断されている区域からA～E区として区別している。

縄文時代の遺構は湯ノ沢川に面した川沿いに確認され、C区からは竪穴住居跡1軒、土坑30基、配石遺構5基、土器埋設14基、屋外配石炉1基、D区から土坑3基が検出された。なお、今後の整理の都合上、C区検出遺構については平成19年度に調査が終了できず、平成20年度に調査が行われた土坑11基と土器埋設遺構1基も本報告書に記載してある。



### 第1項 検出遺構（調査区C区）

#### 1 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡は第1号屋外配石炉に変更したため欠番

第2号竪穴住居跡（図11・12）

[位置] 調査C区南東側のII J・II I- 120・121グリッドに位置している。

[重複] 南西側で第9号土坑・北側で第11号土坑、床下で第23号土坑と重複し、本遺構が最も新しいと考えられる。（※土坑の記載については、2土坑の項に記載した。）

[平面形・規模] 東側は現代の建物の基礎によって削平されているが、残存部分から東西の長さが約3m 60cm、南北の長さが2m 50cmの橢円形と推定される。

[壁・床面] 残存する壁の高さは、約35cmで、底面からほぼ垂直に立ち上がる。床面は礫層を掘り込んでいるため凹凸が見られる。

[炉] 住居跡のほぼ中心部に地床炉を検出した。規模は45×45cmで、深さ7cmである。赤褐色土の堆積土である。

[ピット] 床面からのピットは確認できなかった。

[堆積土] 確認できた堆積土は6層に分層され、いずれの層にも炭化物と礫が含まれている。

[出土遺物] 覆土から土器と石器及び土製品が出土している。

[時期] 出土した遺物から縄文時代後期前半と考えられる。

#### 2 土坑

第1号土坑～第4号土坑まで擾乱のため欠番

第5号土坑（図13・18）

[位置] 調査C区のII P・II Q- 114グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約1mの不整形で、深さは約46cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は炭化物を含んだ2層に分層される。

[出土遺物] 覆土から土器破片と剥片、礫が出土している。

第6号土坑（図13・18）

[位置] 調査C区のII K- 117グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は長軸約1m 40cm、短軸約1mの橢円形で、深さは約50cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は炭化物を含んだ2層に分層される。

[出土遺物] 覆土から土器破片と礫が出土している。

第7号土坑（図13）

[位置] 調査C区のII O- 117・118グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は長軸約1m 40cm、短軸約95cmの橢円形で、深さは約15cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層される。

[出土遺物] 覆土から礫が出土している。

2住

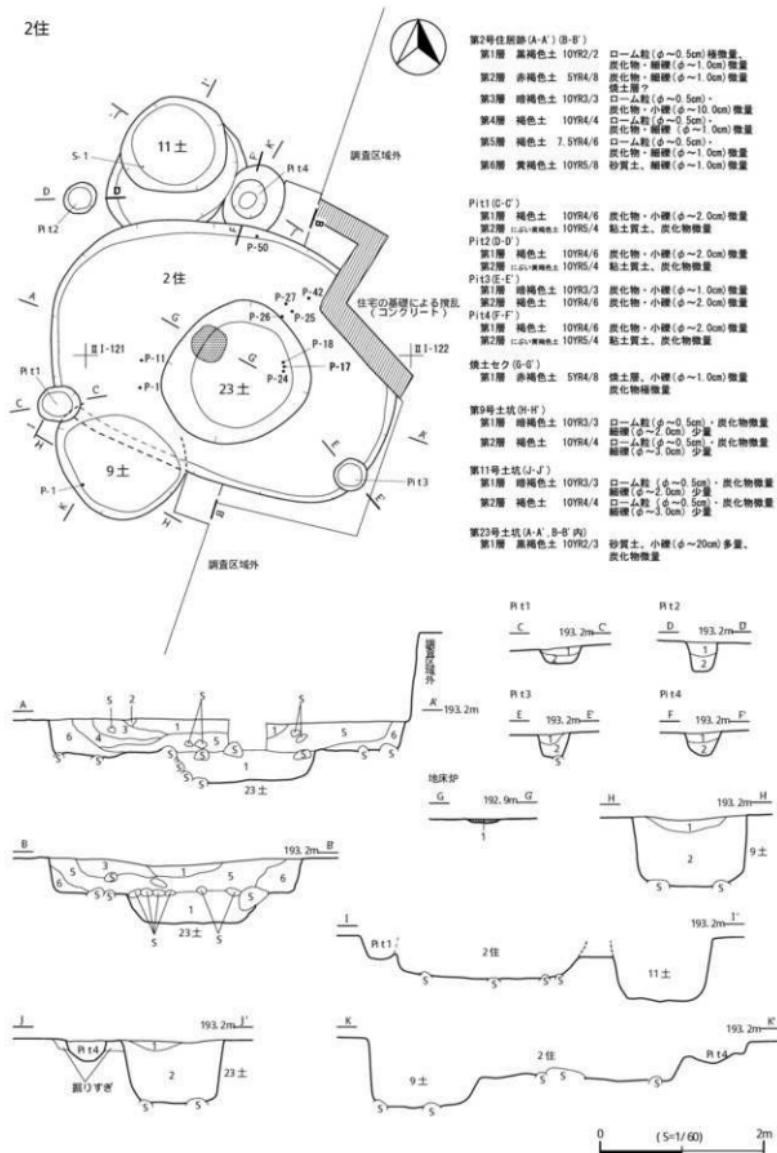


図 11 第2号住居跡・第9・11・23号土坑

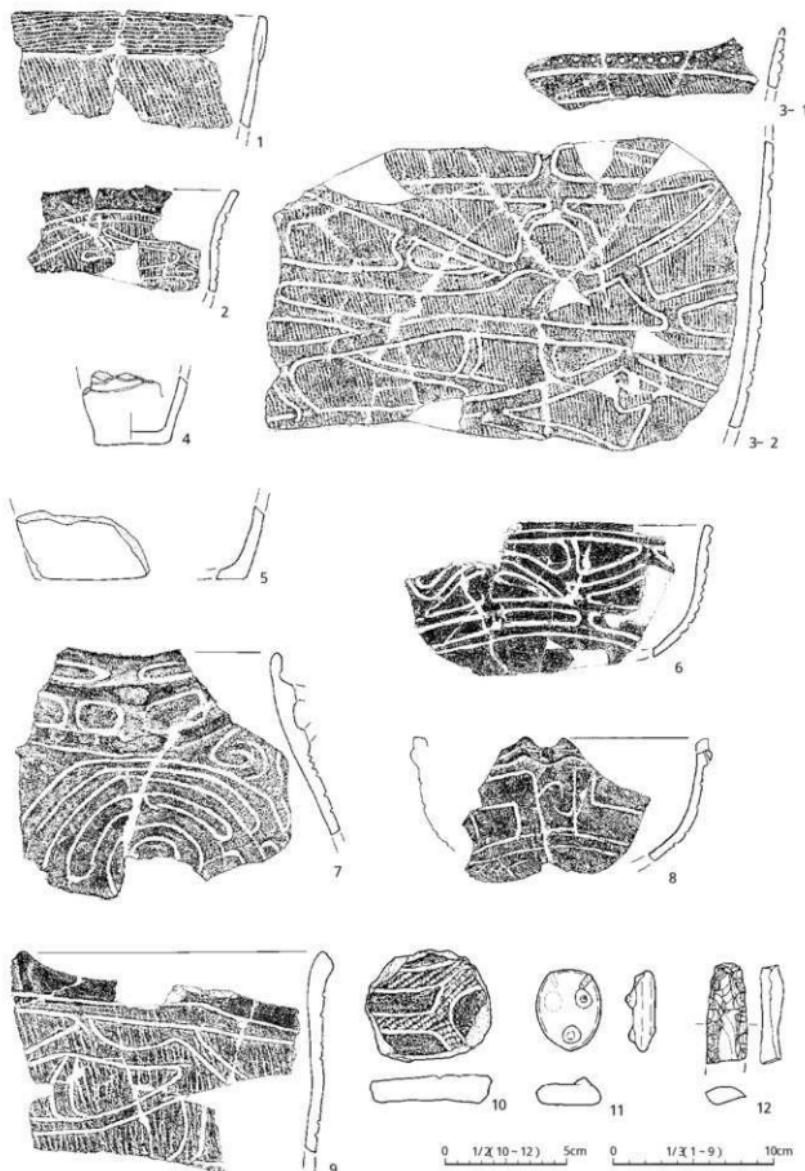


图 12 第2号竖穴住居跡 出土遺物

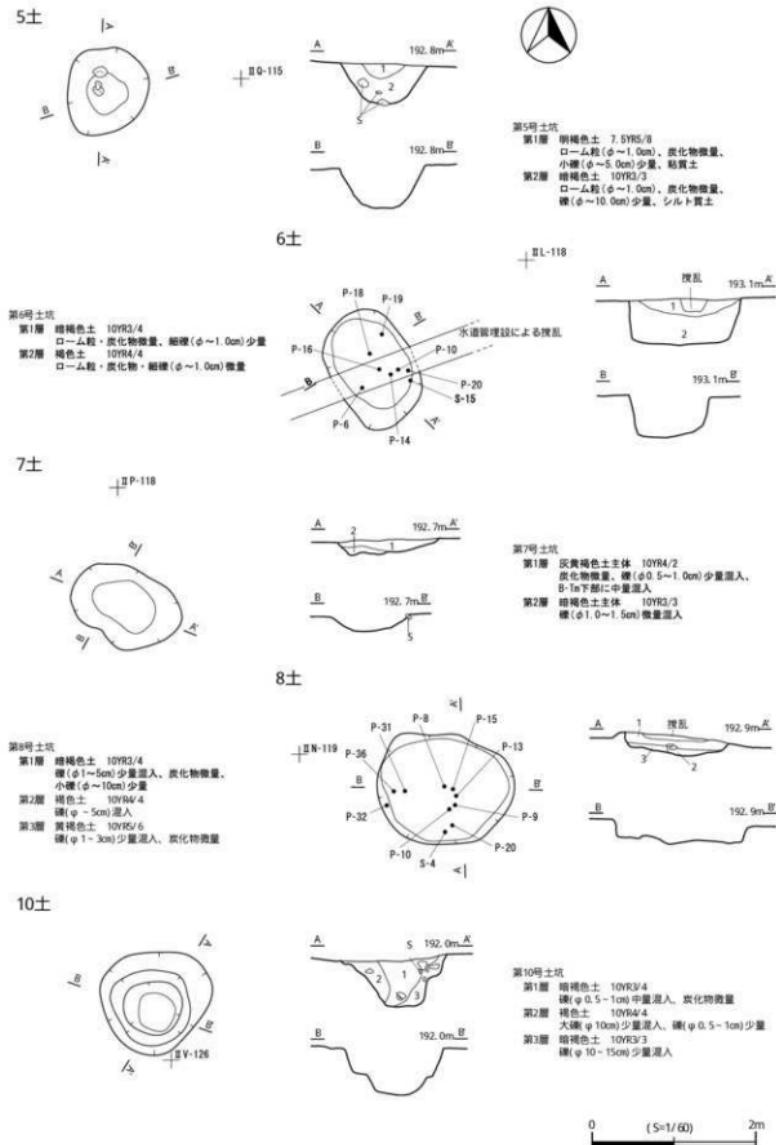


図13 土坑(1)

## 第8号土坑（図13・18）

[位置] 調査C区のII M - II N - 119 グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は長軸約1m70cm、短軸約1m30cmの不整形円形で、深さは約20cmである。

[堆積土] 上部は擾乱されており、堆積土は炭化物を含んだ3層に分層される。

[出土遺物] 覆土から土器破片と礫が出土している。

## 第9号土坑（図11・18）

[位置] 調査C区のII H - 120 - 121 グリッドに位置している。第2号竪穴住居跡と南西側で重複し、本土坑が古い。

[形態・規模] 平面形は直径約1m50cmのはば円形で、残存する深さは約90cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層され、いずれも炭化物が含まれている。

[出土遺物] 覆土から土器破片が出土している。

## 第10号土坑（図13）

[位置] 調査C区のII V - 125 - 126 グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約1m20cmの円形で、深さは約55cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は3層に分層され、炭化物が含まれている。

[出土遺物] 覆土から礫が出土している。

## 第11号土坑（図11・18）

[位置] 調査C区のII I - 121 グリッドに位置している。第2号竪穴住居跡と北側で重複し本土坑が古い。

[形態・規模] 平面形は直径約1m50cmのはば円形で、深さは約80cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は炭化材を含んだ2層に分層された。

[出土遺物] 覆土から剥片石器が出土している。

## 第12号土坑（図14・18）

[位置] 調査C区のII V - 122 グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は長軸約80cm、短軸約50cmの不整形で、深さは約25cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は炭化物と礫を含んだにぶい黄褐色土の層である。

[出土遺物] 覆土から土器破片が出土している。

## 第13号土坑（図14）

[位置] 調査C区のII T - 106 グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約1mの円形で、深さは約25cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は炭化物と小礫を含んだ暗褐色土の層である。

[出土遺物] 覆土から礫が出土している。

## 第14号土坑（図14・19）

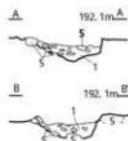
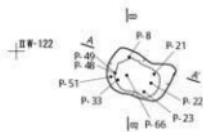
[位置] 調査C区のII U - II V - 99 グリッドに位置している。周辺にピットを2基確認した。本土坑に伴うかは不明である。

[形態・規模] 平面形は長軸約1m20cm、短軸約1mの橢円形で、深さは約50cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は炭化物を含んだ2層に分層された。

[出土遺物] 覆土から土器破片と礫が出土している。

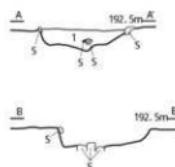
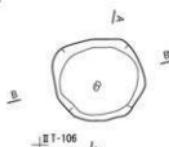
12土



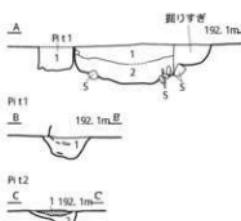
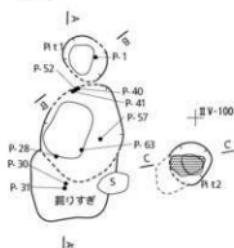
第12号土坑  
第1層 にぶい黄褐色土 10YR2/3  
礫(φ 5cm)少量、炭化物(φ 1cm)微量

13土

第13号土坑  
第1層 單褐色土 10YR2/4  
炭化物・小礫(φ - 5.0cm)微量、  
粘土ブロック混入



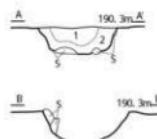
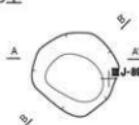
14土



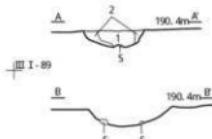
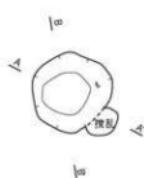
第14号土坑(A-A')  
第1層 單褐色土 10YR3/4  
炭化物・小礫(φ - 2.0cm)微量  
第2層 にぶい黄褐色土 10YR4/4  
粘土質土、炭化物・小礫(φ - 2.0cm)微量  
Pit 1(B-B')  
第1層 黄褐色土 10YR5/8  
粘土質土、小礫(φ - 2.0cm)微量  
Pit 2(C-C')  
第1層 單赤褐色土 3YR5/8  
粘土質土、炭化物・小礫(φ - 0.5cm)微量  
第2層 單褐色土 10YR3/4  
炭化物・小礫(φ 3cm)微量

15土

第15号土坑  
第1層 單褐色土 10YR2/3  
礫(φ 5-10cm)中量、粘土質土  
第2層 にぶい黄褐色土 10YR4/3  
礫(φ 1-10cm)中量、口一ム少量、粘土質土



16土



第16号土坑  
第1層 單褐色土 10YR2/3  
礫(φ 0.5-30cm)中量、粘土質  
第2層 にぶい黄褐色土 10YR4/3  
礫(φ 1-10cm)中量、口一ム少量、粘土質

0 (S=1/60) 2m

図14 土坑(2)

## 第15号土坑（図14・19）

[位置] 調査C区のIII I - III J - 88・89グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約90cmのほぼ円形で、深さは約35cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は粘土質の2層に分層される。

[出土遺物] 覆土から土器破片が出土している。

## 第16号土坑（図14）

[位置] 調査C区のIII H - III I - 88グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約1mのほぼ円形で、深さは約20cm、壁はやや緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層される。

[出土遺物] 覆土から礫が出土している。

## 第17号土坑（図15）

[位置] 調査C区のIII I - 88グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約90cmのほぼ円形で、深さは約35cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は炭化材を含んだ4層に分層された。

[出土遺物] 覆土から土器破片が出土している。

## 第18号土坑（図15・19）

[位置] 調査区C区のIII D - 94グリッドに位置し、大きな礫とともに落ち込みを確認した。

[形態・規模] 平面形は長軸約1m 60cm、短軸約1m 10cmの橢円形で、深さは約30cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層され、ともに細礫を含んだ粘土質土の層である。

[出土遺物] 覆土から土器破片が出土している。

## 第19号土坑（図15・19）

[位置] 調査区C区のIII E - 90グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約80cmのほぼ円形で、深さは約25cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は炭化物を微量に含んだ暗褐色土の層を確認した。

[出土遺物] 覆土から土器破片が出土している。

## 第20号土坑（図15・19）

[位置] 調査区C区のIII D - 89グリッドに位置し、礫とともに落ち込みを確認した。

[形態・規模] 平面形は長軸約65cm、短軸約55cmの円形で、深さは約20cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は炭化物を含んだ暗褐色土の層である。

[出土遺物] 覆土から土器破片と礫が出土している。

## 第21号土坑（図15・19）

[位置] 調査区C区のIII A - 94グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は長軸約1m 40cm、短軸約80cmの橢円形で、深さは約30cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層され、ともに炭化物と細礫を含んだ層である。

[出土遺物] 覆土から土器破片と礫が出土している。

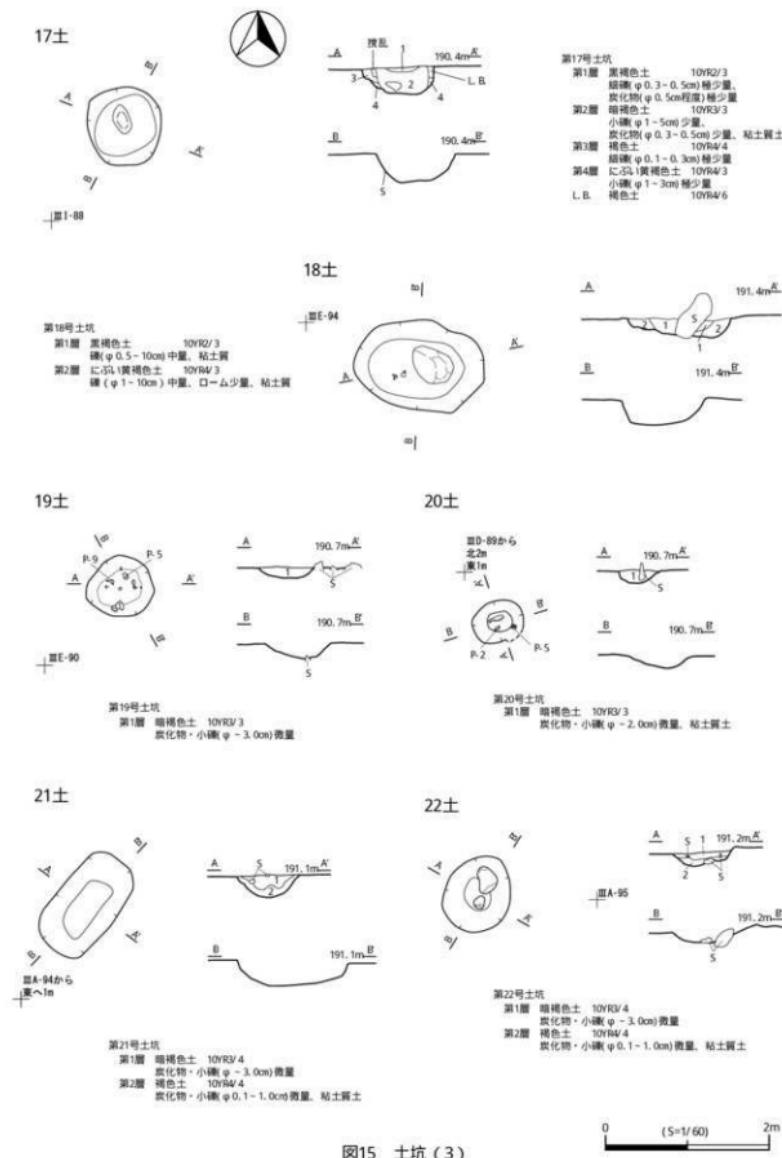


図15 土坑 (3)

## 第22号土坑（図15）

[位置] 調査区C区のIII B - 94グリッドに位置し、大きな礫とともに落ち込みを確認した。

[形態・規模] 平面形は長軸約90cm、短軸約80cmの円形で、深さは約30cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層され、ともに炭化物と細礫を含んだ層である。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

## 第23号土坑（図11）→第2号竪穴住居跡の貼床下の土坑

[位置] 調査区C区のIII H・III I - 121グリッドに位置している。第2号竪穴住居跡と重複し、本土坑が古い。

[形態・規模] 平面形は直径約1m70cmのほぼ円形で、住居跡の床面からの深さは約35cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は細礫と炭化物を含んだ砂質土の層である。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

## 第24号土坑・第25号土坑・・・欠番

## 第26号土坑（図16）

[位置] 調査C区のIII M - 85グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約1m30cmの不整形で、深さは約50cm、西よりの壁はやや内側に抉り込んで立ち上がる。

[堆積土] 確認できた堆積土は3層に分層される。

[出土遺物] 覆土から土器片と礫が出土している。

## 第27号土坑（図16）

[位置] 調査C区のIII M - 86グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は長軸約80cm、半軸約60cmの橢円形で、深さは約15cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層され、第1層に炭化物を含んでいる。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

## 第28号土坑（図16）

[位置] 調査区C区のIII N - 86グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約1m10cmの円形で、深さは約20cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層され、ともに小礫を含んだ層である。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

## 第29号土坑・・・欠番

## 第30号土坑（図16）

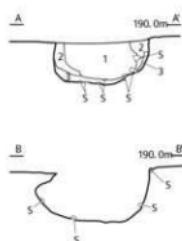
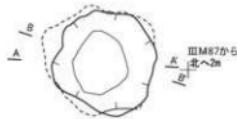
[位置] 調査区C区のIII N - 86グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約60cmのほぼ円形で、深さは約15cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層され、ともに炭化物と細礫を含んだ層である。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

26土



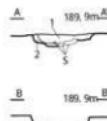
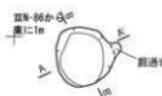
第26号土坑

- 第1層 粘褐色土 10YR3/4  
炭化物 ( $\phi \sim 0.5\text{cm}$ ) 種微量・縫隙 ( $\phi 5.0 \sim 10.0\text{cm}$ ) 少量
- 第2層 黄褐色土 10Y4/4  
縫隙 ( $\phi 2.0 \sim 3.0\text{cm}$ ) 種微量
- 第3層 黄褐色土 10Y4/6  
炭化物 ( $\phi 0.5 \sim 1.0\text{cm}$ ) 種微量・縫隙 ( $\phi 2.0 \sim 6.0\text{cm}$ ) 種微量

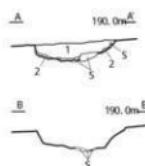
27土

第27号土坑

- 第1層 黄褐色土 10YR3/3  
炭化物 ( $\phi \sim 0.5\text{cm}$ ) 種微量・小縫隙 ( $\phi \sim 4.0\text{cm}$ ) 種微量
- 第2層 に亘る黄褐色土 10YR4/3  
小縫隙 ( $\phi \sim 0.5\text{cm}$ ) 種微量



28土



第28号土坑

- 第1層 粘褐色土 10YR3/3  
炭化物 ( $\phi \sim 0.5\text{cm}$ ) 種微量・小縫隙 ( $\phi \sim 2.0\text{cm}$ ) 種微量
- 第2層 に亘る黄褐色土 10YR4/3  
小縫隙 ( $\phi \sim 5.0\text{cm}$ ) 種微量

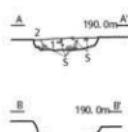
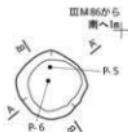
30土

第30号土坑

- 第1層 黄褐色土 10YR2/3  
炭化物 ( $\phi \sim 0.5\text{cm}$ ) 種微量・小縫隙 ( $\phi \sim 11.0\text{cm}$ ) 種微量
- 第2層 黄褐色土 10YR2/3  
炭化物 ( $\phi \sim 0.5\text{cm}$ ) 種微量・小縫隙 ( $\phi \sim 1.0\text{cm}$ ) 種微量



31土



第31号土坑

- 第1層 黄褐色土 10YR3/2  
炭化物 ( $\phi \sim 1.0\text{cm}$ ) 種微量・小縫隙 ( $\phi \sim 5.0\text{cm}$ ) 少量
- 第2層 喀斯特土 10Y3/4  
小縫隙 ( $\phi \sim 8.0\text{cm}$ ) 種微量

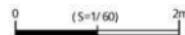


図16 土坑 (4)

## 第31号土坑（図16・19）

[位置] 調査区C区のIII M- 86グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約80cmの円形で、深さは約20cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層され、ともに小礫を含んだ層である。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土している。

## 第32号土坑（図17）

[位置] 調査区C区のIII L- 85グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は長軸70cm、短軸60cmの橢円形で、深さは約20cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層され、ともに炭化物と細礫を含むにぶい黄褐色土の層である。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

## 第33号土坑・・・欠番

## 第34号土坑（図17・19）

[位置] 調査C区のIII M- III N- 84・85グリッドに位置し、大きな礫とともに落ち込みを確認した。

[形態・規模] 平面形は長軸約1m、単軸約80cmの橢円形で、深さは約20cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は炭化物と小礫を含むにぶい黄褐色土である。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土している。

## 第35号土坑（図17）

[位置] 調査C区のIII O- 84グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約60cmのほぼ円形で、深さは約10cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は小礫を含むにぶい黄褐色土である。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

## 第36号土坑（図17）

[位置] 調査C区のIII O- 83・84グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約70mのほぼ円形で、深さは約20cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層され、ともに炭化物と小礫を含んでいる。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

## 第37号土坑（図17・19）

[位置] 調査C区のIII P- 83グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は直径約90cmのほぼ円形で、深さは約30cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は2層に分層され、ともに炭化物と小礫を含んでいる。

[出土遺物] 覆土から土器片と剥片石器が出土している。

## 第38号土坑（図17・19）

[位置] 調査区C区のIII N- 84・85グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は長軸約1m20cm、短軸約90cmの橢円形で、深さは約10cmである。

[堆積土] 確認できた堆積土は、炭化物と小礫を含んだにぶい黄褐色土の層である。

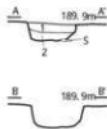
[出土遺物] 覆土から土器片が出土している。

32土

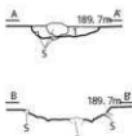
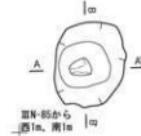
第32号土坑

第1層 にぶい黄褐色土 10YR4/5  
炭化物少量・小礫( $\phi \sim 5.0\text{cm}$ )少量  
10YR5/8黄褐色土少量

第2層 にぶい黄褐色土 10YR4/3  
砂質土、炭化物微量・小礫( $\phi \sim 4.0\text{cm}$ )少量  
10YR5/8黄褐色土と10YR4/5黄褐色土中量混入



34土



第34号土坑

第1層 にぶい黄褐色土 10YR4/3  
炭化物( $\phi \sim 0.5\text{cm}$ )微量・小礫( $\phi \sim 10.0\text{cm}$ )細微量

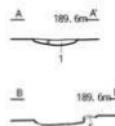
35土

第35号土坑

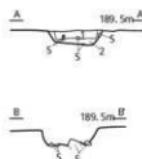
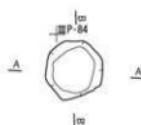
第1層 にぶい黄褐色土 10YR5/4  
小礫( $\phi \sim 0.2\text{cm}$ )微量



-III-85



36土



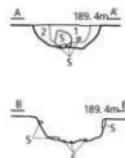
第36号土坑

第1層 黄褐色土 10YR3/3  
炭化物( $\phi \sim 0.5\text{cm}$ )微量・小礫( $\phi \sim 4.0\text{cm}$ )細微量  
第2層 にぶい黄褐色土 10YR4/3  
炭化物( $\phi \sim 2.0\text{cm}$ )微量・小礫( $\phi \sim 3.0\text{cm}$ )細微量

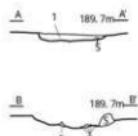
37土

第37号土坑

第1層 褐色土 10YR4/4  
炭化物( $\phi \sim 0.5\text{cm}$ )微量・礫( $\phi \sim 0.3\text{cm}$ )微量。  
下部に小石( $\phi 4\text{cm}$ )と石( $\phi 20\text{cm}$ )混入  
第2層 灰黃褐色土 10YR4/2  
炭化物( $\phi \sim 0.5\text{cm}$ )中量・礫( $\phi 3.0 \sim 10.0\text{cm}$ )微量



38土



第38号土坑

第1層 にぶい黄褐色土 10YR5/4  
炭化物( $\phi \sim 0.2\text{cm}$ )微量・礫( $\phi \sim 5.0\text{cm}$ )微量



図17 土坑 (5)

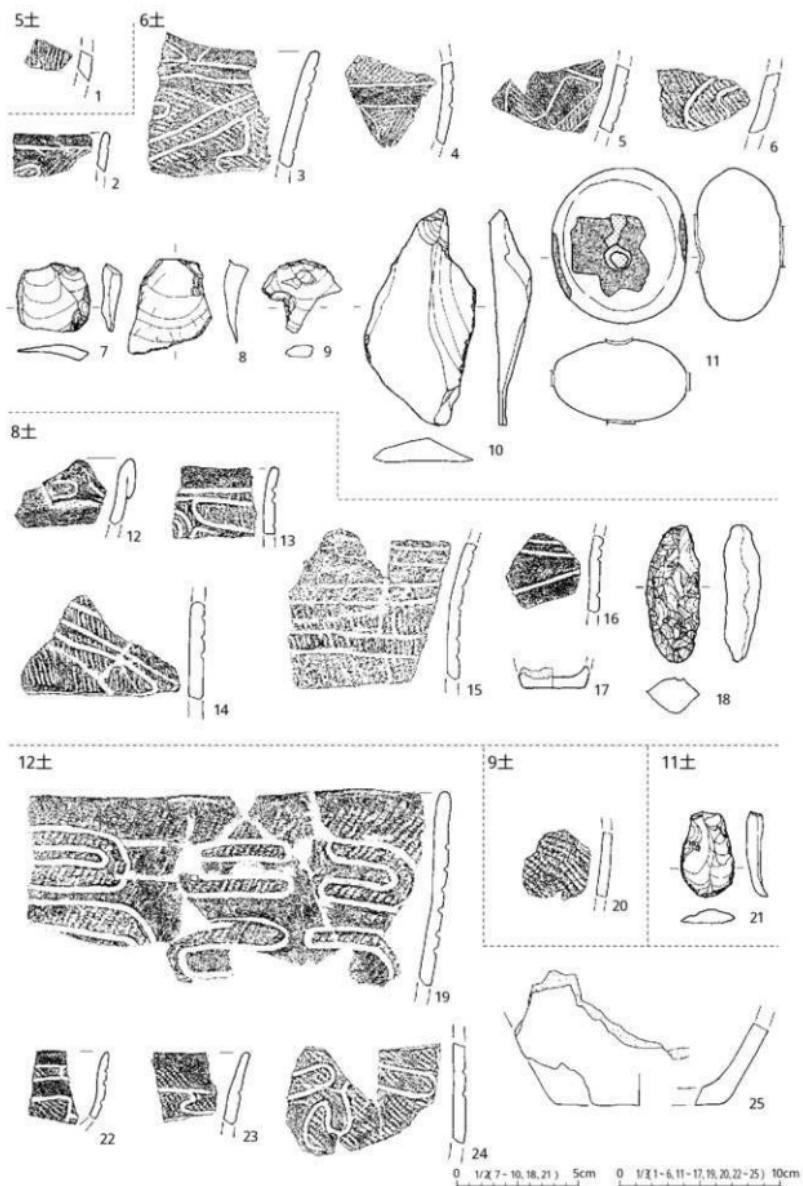


图 18 土坑出土遗物 (1)

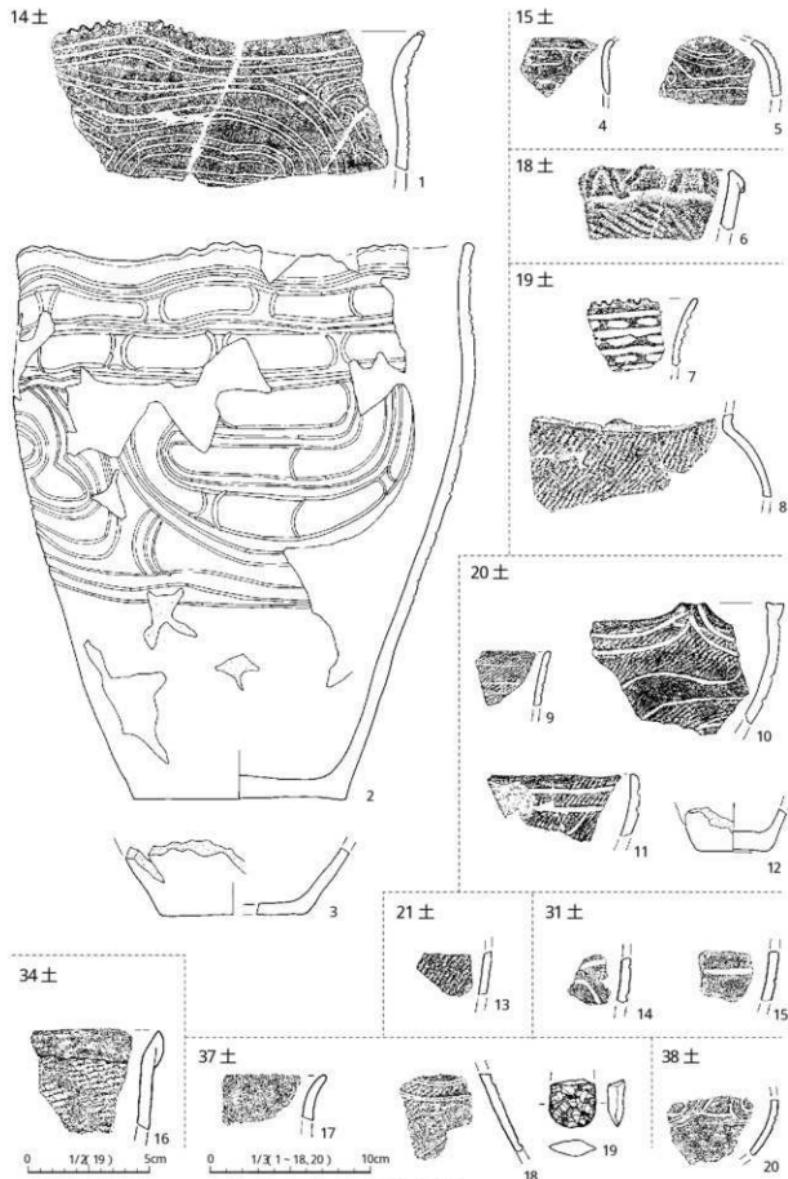


図19 土坑出土遺物(2)

### 3 配石遺構

#### 第1号配石遺構（図20）

[位置] 調査区C区のII X - 121グリッドに位置している。

[形態・規模] 扁平な川原石を立てて箱形に配置したもので、掘り方の規模は、平面形は直径約1m 30cmの円形で、深さは約40cmである。礫の大きさは約40～50cm 重さが約20～50kgである。底面はやや起伏がみられるスリ鉢状である。

[堆積土] 掘り方の堆積土は2層に分層され、いずれも炭化物を含んでいる。

[出土遺物] 確認面から土器破片と石鏃が出土している。

#### 第2号配石遺構（図21）

[位置] 調査区C区のII X - II Y - 123・124グリッドに位置している。

[形態・規模] 第1号配石遺構や第3号配石遺構とは違い、平面形及び規模としてとらえることは難しく、約5m四方の中に大きさが約10～30cmほどの川原石が約270個集中している。部分的に方形や長方形にまとまっている様に受けとれるが、とりあえず図示した。掘り方と思われる掘り込みは確認できず、基本層序第III層を掘り込み礫を配置していると考えられる。

[堆積土] 確認できなかった。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

#### 第3号配石遺構（図22）

[位置] 調査区C区のII X - 123グリッドに位置している。

[形態・規模] 扁平な川原石を立てて箱形に配置したもので、掘り方の規模は、平面形は長軸65cm、短軸55cmの不整形で、深さは約30cmである。礫の大きさは約40～60cm、重さが約20～80kgである。底面はやや起伏がみられるものの概ね平坦である。

[堆積土] 掘り方の堆積土は、炭化物を含んだ暗褐色土の層である。

[出土遺物] 確認面から土器破片が出土している。

#### 第4号配石遺構（図22）

[位置] 調査区C区のII Y - 123グリッドに位置している。

[形態・規模] 大きさが約10～30cmの扁平な川原石を列状に立てて並べているもので、三列確認できた。掘り方と思われる掘り込みは確認できず、基本層序第III層を掘り込み礫を配置していると推測できる。

[堆積土] 確認できなかった。

[出土遺物] 確認面から土器破片が出土している。

#### 第5号配石遺構（図23）

[位置] 調査区C区のII V - 117グリッドに位置している。

[形態・規模] 大きさ約10～40cmの扁平な川原石を立てて配置しているもので、掘り方と思われる20～30cmほどの掘り込みがそれぞれ確認できた。いずれも基本層序第III層を掘り込んでいる。また、南西部に直径約80cmの焼土が検出されたが、配石に伴うかは不明である。

[堆積土] 掘り方の堆積土は、炭化物と焼土粒を含んだ褐色土の層である。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

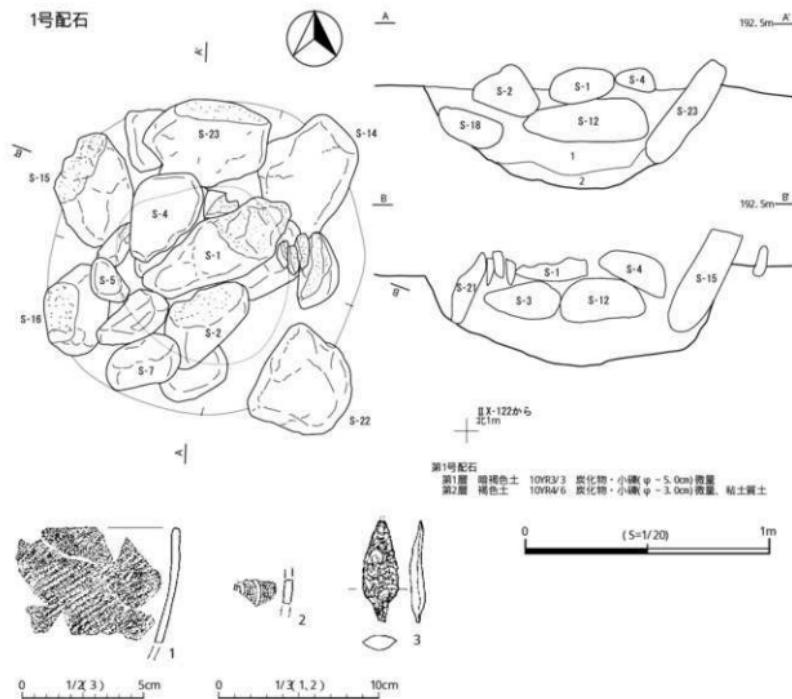


図20 配石遺構(1)

2号配石

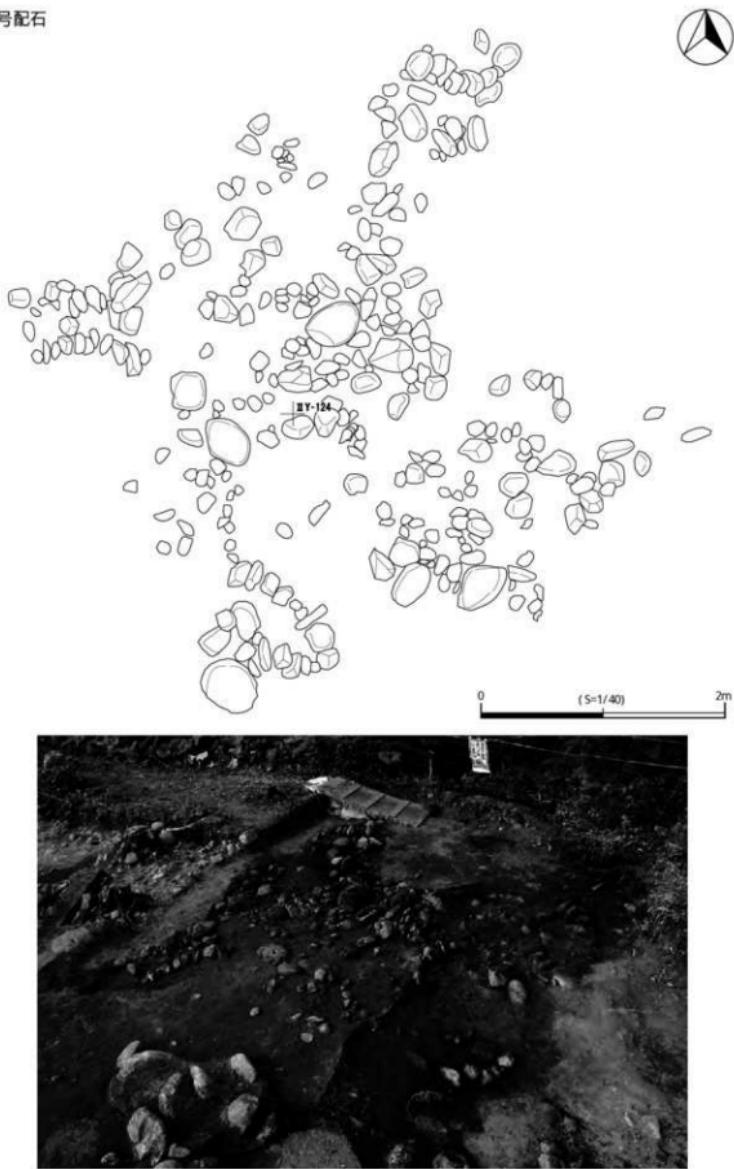
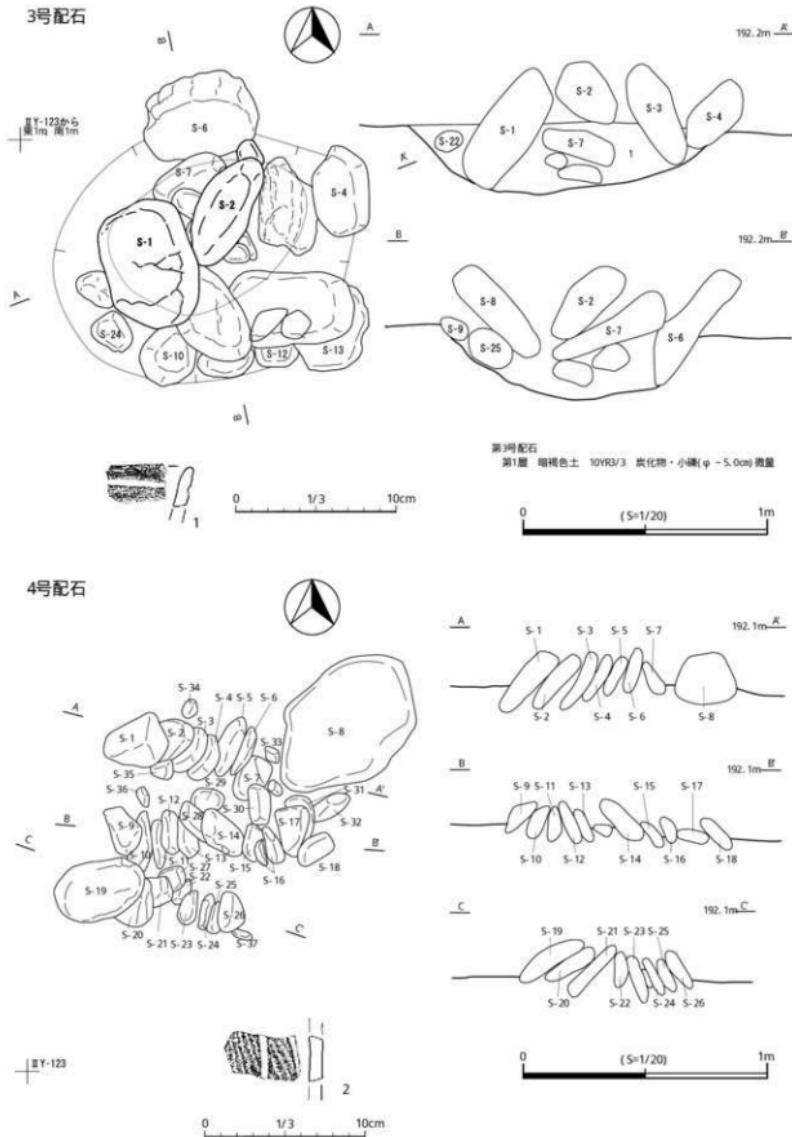


図21 配石遺構(2)



5号配石

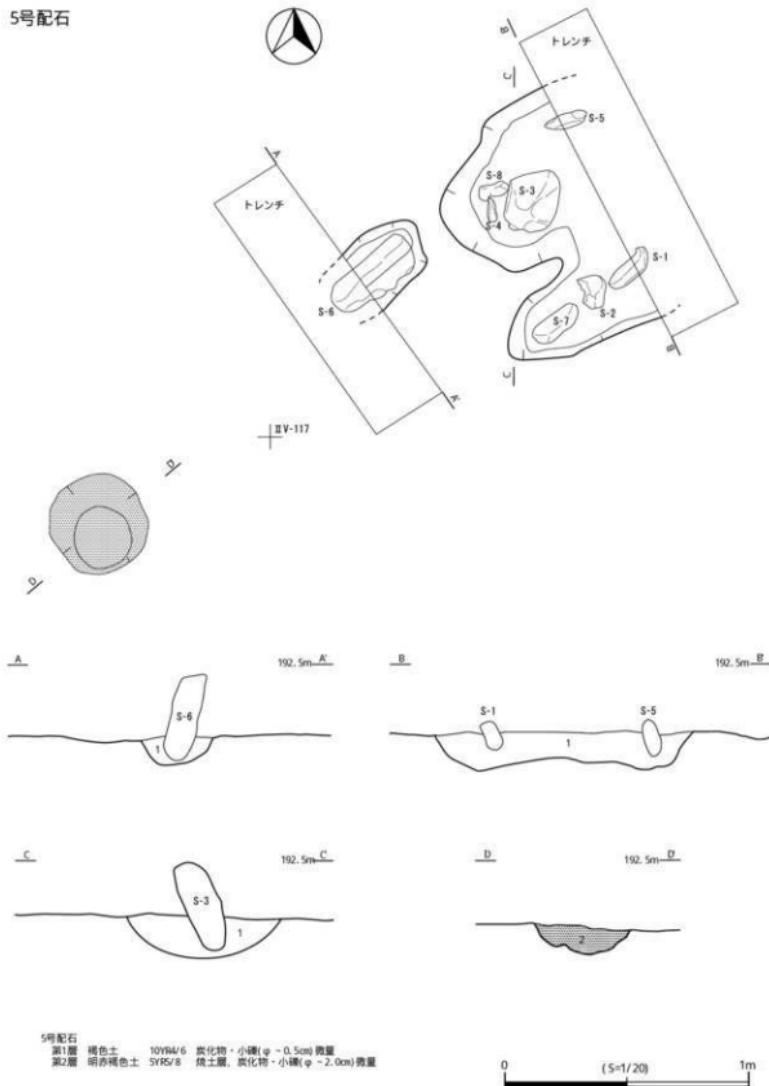


図23 配石遺構 (4)

#### 4 屋外配石炉

##### 第1号屋外配石炉 (図24~27)

[位置] 調査区C区のII Y - 122・123 グリッドに位置している。

[形態・規模] 大きさ約10~30cm、重さ約300g~5kgのやや扁平な碟を32個を用い横に2個、縦に1個と規則正しく方形に配置されている。規模は一辺が約1mで、ほとんどの碟は被熱を受けていたため赤変しており、炉として用いられていたと考えられる。南西部の一部に、碟は確認できず、当初から配置されず焚き口のように開いていたと思われる。また、南西部に長輪約70cm短輪約50cmの焼土が検出されたが、屋外配石炉に伴うかどうかは不明である。

[堆積土] 挖り方は、基本層序の第III層を掘り込み碟を配置していると推測される。

[出土遺物] 確認面から後期前葉の土器片が出土している。

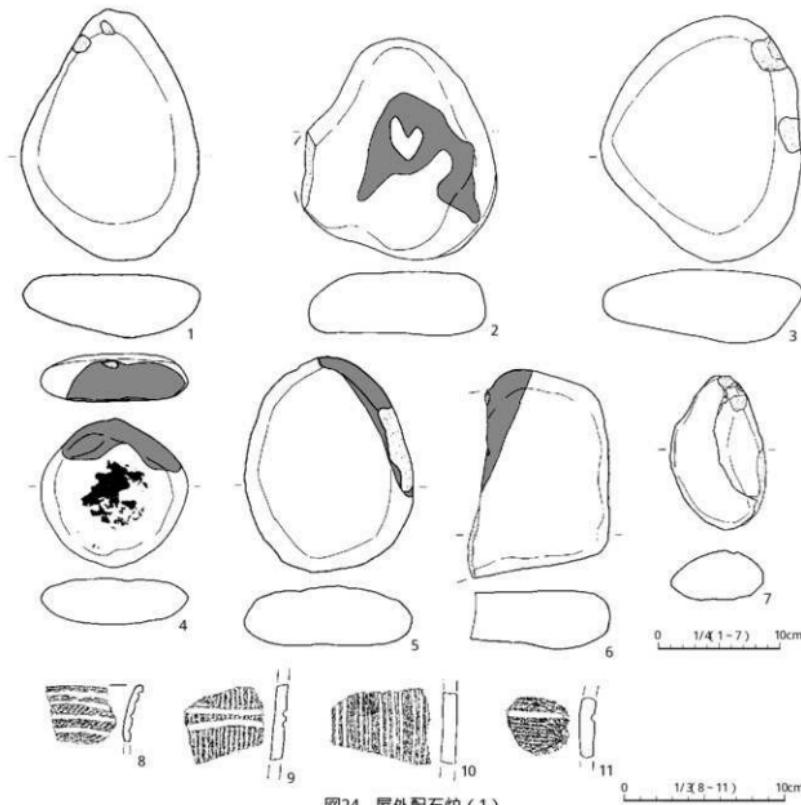


図24 屋外配石炉 (1)

屋外配石炉

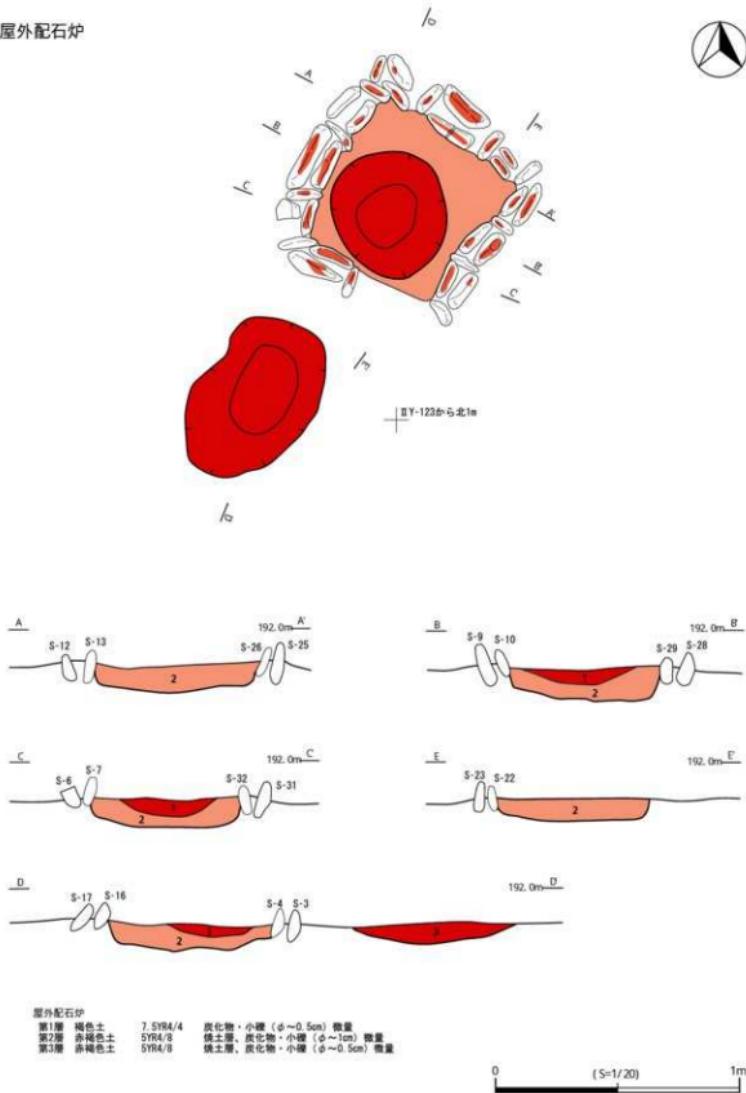


図25 屋外配石炉 (2)

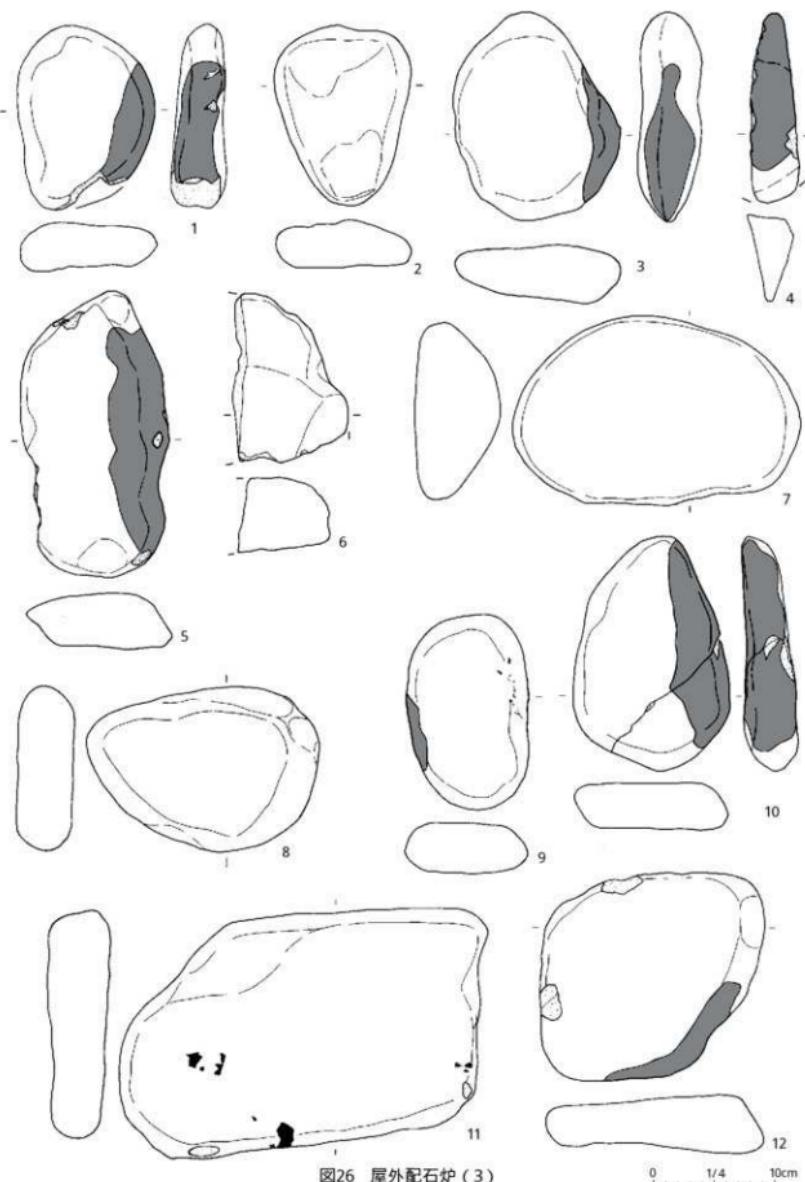


图26 屋外配石炉(3)

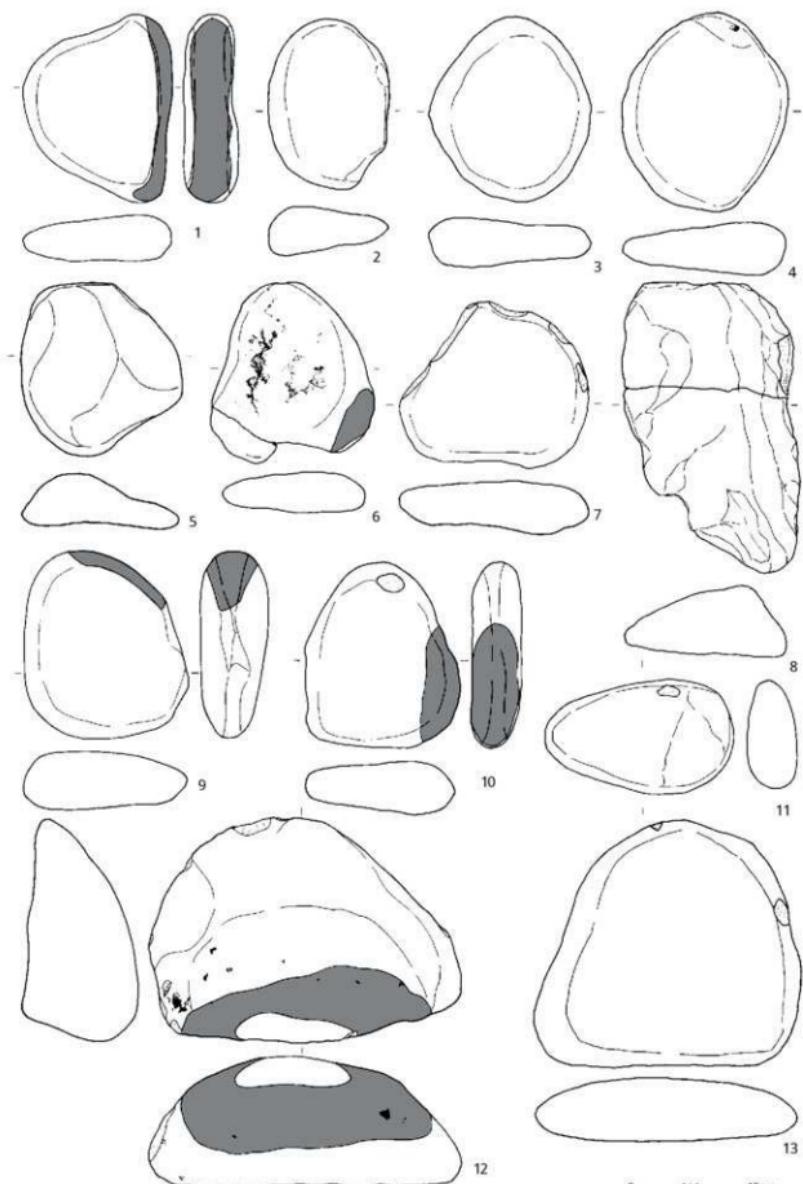


图27 屋外配石炉(4)

## 5 土器埋設遺構

### 第1号土器埋設遺構（図28）

【位置】調査C区のII Q- 123 グリッドに位置している。

【検出状況】第III層上面の礫層で確認できた。

【埋設状況・掘り方】深鉢土器を正立させた状態で埋設している。掘り方は直径約20cmの円形で、確認できた深さは約5cmである。

【埋土】掘り方の埋土は炭化物と焼土粒を含んだ暗褐色土、土器内部充填土は炭化物を含んだ黄褐色土の層が確認されている。

【出土遺物】土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

### 第2号土器埋設遺構（図29）

【位置】調査C区のII P- 118 グリッドに位置している。

【検出状況】第III層上面の礫層で確認できた。

【埋設状況・掘り方】深鉢土器を正立させた状態で埋設している。掘り方は直径約50cmの円形で、確認できた深さは約20cmである。

【埋土】掘り方の埋土は炭化物と焼土粒を含んだ暗褐色土、土器内部充填土は炭化物を含んだ暗褐色土の層が確認されている。

【出土遺物】土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

### 第3号土器埋設遺構（図30）

【位置】調査C区のII Y- 122 グリッドに位置している。

【検出状況】第III層上面の礫層で確認できた。

【埋設状況・掘り方】深鉢土器を正立させた状態で埋設している。掘り方は直径約35cmのほぼ円形で、確認できた深さは約15cmである。

【埋土】掘り方は埋土の炭化物と焼土粒を含んだ褐色土、土器内部充填土は炭化物を含んだ暗褐色土の層が確認されている。

【出土遺物】土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

### 第4号土器埋設遺構（図31）

【位置】調査C区のIII A- 122 グリッドに位置している。

【検出状況】第III層上面の礫層で確認できた。

【埋設状況・掘り方】深鉢土器を正立させた状態で埋設している。掘り方は長軸約25cm、短軸約20cmの橢円形で、確認できた深さは約30cmである。

【埋土】掘り方の埋土は炭化物と焼土粒を含んだ褐色土、土器内部充填土は炭化物を含んだ暗褐色土の層が確認されている。

【出土遺物】土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

### 第5号土器埋設遺構（図32）

【位置】調査C区のII X- II Y- 119 グリッドに位置している。

【検出状況】第III層上面の礫層で確認できた。

【埋設状況・掘り方】深鉢土器を正立させた状態で埋設している。掘り方は直径約30cmのほぼ円形

で、確認できた深さは約 10 cm である。

【埋土】掘り方の埋土は炭化物と焼土粒を含んだ褐色土、土器内部充填土は炭化物を含んだ暗褐色土の層が確認されている。

【出土遺物】土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

#### 第6号土器埋設遺構(図33)

【位置】調査C区のIIU・IIV-115グリッドに位置している。

【検出状況】第III層上面の礫層で確認できた。

【埋設状況・掘り方】深鉢土器を正立させた状態で埋設している。掘り方は直径約 40 cm の不整形で、確認できた深さは約 25 cm である。

【埋土】掘り方の埋土は炭化物と焼土粒を含んだ黒褐色土、土器内部充填土は炭化物を含んだ暗褐色土の層が確認されている。

【出土遺物】土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

#### 第7号土器埋設遺構(図28)

【位置】調査C区のIIX-116グリッドに位置している。

【検出状況】第III層上面の礫層で確認できた。

【埋設状況・掘り方】深鉢土器の底部を埋設していると思われる。掘り方は確認できなかった。

【埋土】掘り方及び土器内部充填土は確認できなかった。

【出土遺物】土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

#### 第8号土器埋設遺構(図34)

【位置】調査C区のIIP-118グリッドに位置している。

【検出状況】第III層上面の礫層で確認できた。

【埋設状況・掘り方】深鉢土器を正立させた状態で埋設している。掘り方は直径約 40 cm の円形で、確認できた深さは約 15 cm である。

【埋土】掘り方の埋土は炭化物と焼土粒を含んだ暗褐色土、土器内部充填土は炭化物を含んだ暗褐色土の層が確認されている。

【出土遺物】土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

#### 第9号土器埋設遺構(図35・37)

【位置】調査C区のIIIA-118グリッドに位置している。

【検出状況】第III層上面の礫層で確認できた。

【埋設状況・掘り方】深鉢土器を正立させた状態で埋設している。掘り方は直径約 40 cm の円形で、確認できた深さは約 30 cm である。

【埋土】掘り方の埋土は炭化物と焼土粒を含んだ暗褐色土、土器内部充填土は炭化物を含んだ暗褐色土の層が確認されている。

【出土遺物】土器内部から球形の礫(図37-6)などが出土している。

#### 第10号土器埋設遺構(図36・37)

【位置】調査C区のIIU-116グリッドに位置している。

【検出状況】第III層上面の礫層で土器埋設Aを、掘り方の底面で土器埋設Bを確認した。

[埋設状況・掘り方] 土器埋設Aは深鉢土器を正立させた状態で埋設し、掘り方は直径約40cmの円形で、確認できた深さは約20cmである。土器埋設Bは深鉢土器の底部で、掘り方は直径約20cmの円形、深さは約10cmである。以前作られた土器埋設Bの上面に土器埋設Aが新たに作られたと考えられる。

[埋土] 土器埋設Aの掘り方の埋土は炭化物と焼土粒を含んだ暗褐色土、土器内部充填土は炭化物を含んだ暗褐色土の層が確認されている。土器埋設Bの掘り方の埋土は炭化物と小礫を含んだ褐色土で、土器内部充填土は黄褐色土の層が確認されている。

[出土遺物] 土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

#### 第11号土器埋設遺構（図38）

[位置] 調査C区のII W- 97・98 グリッドに位置している。

[検出状況] 第IV層上面の粘土質の層で確認できた。

[埋設状況・掘り方] 深鉢土器を正立させた状態で埋設している。掘り方は直径約30cmの円形で、確認できた深さは約10cmである。

[埋土] 掘り方の埋土は炭化物と焼土粒を含んだ黄褐色土、土器内部充填土は炭化物を含んだにぶい黄褐色土の層が確認されている。

[出土遺物] 土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

#### 第12号土器埋設遺構（図39）

[位置] 調査C区のIII J- 84 グリッドに位置している。

[検出状況] 第IV層上面の粘土質の層で確認できた。

[埋設状況・掘り方] 台付土器の底部と考えられ、掘り方も確認できないことから土器埋設でない可能性が高い。

[埋土] 確認できなかった。

[出土遺物] 土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

#### 第13号土器埋設遺構（図40）

[位置] 調査C区のIII H- 94・95 グリッドに位置している。

[検出状況] 第IV層上面の粘土質の層で確認できた。

[埋設状況・掘り方] 深鉢土器の底部のみの検出で、掘り方は確認できなかった。

[埋土] 確認できなかった。

[出土遺物] 土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

#### 第14号土器埋設遺構（図40）

[位置] 調査C区のIII M- 87 グリッドに位置している。

[検出状況] 第IV層上面の粘土質の層で確認できた。

[埋設状況・掘り方] 深鉢土器の底部のみの検出で、掘り方は確認できなかった。

[埋土] 確認できなかった。

[出土遺物] 土器内部及び掘り方から遺物は出土していない。

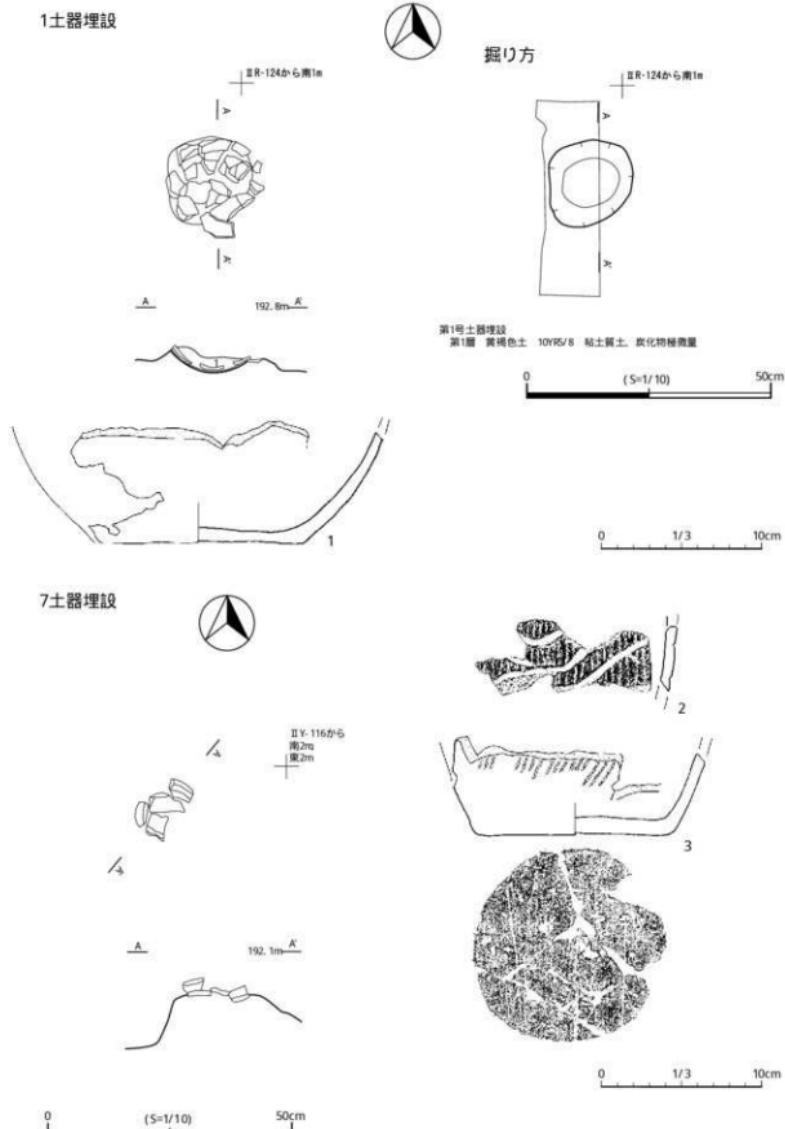


図28 第1・7号土器埋設

2土器埋設

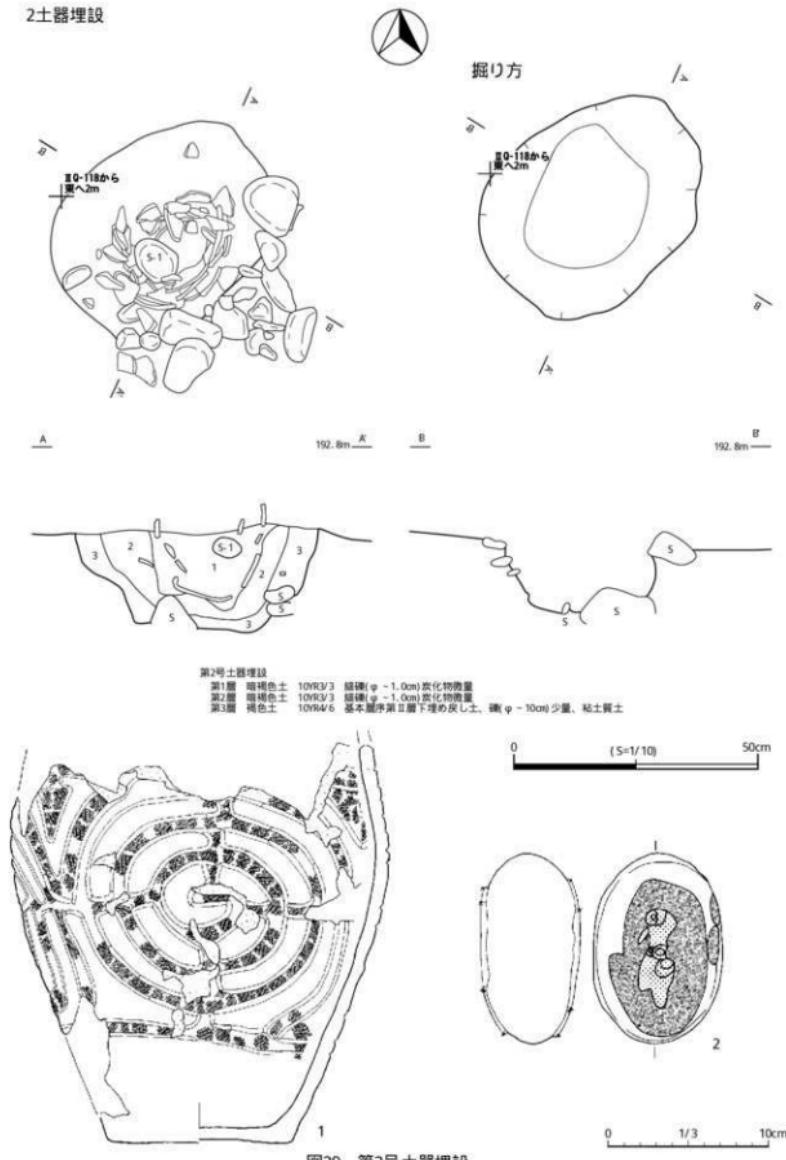


図29 第2号土器埋設

## 3土器埋設

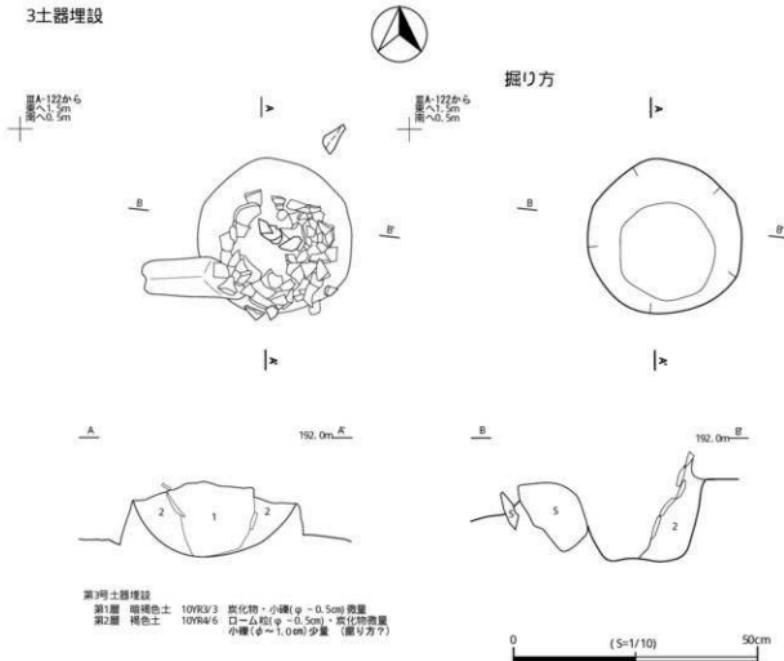


図30 第3号土器埋設

4土器埋設



掘り方

図B-122から  
幅2.5m

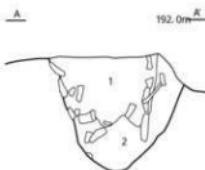


/w

図B-122から  
幅2.5m

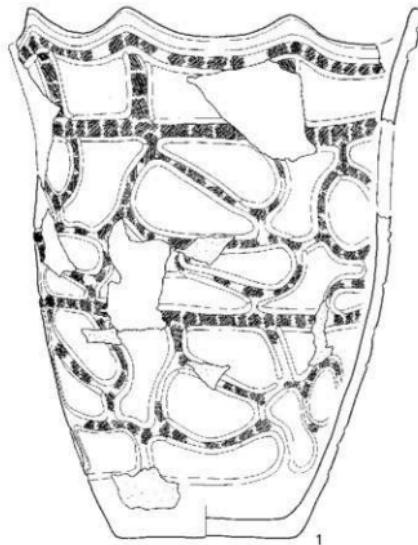


/w



B

192.0m



第4号土器埋設  
第1層 暗褐色土 10YR3/3 硬硬(φ - 1.0cm)・炭化物微量  
第2層 棕色土 10YR4/4 硬硬(φ - 1.0cm)・炭化物微量

0 (S=1/10) 50cm

0 1/3 10cm

図31 第4号土器埋設

## 5土器埋設

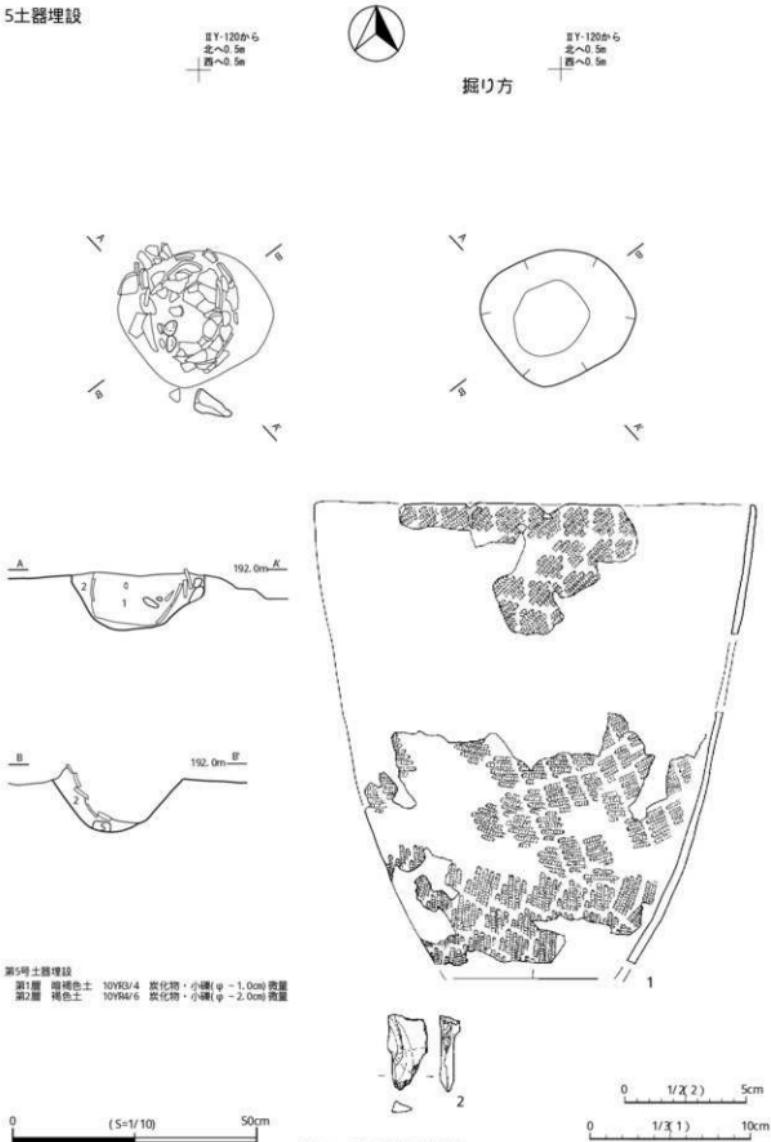


図32 第5号土器埋設

6土器埋設

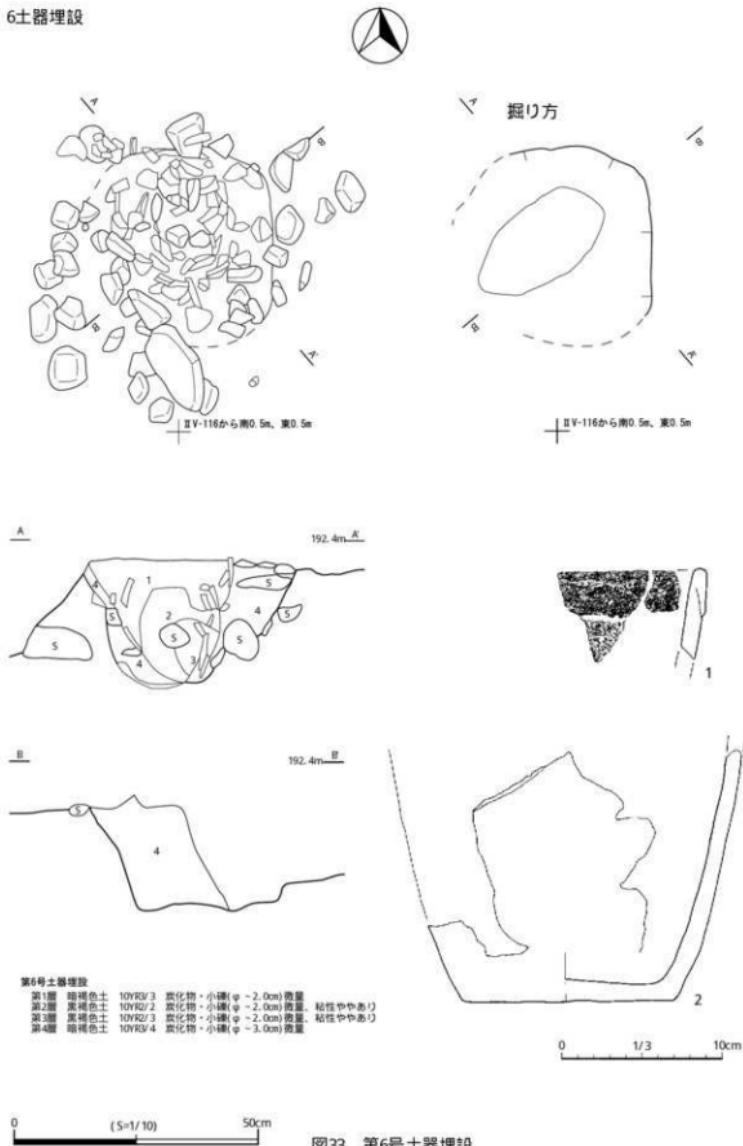
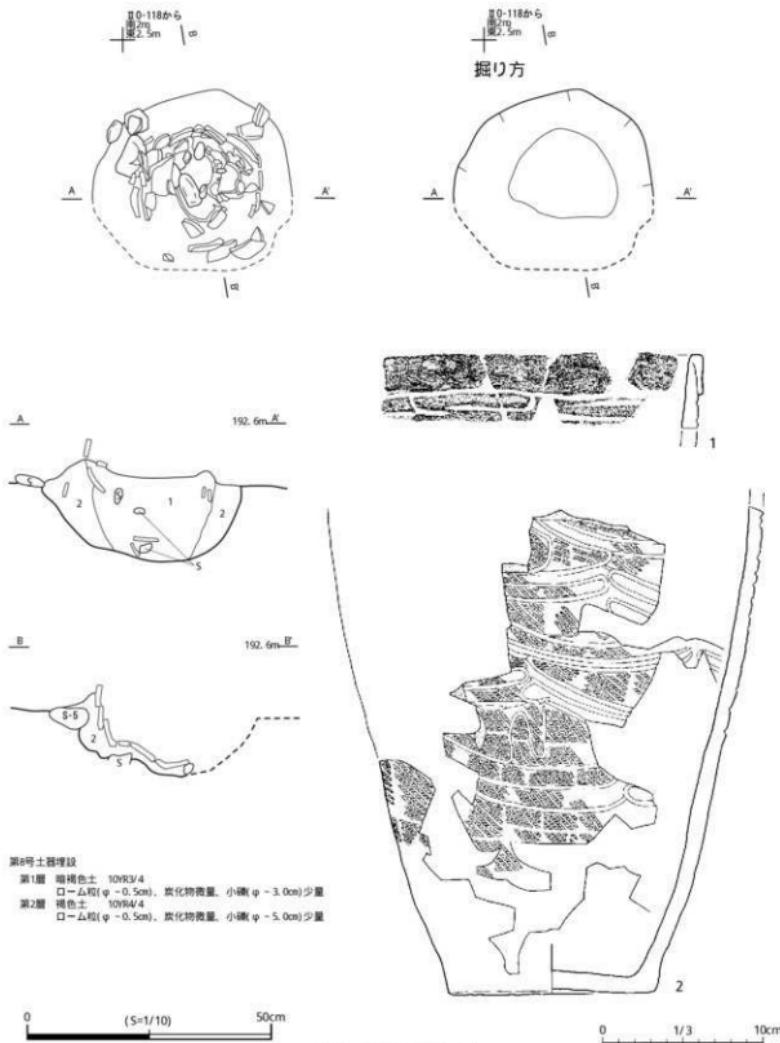


図33 第6号土器埋設

## 8土器埋設



第8号土器埋設

第1層 噴褐色土、10R3/4  
□—ム和(φ = 0.5m)、炭化物微量、小礫(φ ~ 3.0m)少量  
第2層 褐色土、10YR4/4  
□—ム和(φ = 0.5m)、炭化物微量、小礫(φ ~ 5.0m)少量

図34 第8号土器埋設

9号土器埋設

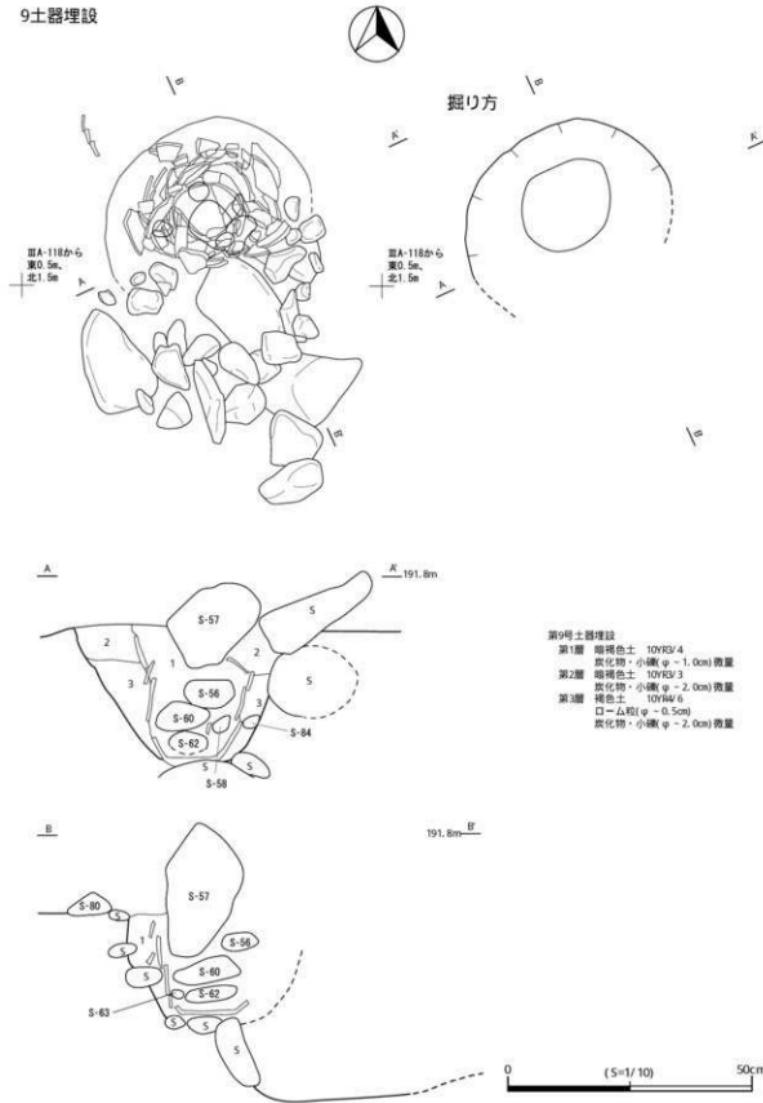
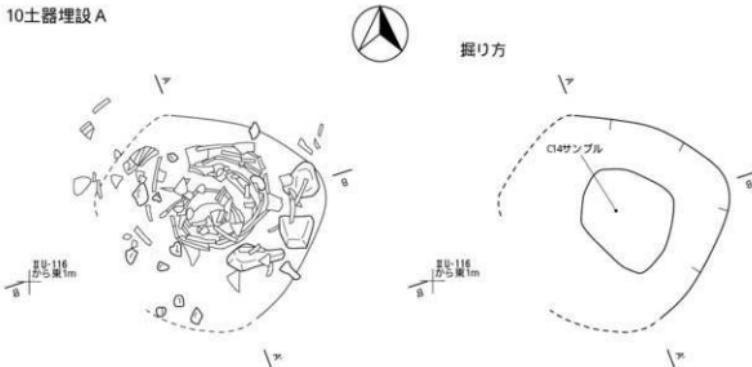
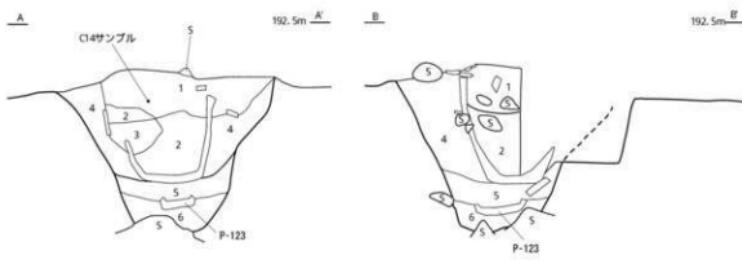


図35 第9号土器埋設

## 10土器埋設 A



掘り方



## 10土器埋設 B

(P-123出土状況)

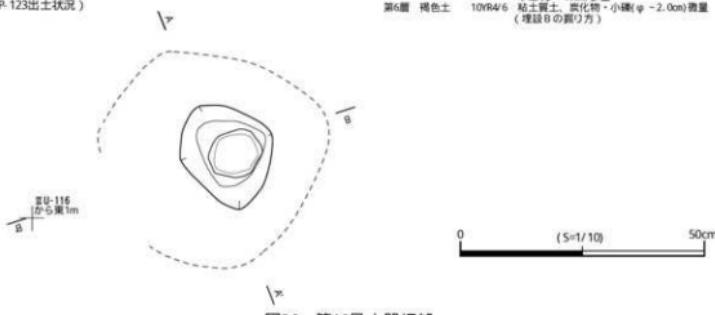


図36 第10号土器埋設

9 埋設



10埋設B

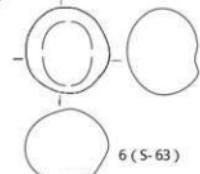


10埋設A

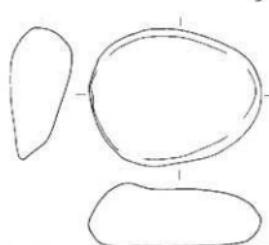


4 (S-60)

5



6 (S-63)



7  
(S-62)

0 1/3 10cm

図37 第9・10号土器埋設

## 11土器埋設

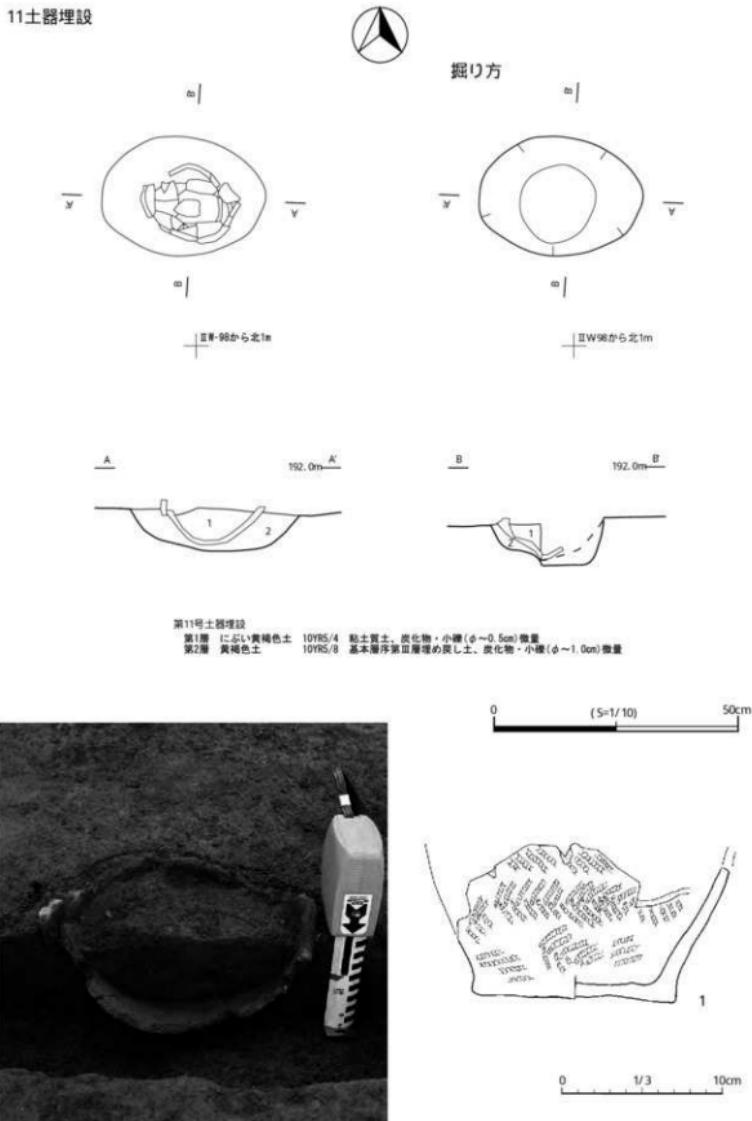


図38 第11号土器埋設

12土器埋設



図E-84から  
東7m 南1m



0 (S=1/10) 50cm



0 1/3 10cm

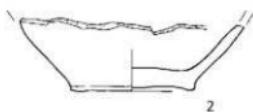
13土器埋設



図I-95から南に1m



0 (S=1/10) 50cm



0 1/3 10cm

図39 第12・13号土器埋設

## 14土器埋設

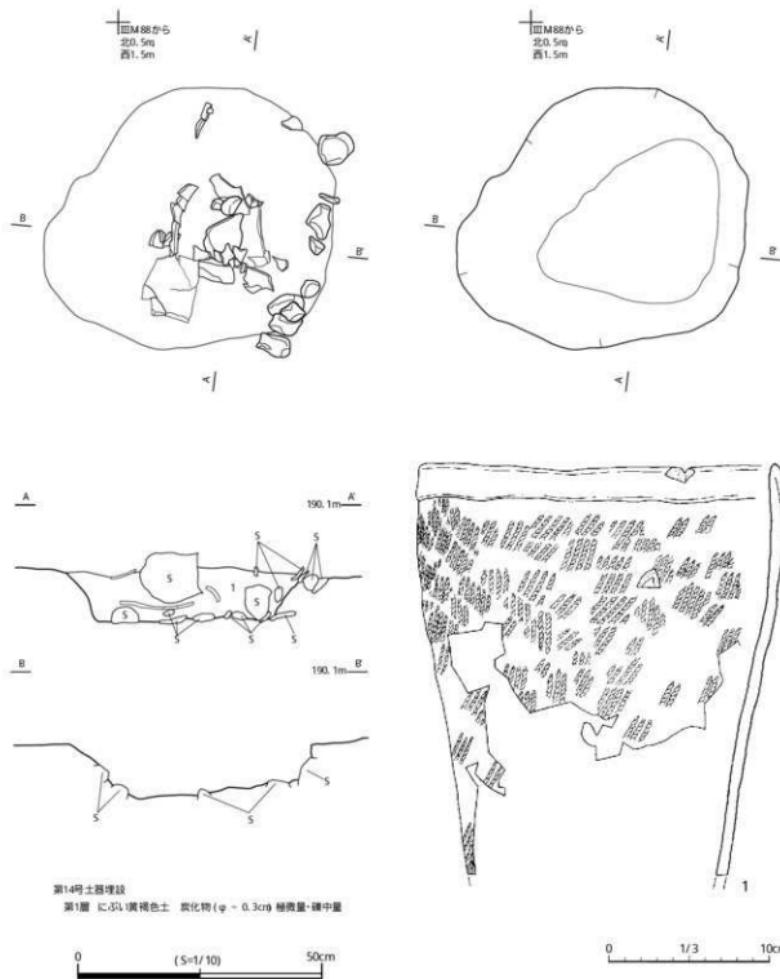


図40 第14号土器埋設

#### 調査区 D 区

##### 第1号土坑 (図41・42)

[位置] 調査D区のII L - 84・85 グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は長軸約3m 40cm、短軸約2m 60cmの隅丸長方形で、深さは約40cmである。

[堆積土] 堆積土は炭化物を含んだ5層に分層される。

[出土遺物] 覆土から土器破片と石鏃のほか礫が出土している。

##### 第2号土坑 (図41・42)

[位置] 調査D区のII K - 85 グリッドに位置している。

[形態・規模] 平面形は長軸約1m 60cm、短軸約1m 20cmの橢円形で、深さは約20cmである。

[堆積土] 堆積土は炭化物を含んだ2層に分層される。

[出土遺物] 覆土から土器破片と剥片石器が出土している。

##### 第3号土坑 (図41・42)

[位置] 調査D区のII L - 85 グリッドに位置している。

[形態・規模] 北側を掘りすぎたため、平面形は不明である。深さは約30cmである。

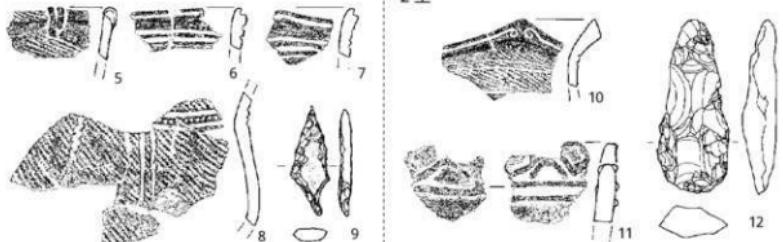
[堆積土] 堆積土は2層に分層される。

[出土遺物] 覆土から土器破片と礫が出土している。

#### 1 土



#### 2 土



#### 3 土

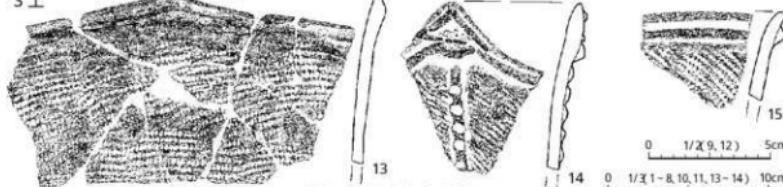
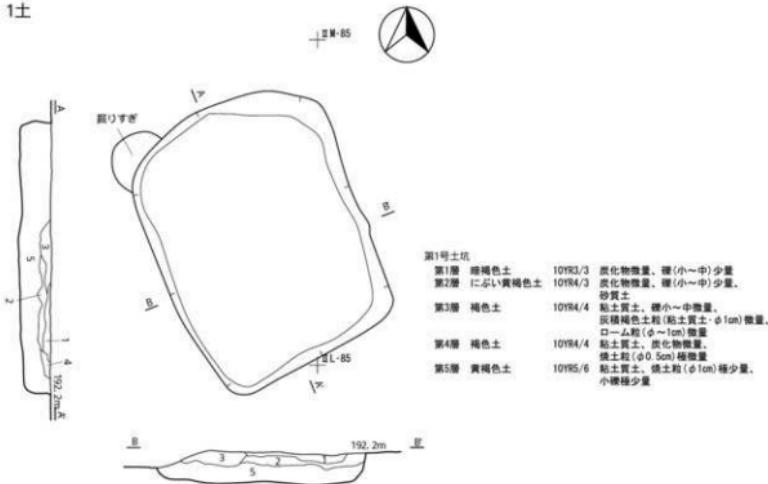
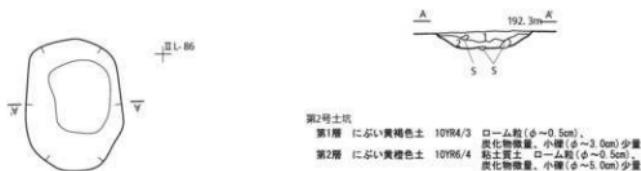


図41 D区土坑出土遺物

1土



2土



3土

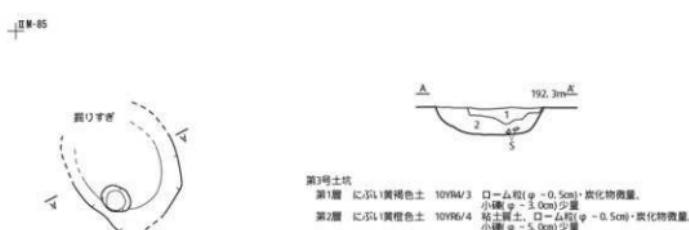


図42 D区土坑



## 第2項 出土遺物

### 1 土器( 図 43 ~ 46)

砂子瀬遺跡の調査で出土した縄文土器は、段ボール箱で 65 箱分である。ほとんどが砂子瀬遺跡 C 区から出土しているが、旧砂子瀬集落の造成などによる影響を受けていたため、破片資料が多くみられる。出土土器は地区によって若干の時期的な違いがみられ、C 地区では縄文時代後期前半の土器を中心にしており、D 区では中期中葉の土器が多く出土している。

土器の分類にあたっては、平成 18 年度の調査報告(本報告書第 1 章第 7 節第 2 項参照)に準拠し、新たに第Ⅲ群に 1 類中期前半の土器と 2 類中期後半の土器を設けている。

第Ⅰ群から第Ⅱ群の土器は出土していない。

#### 第Ⅲ群 縄文時代中期の土器

##### 2 類 中期後半の土器( 図 43- 1 ~ 4・10、図 46- 16 ~ 28)

C 区では中期後半の円筒上層 d 式、e 式、櫻林式などの土器がみられ、口縁部の突起には様々なバラエティーがみられる。D 区では、折返し口縁をもつものや口唇部に沈線をもつものなどが出土している。

##### 第IV群 縄文時代後期の土器( 図 43- 5 ~ 9、11 ~ 13、図 44、図 45、図 46- 1 ~ 12、29・30)

###### 1 類 後期初頭から前葉の土器

深鉢土器は、沈線文の他に、網目状には、沈線( 図 43- 11 ~ 13) によるものと撚糸文( 単軸絡条体第 5 類)( 図 43- 7・8) のものがみられる。また、沈線文をもつものの中には、図 44- 1 の突起が 5 つで口唇部に棒状押圧痕も持つものなどがある。そのほかに単軸絡条体第 1 類や条痕により施文されているものも存在する。図 45- 9、10 は結束でない羽状縄文である。

壺型土器の中には、小型の蓋付土器( 図 46- 1・9・10) もあり、1 は赤漆が塗布され、蓋部に紐通し孔のある突起が確認できる。10 には赤漆と黒漆が塗布されていたと思われる。また、大型の壺型土器( 図 46- 2・7・8・12) はその形態から土器棺と考えられ、12 は橋状把手がみられる。いずれも後期前半の十腰内 I 式土器とみられる。

###### 3 類 後期後葉の土器

鉢型土器に粘土瘤が貼付けられるもので、十腰内 V 式土器以降と考えられる。

##### 第V群 縄文時代晚期の土器

###### 1 類 晩期前葉の土器( 第 46 図- 13 ~ 15)

c 羊歯状文が主体文様のもの

鉢類は頸部に羊歯状文がみられるもので、大洞 B C 式と考えられる。

( 中嶋 )

### 2 石器

砂子瀬遺跡の調査で出土した石器は、段ボール箱で 41 箱分である。石器の分類にあたって、平成 18 年度調査報告のものに準拠している。以下に器種ごとに概略を述べる。

#### 剥片石器

平成 19 年度砂子瀬遺跡の調査で 186 点、平成 20 年度の調査で 3 点の計 189 点が出土し、うち 11 点が遺構内から出土している。

## 石鏃（図20- 3、図47- 1- 18）

出土した34点中19点を図示した。円基1点（図47- 1）、凹基6点（図47- 2- 7）、有茎が12点（図20- 3、図47- 8- 18）である。図47- 8は長さが短く抉りも浅いため、菱形に近い形になっている。図47- 12は平面形が丸みを帯び、全長の半分ほどで最も幅広になっている。図47- 2は剥離調整が進んでおらず、未製品と思われる。

## 石槍（図47- 19）

1点が出土した。有茎で先端を欠損している。

## 石匙（図47- 20- 22）

出土した4点中3点を図示した。2点が横型（20・21）、1点が縦型（22）である。22は幅広な素材の両側縁に緩く弧を描く刃部を形成している。

## 石錐（図41- 9、図47- 23- 25）

出土した5点中4点を図示した。図41- 10はD区第1号土坑出土で、両端を加工し、下端部が針状になっている。図47- 23は上下両端を加工し、平面形が尖基の石錐のようになっている。25は刃部のみの残存か、棒状のものの欠損品と思われる。

## 石範（図12- 12、図18- 18、図19- 19、図41- 12、図47- 26- 31）

出土した43点中10点を図示した。図47- 30は比較的大型で剥離調整が粗い。

## 削・搔器（図18- 7- 10、21、図32- 2、図47- 32- 44）

削器としたものは79点中16点、搔器とした22点中4点をそれぞれ図示した。遺構内からは削器と搔器で計6点が出土している。遺構外出土の図47- 37は縦長の素材の上端部で横方向から、下端部では下方向からの抉りを入れ、側縁に刃部を形成している。43、44は搔器で、円または橢円形の素材を用いている。2点とも弧状の側縁に急角度な刃部を形成する。さらに直線的な側縁の方にも緩やかな角度の刃部が形成されているので、この部分を削器として使用した削・搔器の可能性もある。

## 礫石器

平成19年度の調査で11点が出土し、うち2点が遺構内から出土である。

## 敲磨器類

I・III-VI類の出土はなかった。

## II類 使用痕が擦り+叩きのもの（図18- 11、図29- 2、図48- 1・4・6）

図18- 11（第6号土坑出土）と図29- 2（第2号土器埋設遺構出土）は、やや扁平な円または橢円碟の表裏面及び側面を擦りと叩きに使用している。遺構外出土（図48- 1・4・6）のもののうち、6は平面形が分銅形、全体を敲打と擦りにより整形し、全面に擦痕が残る。また、表面中央の凹みは敲打後に擦ったもので、裏面にも深い擦痕が残る溝状の凹みがある。類似した加工痕を持つものが、県内では六ヶ所村の富ノ沢（1）遺跡で1点、富ノ沢（2）遺跡で2点出土しているほか、北海道では泊村ヘロカウルス遺跡、奥尻町青苗遺跡、余市町栄町遺跡、札幌市N 309遺跡など縄文時代中期後半の円筒上層式土器に伴って出土し、側縁有溝石器として記載されているが、出土例が少なく用途も不明なことから、今回は敲磨器として分類した。

## VII類 使用痕が凹みのみのもの（図48- 2・3）

3は楕円碟の稜線部を叩きに使用している。

石皿（図48-5）

大型、有縁で、表裏に整形痕と思われる打痕が残っている。

磨製石斧（図48-7~9）

3点とも擦り切り技法を用いており、特に8は明瞭な段状の擦切痕を残している。

（佐藤・菅原）

### 3 土製品

縄文時代の土製品11点が出土している。器種ごとに分類してその特徴を述べる。

土偶（図48-10）

土偶は、遺構外から出土した板状土偶で、破損しているが体部の左上半部と推定できる。肩部がやや角張り、沈線と縄文による文様が施され、頭部と首の接合部にはアスファルトが付着している。時期は中期後半と思われる。

土面？（図12-12）

第2号竪穴住居跡からの出土で、円盤状の粘土版に、粘土を用いて目と口、眉を貼り付けたものである。時期については不明である。

円盤状土製品（図12-11、図48-11~16）

第2号竪穴住居跡から屋外配石炉から1点ずつ、C区の遺構外から6点の計7点出土している。いずれも深鉢土器の胸部破片で、図48-11、13、15は縄文、図12-11は沈線と縄文、12と14は沈線のみ、16は丁寧にミガキをかけた無文である。いずれも中期中葉から後期前葉と考えられる。

粘土の塊（図48-17）

粘土に小碟（φ 0.5~1.5cm）を含んだものである。用途および時期ともに不明である。

（中嶋）

### 4 石製品

縄文時代と思われる石製品は5点が出土している。

石剣・石刀類（図48-18・19）

出土した2点は、いずれも両端を欠損しているもので、両側縁に刻みを施している。石質は粘板岩製である。

不明石製品（図48-20~22）

20は凝灰岩の小型楕円碟を用い、長軸方向中央を通る溝が形成されている。一部欠損があるものの、この溝は全周すると考えられる。表裏及び側面には大小の擦痕が残る。また、稜線が面取りされているため、断面形は隅丸方形を呈している。用途は不明だが、溝部分に紐をかけて垂飾品にする利用法が考えられる。21は異形石器と思われ、一部を欠損している。22は粘板岩製で、端部を細くし、体部も面取りをして鉛筆のような形に整形している。片方の端部は欠損している。

（佐藤・菅原）

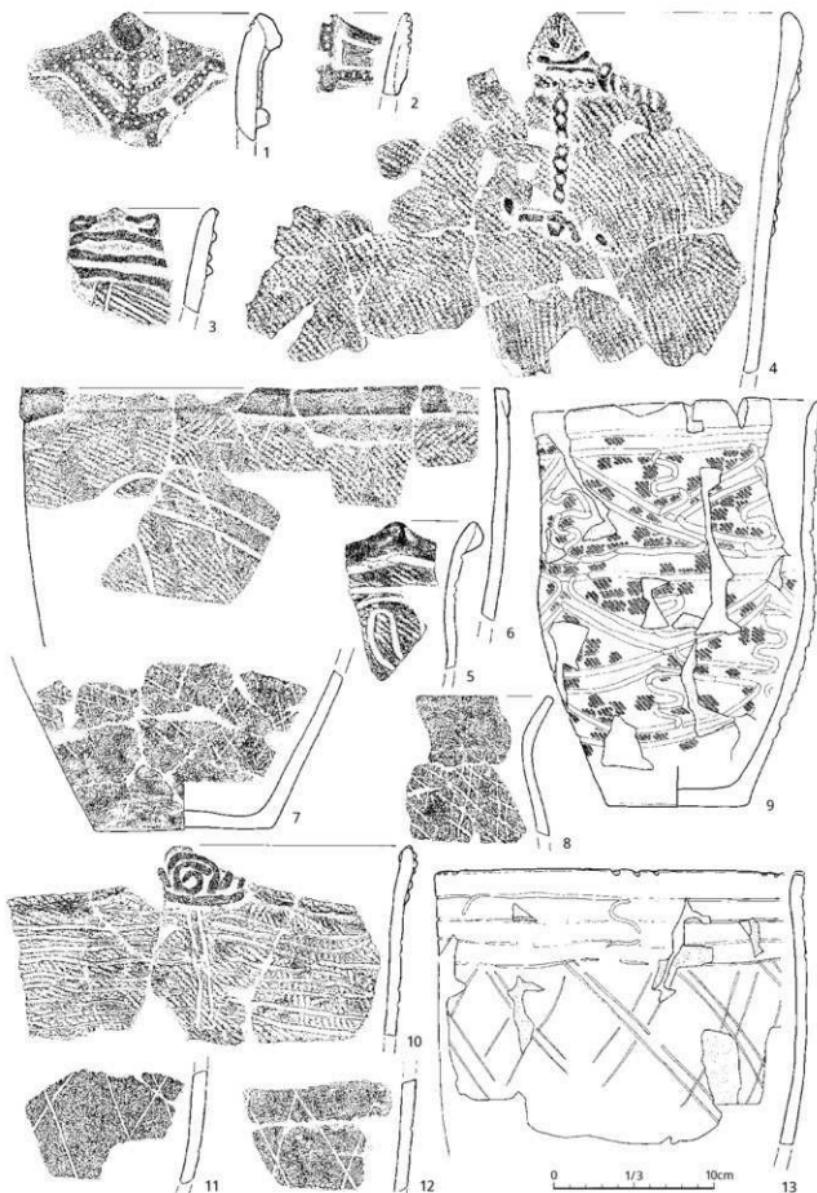


図43 遺構外出土遺物(1)

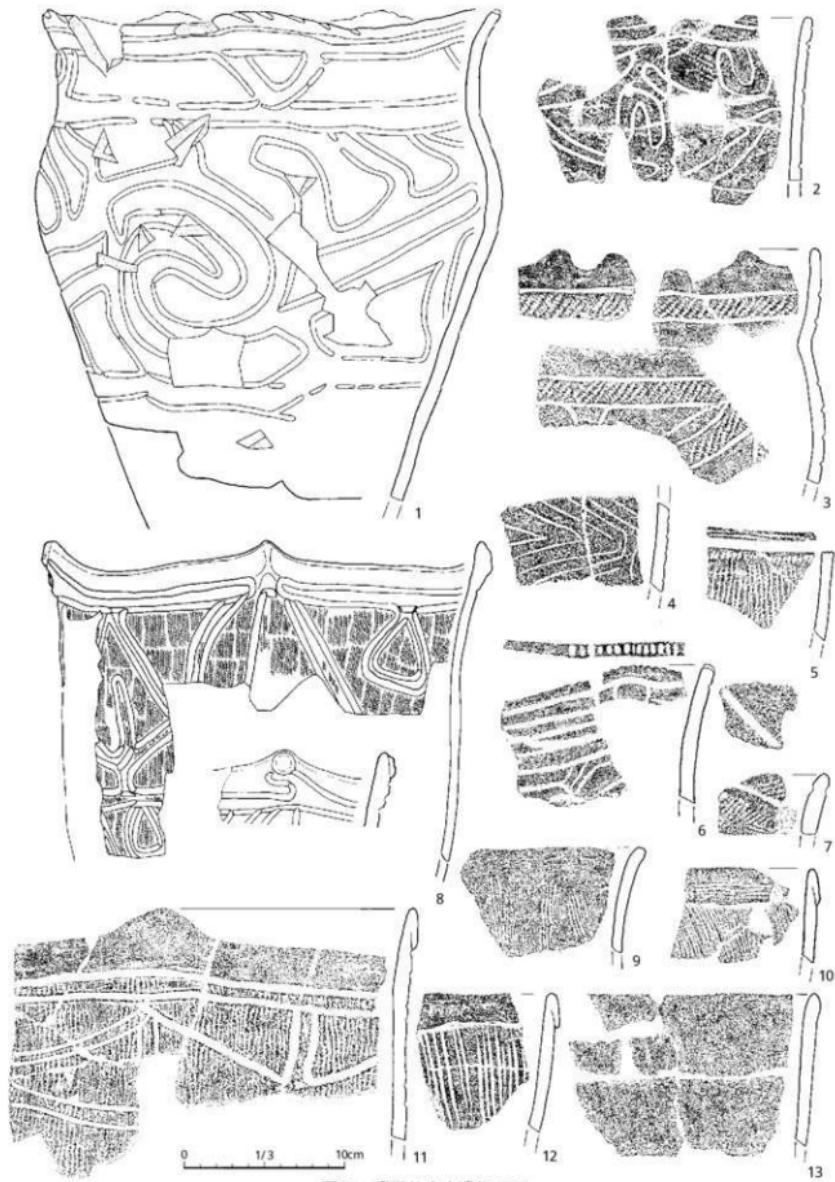


図44 遺構外出土遺物 (2)

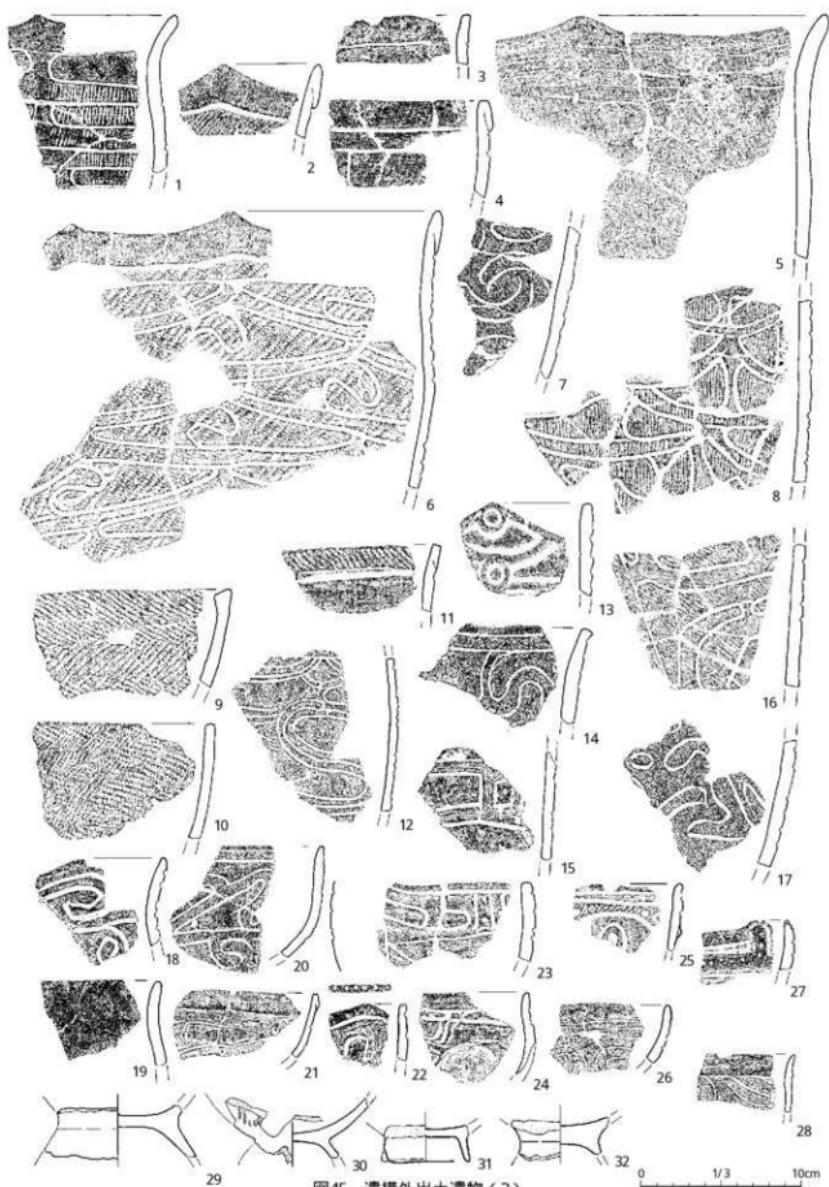


図45 遺構外出土遺物(3)

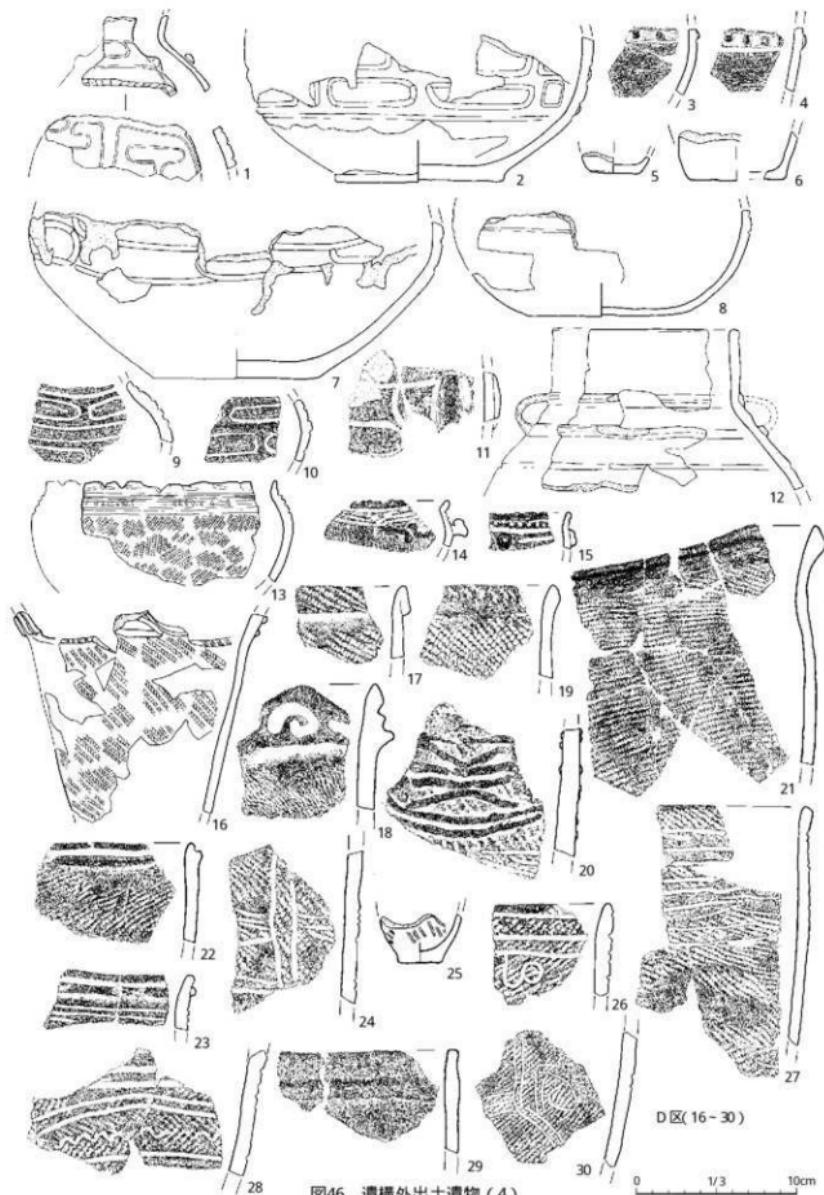


図46 遺構外出土遺物(4)

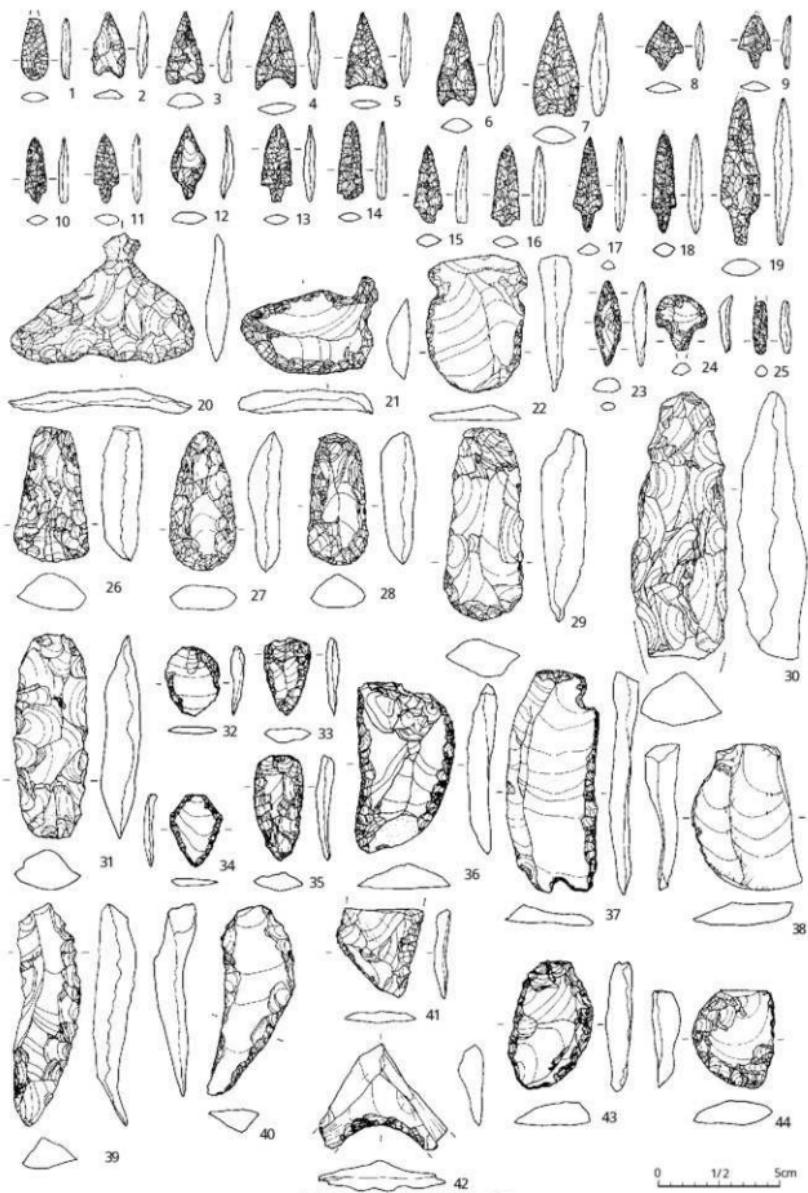


図47 遺構外出土遺物(5)

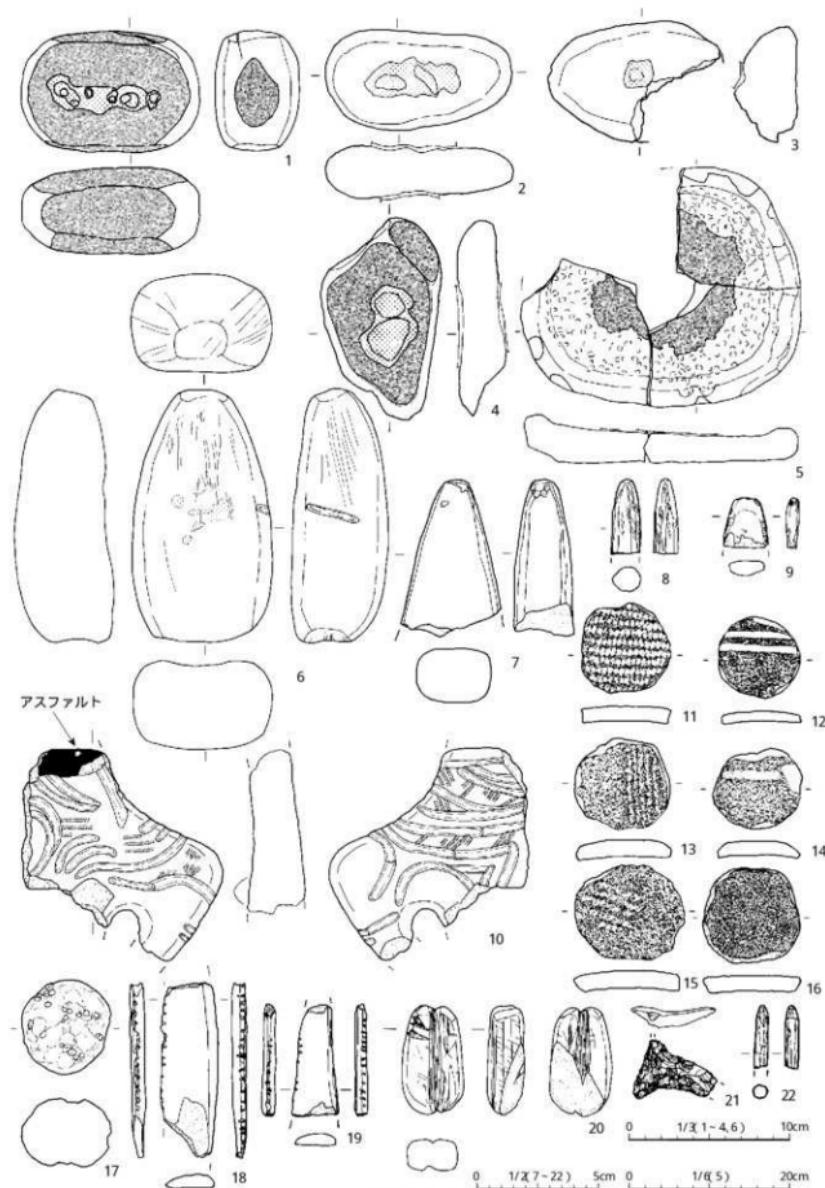


図48 遺構外出土遺物 (6)

## 第4章 水上(3)遺跡

### 第1節 基本層序 (図49)

調査区は遺跡の東南端にあり、南側は木戸ヶ沢に面した崖となっている。標高約171mの段丘崖上に位置しているが、ダム内のために降雨時等には調査区一帯が水没する。基本層序は北側の調査区境界壁 (X U 355 グリッド)とした。第I層は表土層であり、第I-1層はダム使用以降の堆積土である。第II層が遺跡の主体をなす縄文時代中～後期の遺物包含層であり、層中には大小の円礫を多量に含んでいる。また遺構はこの層の下面で検出されている。なお第II-2層は炭化物を含んだ黒色土層で、調査区中央の低い部分を東西に貫くように帶状に検出されており、状況からこの部分には木戸ヶ沢に注ぐ小規模な沢があったものと考えられる。第III層は大型の礫を層中に含み、無遺物・無遺構の層である。

#### 基本層序

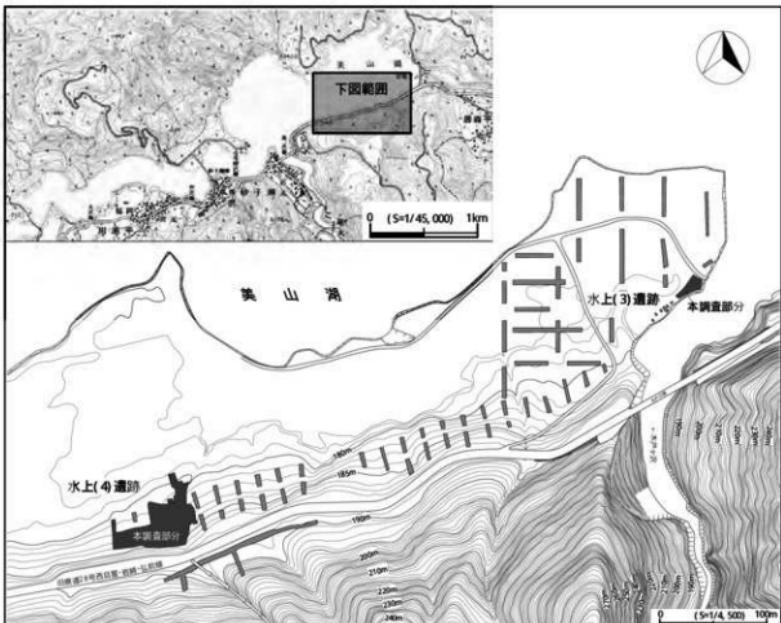
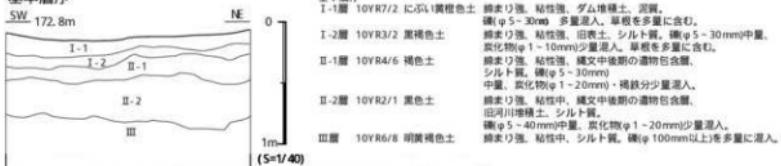


図49 水上地区周辺地形図

## 第2節 検出遺構と出土遺物

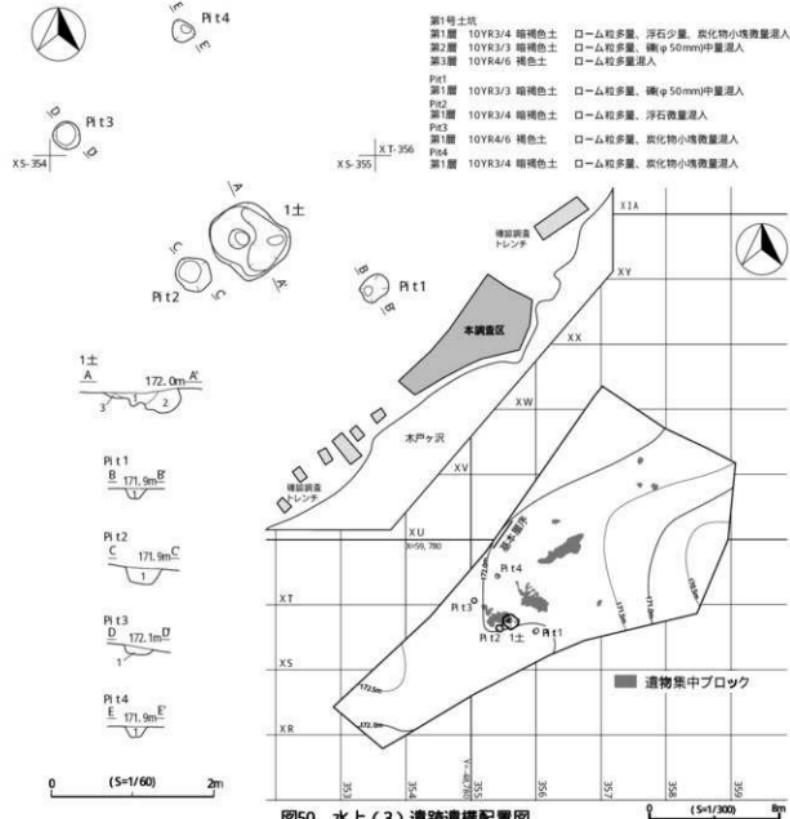
### 第1項 検出遺構(図50)

水上(3)遺跡から検出された遺構は、土坑1基、ピット4基で、いずれも基本層序第II層から検出されている。以下にまとめて記載する。

第1号土坑はX-S-355グリッドに位置し、91×79cmの不整構円形を呈する。断面は東側が深いもので、底面には凹凸が目立つ。堆積土は暗褐色土を主体とするものであるが、土坑の形状自体が不明瞭であり、大型礫が抜けた痕跡である可能性もある。出土遺物はなく、時期は不明である。

ピット4基は第1号土坑の周辺に位置し、土坑同様に暗褐色土を堆積しているもので、ピット1が径34cm、深さ11cm、ピット2が径45cm、深さ20cm、ピット3が径35cm、深さ13cm、ピット4が径27cm、深さ14cm、といずれも小規模である。これらのピットからも遺物の出土はなく、時期は不明である。

(神)



## 第2項 出土遺物

### 1 土器( 図 51 ~ 53)

水上(3)遺跡で出土した縄文土器は、後期から晩期を中心に段ボール箱で9箱分であるが、器種別にみると深鉢土器類が少なく、注口土器破片が多いなど器種にかなりの偏りがみられる。

第I群から第II群の土器は出土していない。

#### 第IV群 縄文時代後期の土器

##### 3類 後期後葉の土器 (図 51- 1~9、図 52- 1~12・16、図 53- 1~9)

深鉢類は、口縁部から胴部上半にかけての文様帯に刻目帯や刺突帶をもち、文様の連結点や文様と無文部の境に粘土瘤が貼付けられている。注口土器も同様である。皿類は出土していない。壺類は口縁部と頸部に貼付けがみられる。いずれも十腰内V式以降の土器と考えられる。

注口土器は後期後半の三叉文や粘土瘤がみられ、注口直下に粘土瘤をもつものが多く、底部が小さく作出されている。ミガキによる調整のみの無文土器も多くみられる。

#### 第V群 縄文時代晩期の土器

##### 1類 晩期前葉の土器 (図 51- 10~11、図 52- 13~15、図 53- 10)

###### a 入組繩文帯と三叉文が主体文様のもの

深鉢類 (図 51- 10~11) 皿類とともに入組繩文帯と三叉文が口縁部から胴部にかけてみられる。注口土器 (図 52- 13~15) は注口直下に三叉文がみられる。

いずれも大洞B1式と考えられる。

(中嶋)

### 2 石器

水上(3)遺跡で出土した石器は段ボール箱1箱分で、剥片石器が6点で、礫石器は出土していない。以下器種ごとに述べる。

#### 剥片石器

##### 石鏃 (図 53- 12)

抉りの浅い凹基か茎の短い有茎の石鏃で、先端が欠損している。

##### 石匙 (図 53- 11)

縦型の石匙で、直線的な刃部である。表面は全面を剥離調整し、裏面は縁辺のみの調整である。

##### 石箇 (図 53- 14)

撥型で刃部は緩い弧状である。基部が欠損している。

##### 削・搔器 (図 53- 13・15)

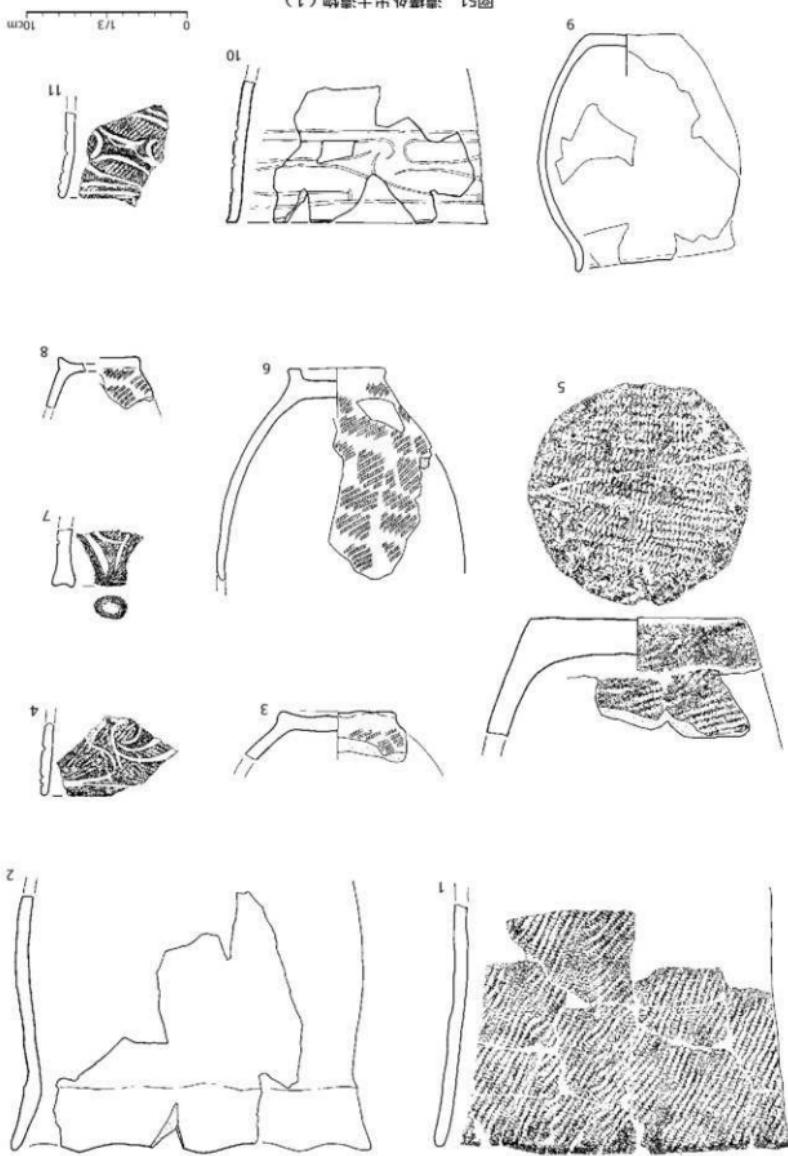
削器は2点が出土した。13は薄手で円形の石材の両側縁を加工している。表面では縁辺のみ、裏面では全面を調整している。15は半月型の石材の一側縁のみを調整している。調整は表面では側縁全体に、裏面では部分的に行われる。

##### 石核 (図 53- 16)

礫の自然面は一部に残るだけで、さまざまな角度から打ち割られている。

(佐藤・菅原)

图51 通渭出土遗物(1)



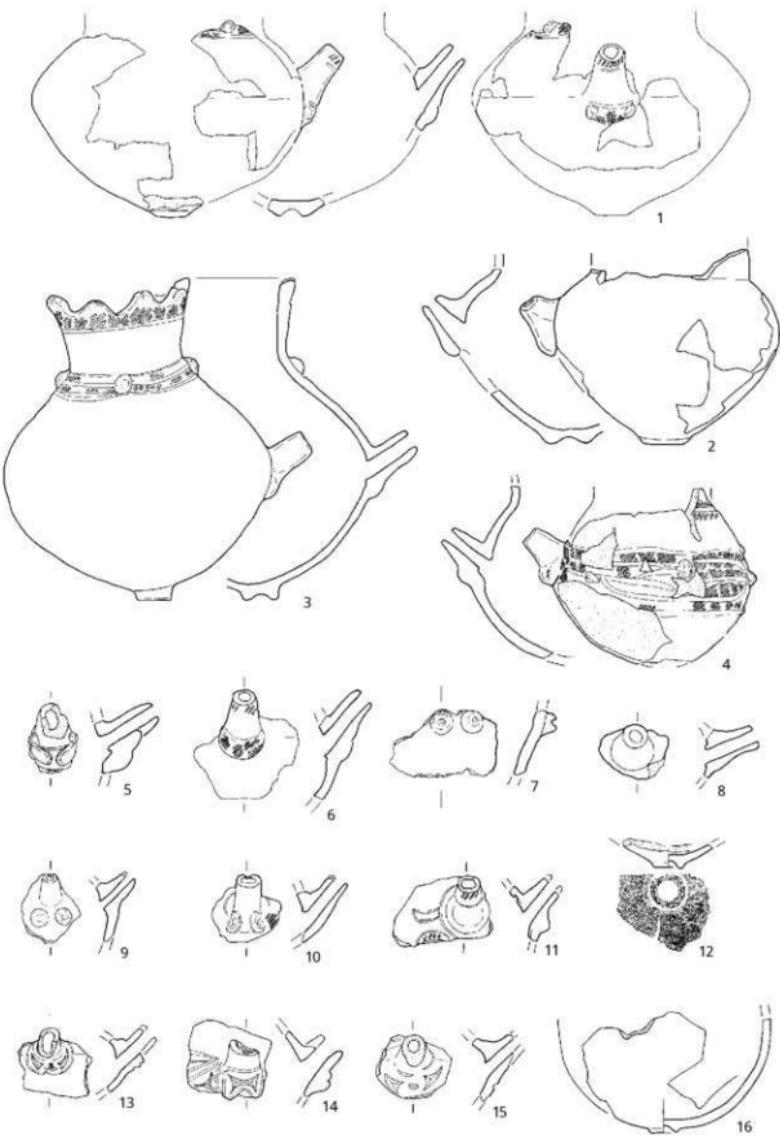


図52 遺構外出土遺物 (2)

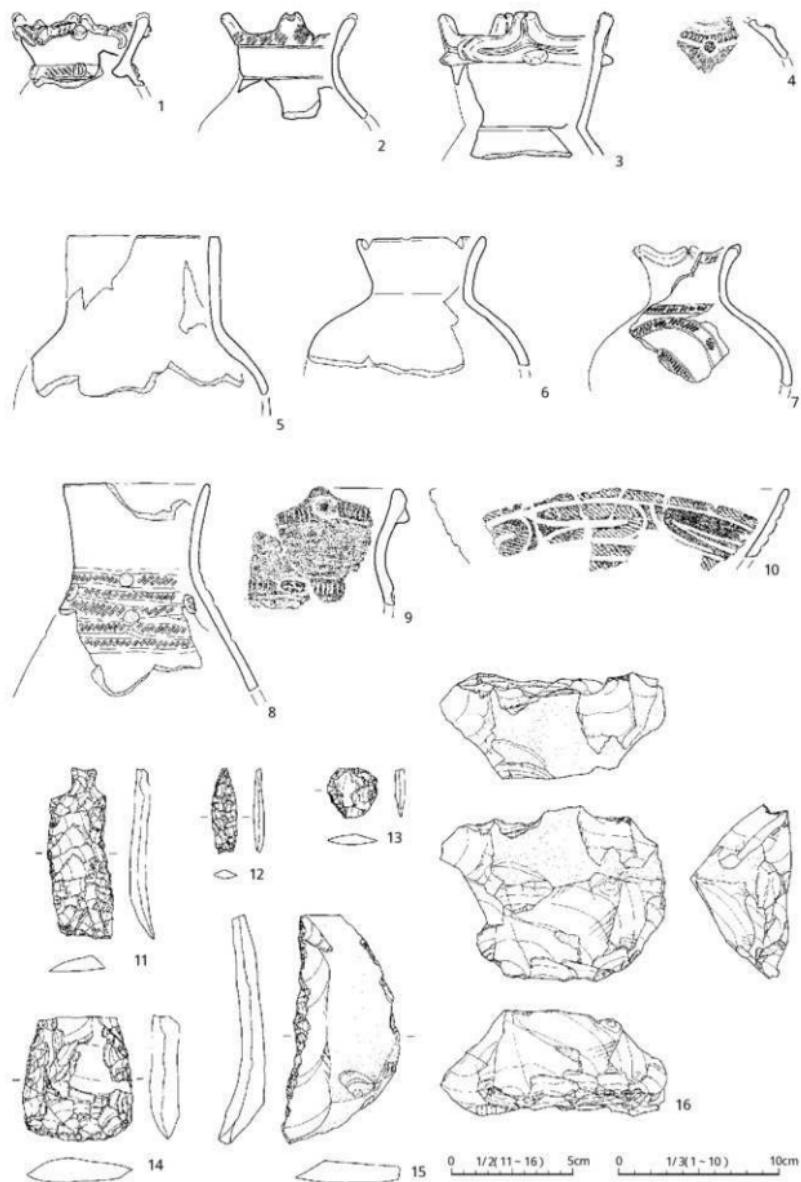


図53 遺構外出土遺物(3)

## 第5章 水上(4)遺跡

### 第1節 基本層序(図54・55)

遺跡は美山湖南側となる標高170～200mの北側緩斜面上に位置している。確認調査を主体としているが、このうち調査対象部分の西側(國土座標X=59,520～59,620, Y=-49,320～-49,240付近)の遺物出土が著しいことから本調査を行った。基本層序については本調査区南側のVIII G 237及び北側のVIII U-230グリッドの2箇所に設定した。第I層は表土層で暗褐色土を主体とする。基本層序には無いが、標高180m以下の北側斜面においては第I層上に数cmほどの泥砂の堆積がみられる。第III層～第IV層が遺跡の主体である縄文時代中～後期の遺物を包含する層であり、遺構は第III層面から下で検出されている。埋没川の堆積土については状況からこの第III～IV層に対応するものと考えられる。第V層は黄褐色系のローム土層で、この層以下から遺物・遺構は確認できない。

なお本調査区は全面的に湧水が激しく、調査区際に排水路を設定し調査を行っている。

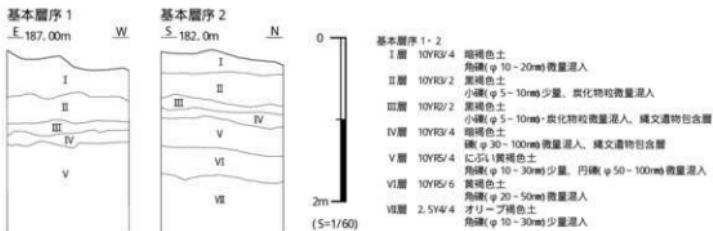


図54 水上(4)遺跡 基本層序

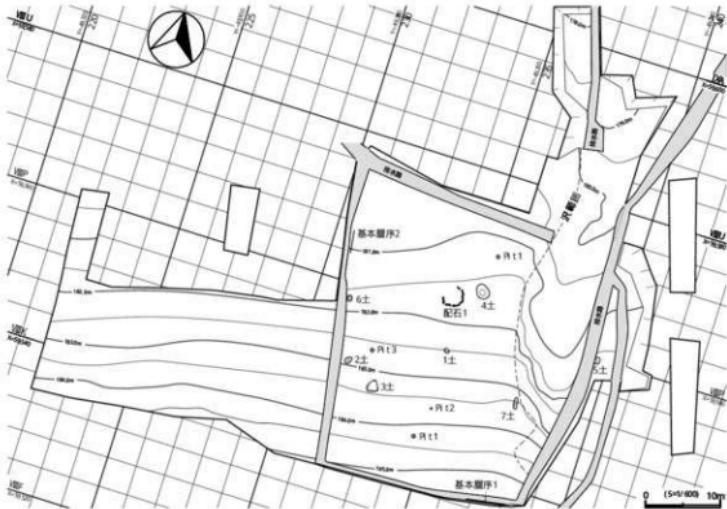


図55 水上(4)遺跡 遺構配置図

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### 第1項 検出遺構（図55）

本遺跡の本調査区からは、配石遺構1基、土坑7基、ピット4基が検出されたほか、沢とその右岸に遺物捨場が検出されている。時期は決定の根拠を欠き、不明なものが多数である。

#### 1 土坑

##### 第1号土坑（図56）

[位置] 本調査区東側のVII N-234 グリッドに位置し、第III層上で確認した。

[形態・規模] 長軸 74cm、短軸 50cm の楕円形を呈し、深さは 24cm である。

[堆積土] 褐色土を主体とした2層に分層した。

##### 第2号土坑（図56）

[位置] 本調査区東側のVII M231 グリッドに位置し、第III層上で確認した。

[形態・規模] 長軸 112cm、短軸 74cm の不整円形を呈し、深さは 29cm である。

[堆積土] 暗褐色土を主体とした2層に分層した。

##### 第3号土坑（図56）

[位置] 本調査区東側のVII L-M232 グリッドに位置し、第III層上で確認した。

[形態・規模] 長軸 152cm、短軸 152cm の不整円形を呈し、深さは 22cm である。

[堆積土] 暗褐色土を主体とした2層に分層した。

##### 第4号土坑（図56）

[位置] 本調査区東側のVII P-Q235 グリッドに位置し、第III層上で確認した。

[形態・規模] 長軸 208cm、短軸 165cm の楕円形を呈し、深さは 30cm である。

[堆積土] 褐色土を主体とした2層に分層した。

[出土遺物] 2層から深鉢土器の破片が出土している。

##### 第5号土坑（図56）

[位置] 本調査区東側のVII O-P-239 グリッドに位置し、埋没川右岸捨て場の第V層上面で確認した。

[形態・規模] 西側の一部を排水溝により欠くが南北に 100cm を計り、深さは 43cm である。

[堆積土] にぶい黄褐色土を主体とした2層に分層した。

[出土遺物] 1層から深鉢土器の破片が出土している。

##### 第6号土坑（図56）

[位置] 本調査区東側のVII O-P-231 グリッドに位置し、第IV層上で確認した。

[形態・規模] 長軸 79cm、短軸 66cm の楕円形を呈し、深さは 20cm である。

[堆積土] 褐色土を主体とした2層に分層した。

##### 第7号土坑（図56）

[位置] 本調査区東側のVII M237 グリッドに位置し、第III層上で確認した。

[形態・規模] 長軸 155cm、短軸 42cm の長楕円形を呈し、深さは 42cm である。

[堆積土] 褐色土を主体とした2層に分層した。

## 2 ピット(図56)

調査区内からは4基のピットを検出した。調査区内に点在し、用途や時期等は不明である。

ピット1は径50cm、深さ26cm、ピット2は径27cm、深さ17cm、ピット3は径44cm、深さ31cm、ピット4は径47cm、深さ18cmである。いずれも開口部は広いが浅いものである。遺物は出土していない。

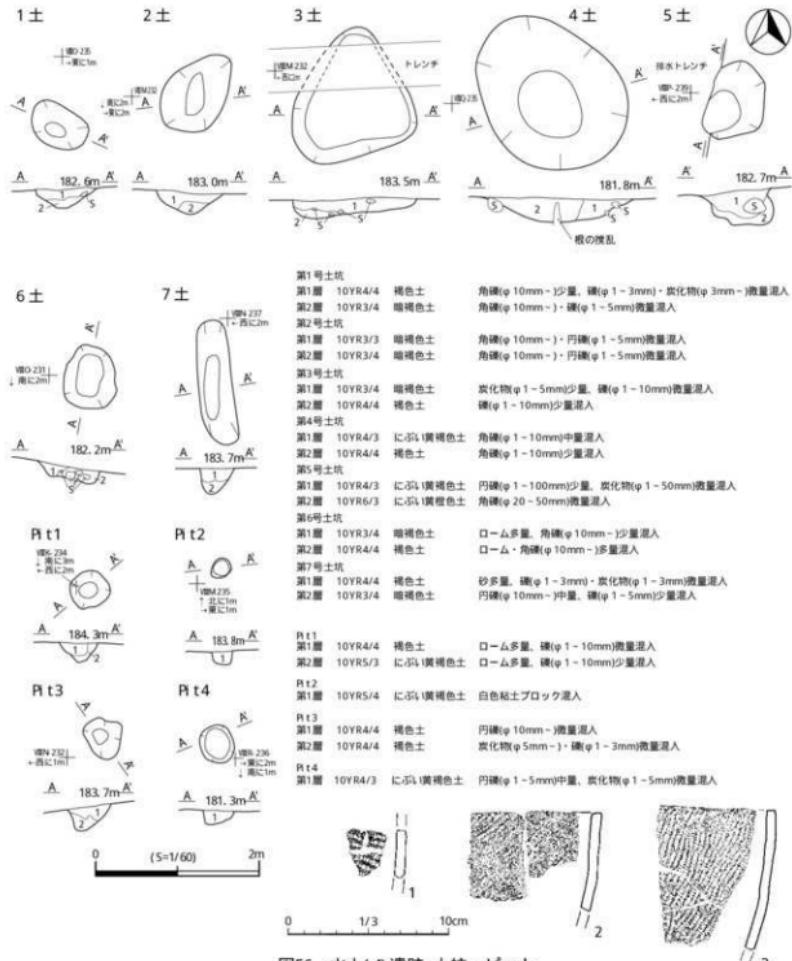


図56 水上(4)遺跡 土杭・ピット

### 3 配石遺構

#### 第1号配石遺構（図57）

〔位置〕本調査区東側のVII P-234グリッドに位置し、第III層上で確認した。

〔平面形・規模〕ほぼ円形状に礫が配列され、その径は270～280cmを計る。北西側の一部を欠くが、掘り方の残存状態から、この場所にも配石があったものとみられる。掘り方は比較的深く、最大で20cmほどのものもみられる。使用されている礫は長径10～40cmであり、安山岩や凝灰岩等がみられる。

〔堆積土〕掘り方となる1層のみの検出である。

〔出土遺物〕明確に伴う遺物は出土していないが、周辺から土器片が出土している。

〔時期〕時期決定の根拠を欠くが、周辺遺物の状況からは後期の範疇に収まるものと推定される。

第1号配石遺構

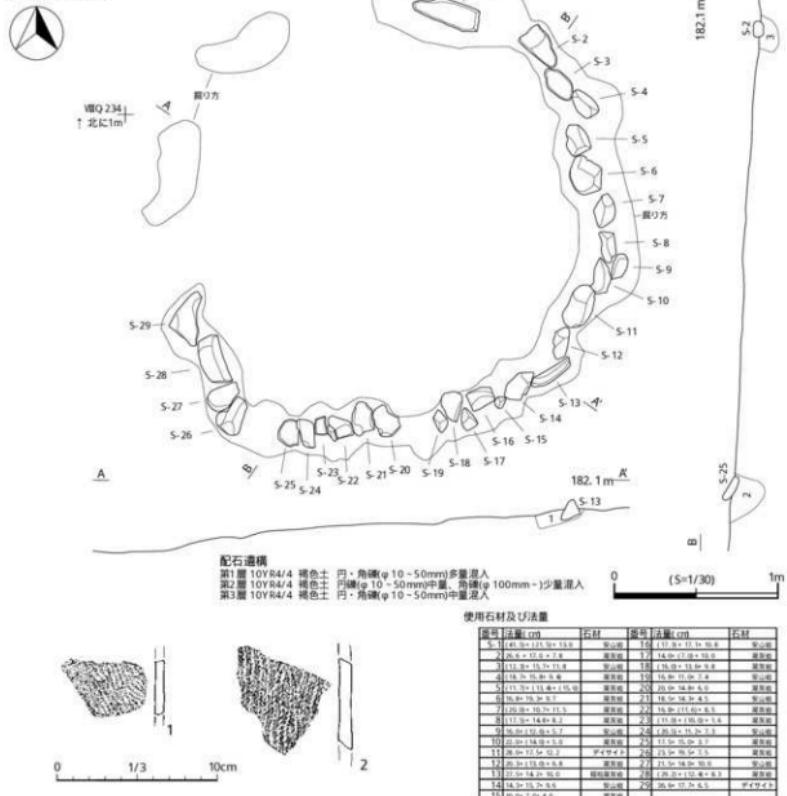


図57 水上(4)遺跡 配石遺構

#### 4 遺物捨て場（図58）

沢部分は確認調査時にも表土下からの遺物が多く出土していた部分であり、後の本調査段階に表土から2mほど沢を掘り下げたところ遺物の包含層を検出した。また沢の流水を迂回させる必要性から沢の右岸側に排水路を設けたが、この排水路断面においても表土下1mに遺物の包含層が確認された。よって沢部分については沢捨て場、一段高い右岸側部分については右岸捨て場として調査を行った。

なお、遺構が検出されている沢の左岸側では、捨て場とされるようなまとまった遺物は検出されていない。出土した遺物重量ではあわせて土器 816.4504kg、剥片石器など 142.4507kg ほどである。

このうち沢捨て場における遺物の出土範囲は、VII Nラインの北側に限定され、南側の沢上流からは僅かな出土にとどまる。主として遺物を包含するのは第6層とした黒褐色土層であり、出土遺物の大半がここから出土している。出土遺物は大きく2つの時期に分けられ、VII N-Uグリッドの上流側では後期の土器が、VII Wグリッドから北側の調査範囲外へ続く下流側では中期の土器がそれぞれ主体を占めており、捨て場としては少なくとも2時期にわたり使用された可能性が高い。

また右岸捨て場は、VII P-R-239・240グリッドを中心とした南北約8m、東西約5mの規模で、厚さ1~2cmほどの黒色土層が広がる範囲に捨て場が形成されている。出土遺物の時期も隣接する沢同様に後期を主体とすることから、沢捨て場に連続するものとみられる。なお右岸捨て場の東側に設定した確認調査トレンチからは、遺物・遺構とも検出されず、この右岸捨て場部分が遺跡の東端であると考えられ、旧県道28号南側の確認調査用トレンチからも遺構・遺物ともに検出されなかったことから、旧県道下に捨て場の遺物を供給した集落跡が存在する可能性がある。

(神)

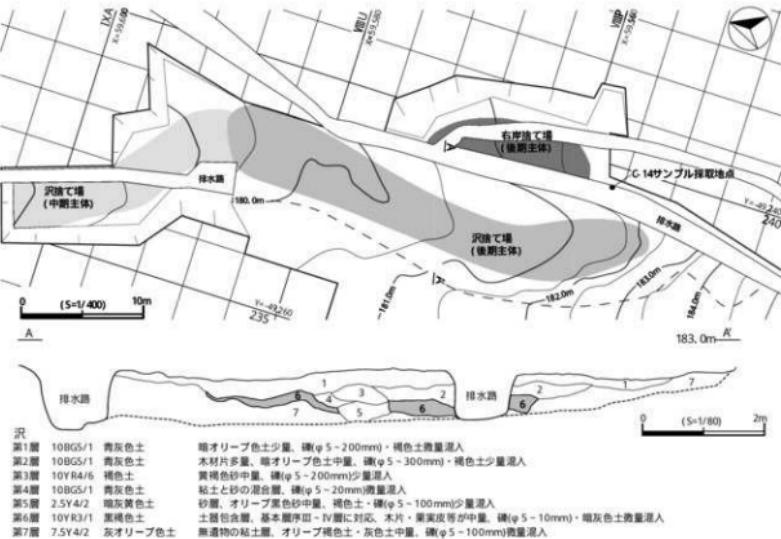


図58 土器捨て場

## 第2項 出土遺物

### 1 土器

水上(4)遺跡で出土した縄文土器は、中期から晩期まで段ボール箱で42箱分あり、大部分が縄文時代と考えられる沢の右岸捨て場から出土している。

第I群から第II群の土器は出土していない。

第III群 縄文時代中期の土器(図59、図60-3・8、図61-11・12)

第III群では、出土したほとんどが深鉢式土器であり、中葉の円筒上層c式からe式を中心に出土している。また、少数であるが、榎林式や最花式などの破片もみられる。図62-11・12は大木10式と思われる口縁部破片である。

第IV群 縄文時代後期の土器

1類 後期初頭から前葉の土器(図60-1・2・4~7・9~11、図61-2・9、図62-1~4)

深鉢土器は、鍵状の沈線文の他に、撚糸文(単軸絡条体第1類)や折返し口縁をもつものがみられる。図62-1は結束でない羽状縄文である。いずれも後期前半の十腰内I式土器とみられる。

3類 後期後葉の土器(図60-12・13、図61-1・3~8・10、図62-5~7・9・11~13、図63-1・3~5)

深鉢類は、薄手で粗製のものが多く、その形状は胴部から口縁部にかけて内湾している。中には図61-1のように1つだけ突起をもつものもみられる。また、文様帶に刻目帯や刺突帶をもつものは確認できなかったが、無紋や粘土瘤が貼付けられる深鉢も出土している。壺類(図63-5)は無紋でミガキ調整されているものである。いずれも十腰内V式以降の土器と考えられる。

第V群 縄文時代晩期の土器

1類 晩期前葉の土器(図62-8・10、図63-2・6~13)

a入組縄文帯と三叉文が主体文様のもの

深鉢類と台付鉢類は入組縄文帯と三叉文が口縁部から胴部にかけて施文され、平行沈線に刺突列(図63-2・11)を廻らせるものなどもみられる。注口土器(図63-7)は注口直下に粘土の貼付けがみられる。壺類、皿類は出土していない。大洞B1式と考えられる。

(中嶋)

### 2 石器

水上(4)遺跡で出土した石器は段ボール箱10箱分である。ほとんどが配石遺構に用いられた礫で、使用や調整の痕跡がみられるものは、剥片石器13点と礫石器が8点である。以下器種ごとに述べる。

剥片石器(図64-1~9)

石鎌(図64-1)

1点が出土した。有茎のものである。

石匙(図64-2・3)

2点が出土した。いずれも横型で、2は刃部がやや直線的に、3は弧状に作られている。

石錐(図64-7)

両面とも全面に剥離を施している。木製品の有茎石鎌の転用と思われる。

石籠(図64-4~6)

3点が出土した。4、5は長橢円型である。5はほぼ全面的に、4、6は縁辺のみに剥離調整を施し

ている4は側縁につぶれがみられる。6は基部を欠損し、全体形は不明である。3点とも刃部は弧状である。

#### 削・掻器(図64-8・9)

出土した5点中2点を図示した。8は三角形の石材の直線的な側縁に両面から剥離調整をしている。9は掻器としたもので、縁辺のほぼ全周を加工し、下端部で急角度の刃部を形成している。直線的な左側縁を緩い角度で調整しているので、ここを削器として使用した可能性がある。

#### 礫石器(図64-10~17)

##### 磨製石斧(図64-10・11)

縄文時代の沢(遺物捨て場)から1点が出土している。10は玢岩製で、基部が欠損しているほか、刃部にも細かな刃こぼれが見られる。研磨が弱く整形時の敲打痕が残り、稜も明瞭ではない。11は遺構外出土で玢岩製である。基部が欠損しているほか、刃部にも細かな刃こぼれが見られる。こちらは丁寧に研磨され、稜も明瞭である。

##### 敲磨器類(63-12・14・15)

遺構外からIII類が1点、V類が2点出土した。III類の12は凝灰岩製で、表裏両面にやや深い叩き、上端及び側面部に擦りの痕がある。また、表面中央及び上端部に炭化物と思われるものが付着する。V類は14が凝灰岩製、15が安山岩製である。14は表面中央付近に浅い叩きの痕が残る。15は表裏両面にやや深い叩きの痕が残るほか、炭化物と思われるものが付着している。

##### 石皿(図64-13・16・17)

遺構外からの出土で、いずれも側縁は無く中央部に平坦又は浅く凹んだ使用痕が見られる。16と17の2点は大型の石皿である。石材は凝灰岩2点(13・16)、デイサイト1点(17)である。

(佐藤・菅原)





图59 遗构外出土遗物(1)

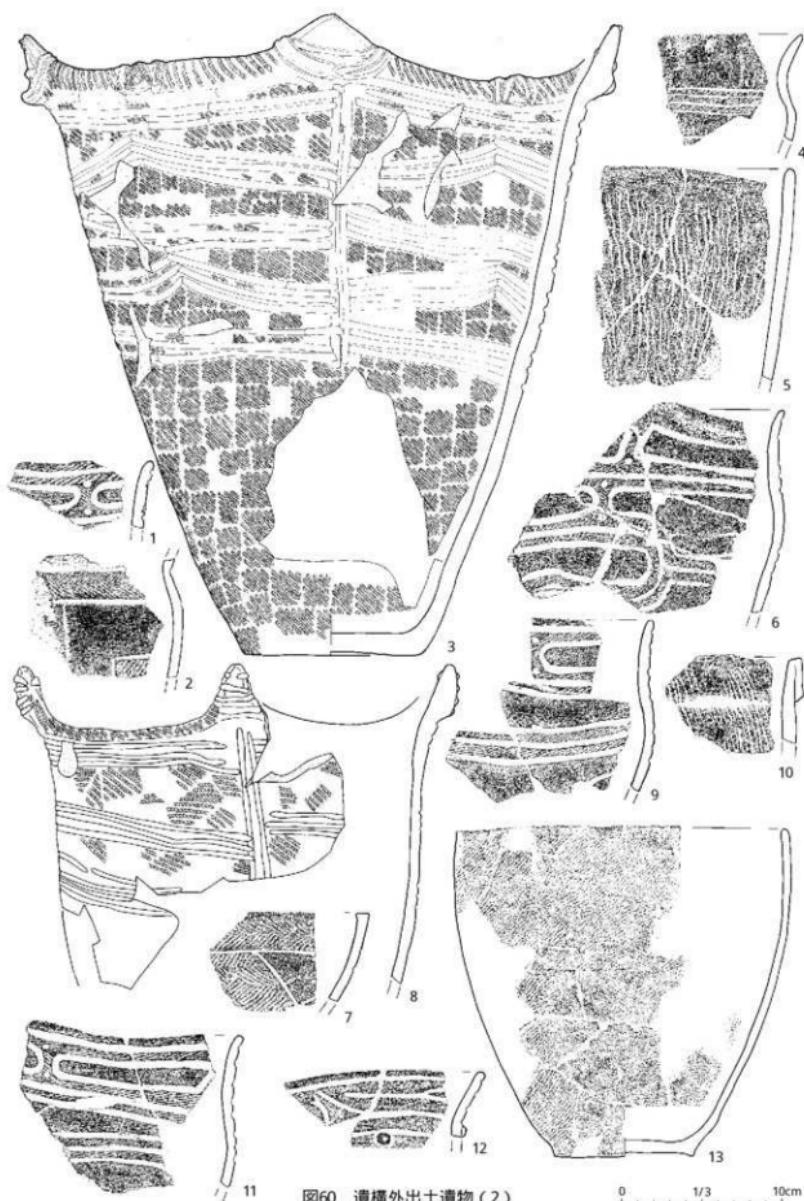


図60 遺構外出土遺物(2)



図61 遺構外出土遺物(3)

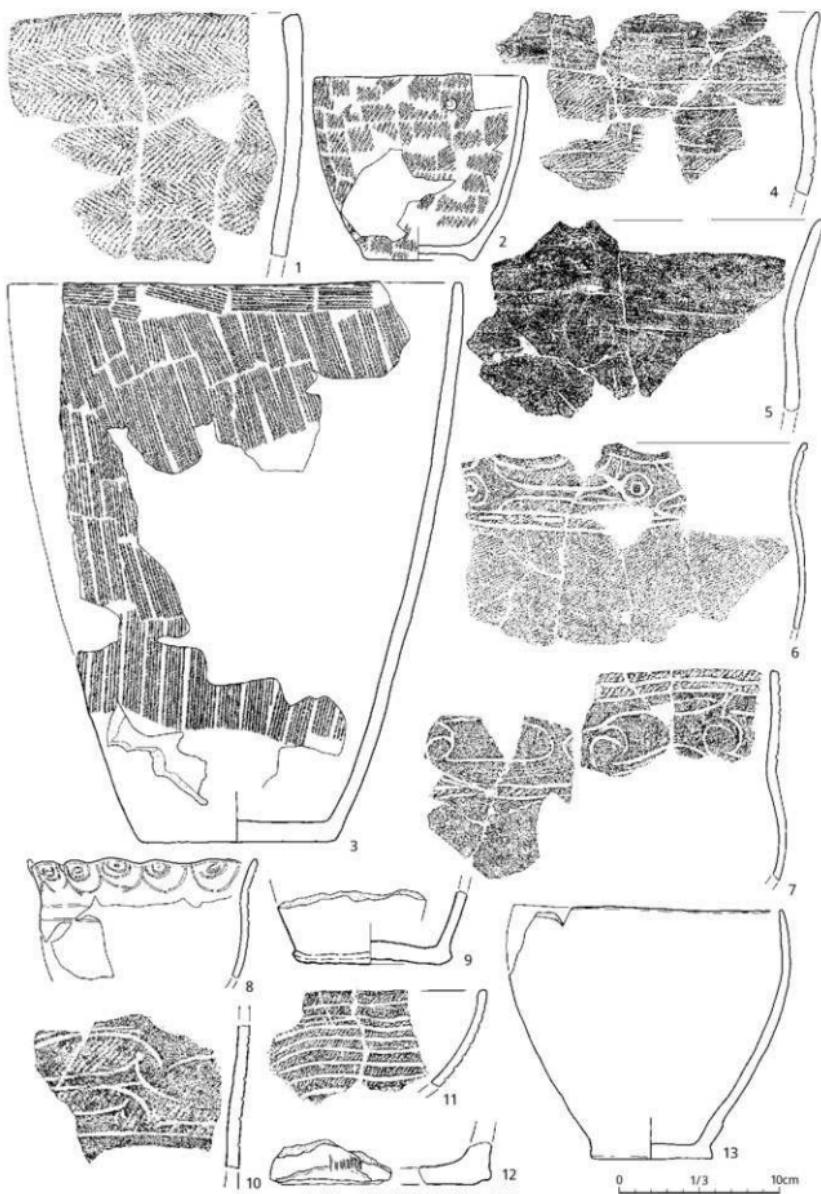


図62 遺構外出土遺物(4)

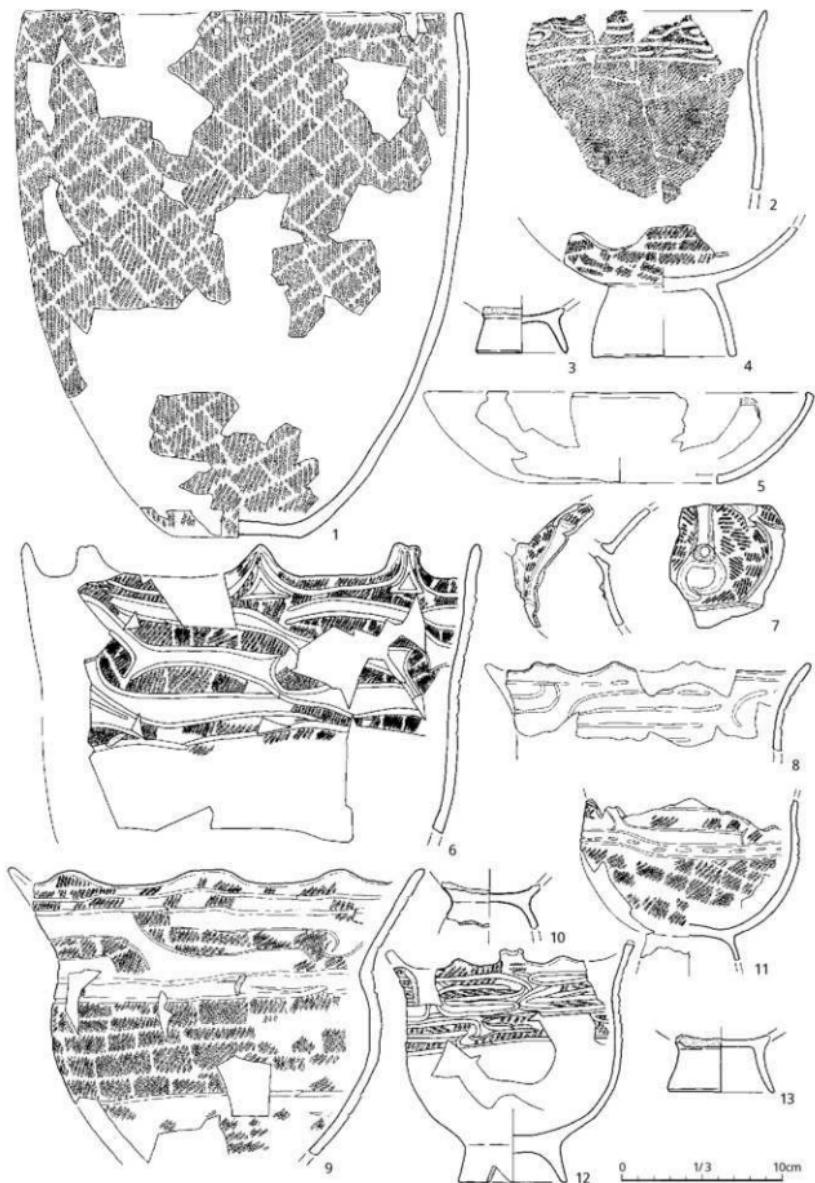


図63 遺構外出土遺物(5)

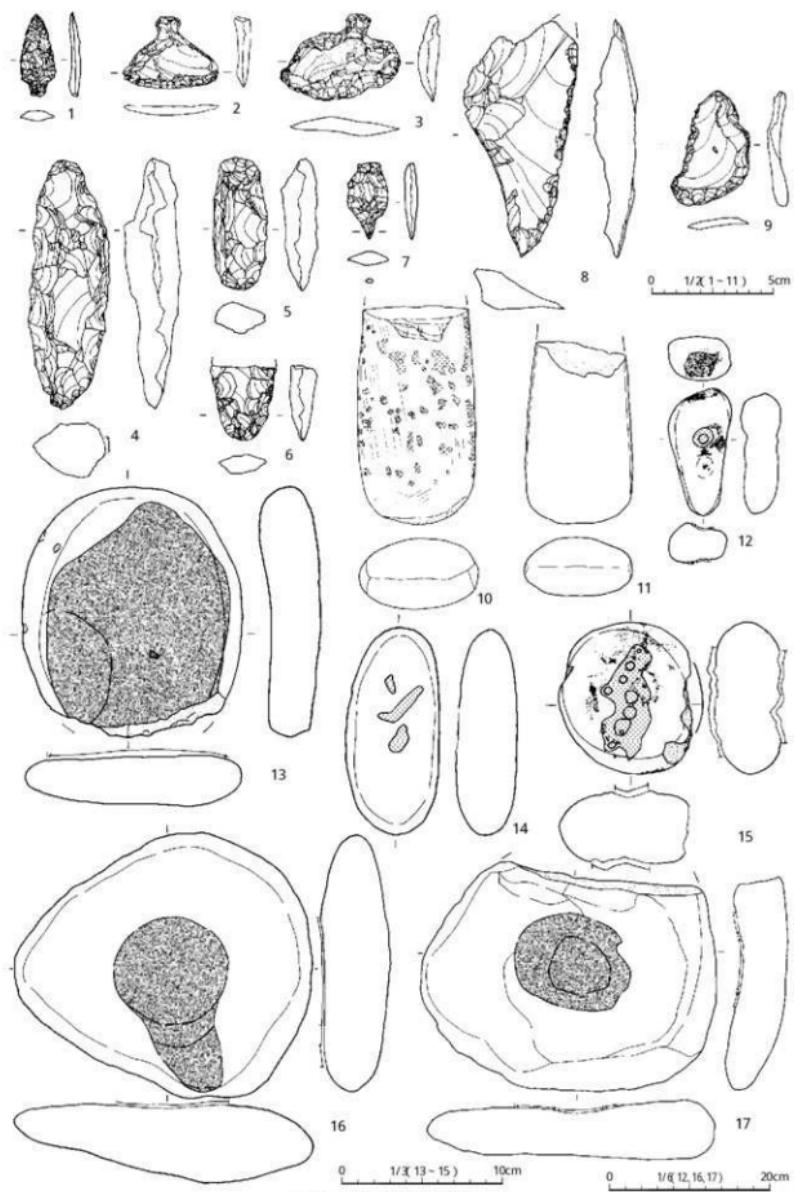


图64 遗構外出土遺物(6)

## 第6章 理化学的分析

### 第1節 放射性炭素年代測定結果報告書(AMS測定)(抄)

(株) 加速器分析研究所

#### 第1項 砂子瀬遺跡

##### (1) 遺跡の位置

砂子瀬遺跡は、青森県西目屋村砂子瀬字宮元に所在する。

##### (2) 測定の意義

遺跡内で検出された複数の埋設土器の年代を明らかにする。

##### (3) 測定対象試料

測定対象試料は、MP-10(C区)(図36参照)覆土から出土した木炭(SUNAKOSE01:IAA-71791), IIJ-86(D区)(図10参照)III層上面から出土した木炭(SUNAKOSE02:IAA-71792), 合計2点である。

##### (4) 化学処理工程

1. メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
2. 酸処理、アルカリ処理、酸処理(Alkaline Acid)により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
3. 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
4. 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を精製する。
5. 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
6. グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

##### (5) 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした14C-AMS専用装置を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシウ酸(HO<sub>2</sub>II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

##### (6) 算出方法

1. 年代値の算出には、Li bbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。
2. <sup>14</sup>C年代(Li bby Age: yr BP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(yr BP)として遡る年代である。この値は、δ<sup>13</sup>Cによって補正された値である。<sup>14</sup>C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差(±1σ)は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
3. δ<sup>13</sup>Cは、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分位偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cを測定した場合には表中に(AMS)と記す。
4. pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。
5. 歴年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。歴年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の歴年代範囲であり、1標準偏差(1σ = 68.2%)あるいは2標準偏差(2σ = 95.4%)で表示される。歴年較正プログラムに入力される値は、下桁を四捨五入しない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、歴年較正年代の計算に、IntCal 04データベース(Reimer et al. 2004)を用い、OkCal v4.0較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Wessinger 2001)を使用した。

##### (7) 測定結果

MP-10(C区)から出土した木炭(SUNAKOSE01:IAA-71791)の<sup>14</sup>C年代が3790 ± 30yr BP, IIJ-86(D区)から出土した木炭(SUNAKOSE02:IAA-71792)の<sup>14</sup>C年代が4270 ± 40yr BPである。歴年較正年代(1σ = 68.2%)は、SUNAKOSE01が2290 ~ 2190BC(58.2%), 2170 ~ 2140BC(10.0%), SUNAKOSE02が2920 ~ 2875BCである。化学処理および測定内容に問題はなく、炭素含有率も十分であることから、妥当な年代と考えられる。

## 第2項 水上(4) 遺跡1

### (1) 遺跡の位置

水上(4) 遺跡は、青森県西目屋村砂子瀬字水上に所在する。

### (2) 測定の意義

沢の形成された時期と出土土器の年代を明らかにする。

### (3) 測定対象試料

測定対象試料は、沢(ⅧS-227)のⅢ層(図58参照)から出土した木片(MIZUKAM(4)01:IAAA-71793)である。

### (4) - (6) は第1節と同様のため省略する。

### (7) 測定結果

沢(ⅧS-227)から出土した木片(MIZUKAM(4)01:IAAA-71793)の<sup>14</sup>C年代は $1410 \pm 30$ yr BPである。曆年較正年代( $1\sigma = 68.2\%$ )は、615~660ADである。化学処理及び測定内容に問題はなく、炭素含有率も十分であることから、妥当な年代と考えられる。

## 第3項 水上(4) 遺跡2

### (1) 測定対象試料

水上(4) 遺跡は、青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上地内に所在する。測定対象試料は、沢(Ⅲ層)から出土した土器内面付着炭化物(MZU(4)-1:IAAA-80648:図62-2)、捨て場(Ⅲ層)から出土した土器内面付着炭化物(MZU(4)-2:IAAA-80649:図63-11)、合計2点である。

### (2) 測定の意義

遺物包含層の年代を明らかにしたい。

### (3) - (5) は第1節と同様のため省略する。

### (6) 測定結果

14C年代は、沢(Ⅲ層)から出土した土器付着炭化物(MZU(4)-1:IAAA-80648)が $3040 \pm 30$ yr BP、捨て場(Ⅲ層)から出土した土器付着炭化物(MZU(4)-2:IAAA-80649)が $2950 \pm 30$ yr BPである。資料の炭素含有率は、共に60%程度であり、十分な値である。付着炭化物は、土器の内面から得られたが、δ<sup>13</sup>Cが共に-20~-15‰であることから、通常の陸生由来試料であり、海洋リザーバー効果を考慮する必要は無い。処理および測定内容にも問題は無く、妥当な年代と考えられる。

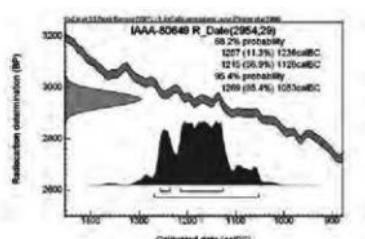
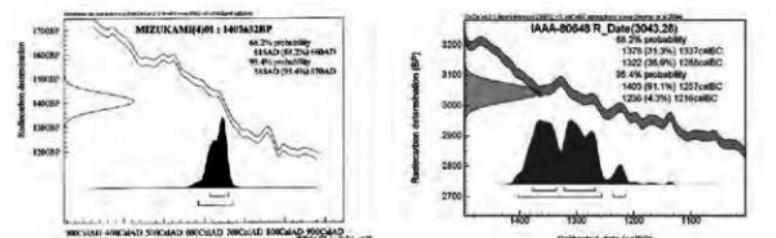
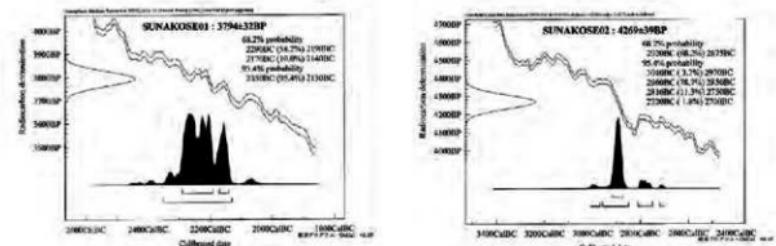
### 参考文献

- Stuiver M and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data, Radiocarbon 19, 355-363  
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program Radiocarbon 37(2), 425-430  
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363  
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Van Der Velde B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389  
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

IAA Code No.	試 料	BP時代および炭素の同位体比
IAAA-71791 砂子瀬 D区	試料採取場所：青森県西目屋村砂子瀬字宮元 砂子瀬遺跡 第10号土器埋設遺構	Lidby Age (yrBP) : -3,790 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰) : -24.46 ± 0.59 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) : -376.4 ± 2.5 $p\Delta^{13}\text{C}$ (‰) : 62.36 ± 0.25
	試料形態： 木片	
	試料名(番号)： SUNAKOSE01	
	(参考) δ <sup>13</sup> C の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) : -375.7 ± 2.4 $p\Delta^{13}\text{C}$ (‰) : 62.43 ± 0.24 Age (yrBP) : 3,790 ± 30
IAAA-71792 砂子瀬 D区	試料採取場所：青森県西目屋村砂子瀬字宮元 砂子瀬遺跡 D区基本層序第Ⅲ層	Lidby Age (yrBP) : 4,770 ± 40 $\delta^{13}\text{C}$ (‰) : -26.28 ± 0.55 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) : -412.3 ± 2.9 $p\Delta^{13}\text{C}$ (‰) : 58.77 ± 0.29
	試料形態： 木片	
	試料名(番号)： SUNAKOSE02	
	(参考) δ <sup>13</sup> C の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) : -413.8 ± 2.8 $p\Delta^{13}\text{C}$ (‰) : 58.62 ± 0.28 Age (yrBP) : 4,790 ± 40
IAAA-71793 水上(4) 水上(4)	試料採取場所：青森県西目屋村砂子瀬字宮元 水上(4) 遺跡 2(Ⅳ層)	Lidby Age (yrBP) : 1,410 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰) : -26.62 ± 0.73 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) : -160.8 ± 3.4 $p\Delta^{13}\text{C}$ (‰) : 83.92 ± 0.34
	試料形態： 木片	
	試料名(番号)： MIZUKAM(4)01	
	(参考) δ <sup>13</sup> C の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) : -163.6 ± 3.1 $p\Delta^{13}\text{C}$ (‰) : 83.64 ± 0.31 Age (yrBP) : 1,430 ± 30
IAAA-80648 水上(4)	試料採取場所：青森県西目屋村砂子瀬字宮元 水上(4) 遺跡 2(Ⅳ層)	Lidby Age (yrBP) : 3,040 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰) : -24.4 ± 0.46 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) : -376.4 ± 0.24 $p\Delta^{13}\text{C}$ (‰) : 68.46 ± 0.24
	試料形態： 炭化物(土器付着物 図62-2)	
IAAA-80649 水上(4)	試料名(番号)： MZU(4)-1	
	(参考) δ <sup>13</sup> C の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) : 68.6 ± 0.24 $p\Delta^{13}\text{C}$ (‰) : 3,030 ± 30
IAAA-80648 42328		

IAA Code No.	試 料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-80649	青森県西目屋村砂子測字荒元 水上(4) 遺跡 拱て堆(皿層) 試料形態 : 炭化物 (土器付着物 図63-11) 試料登録番号: MZU(4)-2	BP年代: 2,950 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (%): -20.8 ± 0.4 $\Delta^{14}\text{C}$ (%): = 69.23 ± 0.26 $\delta^{14}\text{C}$ (%): = 69.8 ± 0.25 $\text{pM}(\text{yr})$ : 69.8 ± 0.25 $\text{Age}(\text{yr BP})$ : 2,890 ± 30
#2328	(参考) る $^{13}\text{C}$ の補正無し	

試料番号	IAA Code No.	前処理方法	試料状態	処理前試料量	処理後試料量	燃焼量	残留灰量	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速度)	Libby Age (yrBP)	(yrBP) ± 80 (読み込み)	群年校正1 (yrcalBP)	群年校正2 (yrcalBP)		
SUNAKOSE01	IAAA-71791	AAA	乾燥	42.90mg	19.94mg	4.47mg	2.98mg	-24.46±0.59	3790±30	3794±32	2290-2190BC(58.5%)	2170-2140BC(10.0%)	2350-2130BC(95.4%)	
SUNAKOSE02	IAAA-71792	AAA	乾燥	37.86mg	15.84mg	4.53mg	3.01mg	-26.28±0.55	4270±40	4269±39	2920-2875BC(68.2%)	3010-2970BC(13.7%)	2960-2850BC(78.7%)	
MEZUKAMI(4)01	IAAA-71793	AAA	乾燥	330.50mg	24.46mg	5.39mg	3.15mg	-26.62±0.73	1410±30	1407±32	615AD-666AD(68.2%)	585-670AD(9.4%)	585-670AD(95.4%)	
MEZU(4)-1	IAAA-80648	AaA	乾燥	21.26	13.29	3.02	1.85	-24.41±0.46	3040±30	3043±28	13780BC-13370BC(31.3%)	1403BC-1257BC(91.1%)	1322BC-1268BC(36.9%)	1236BC-1216BC(4.3%)
MEZU(4)-2	IAAA-80649	AaA	乾燥	20.81	9.69	3.08	1.87	-20.8±0.40	2950±30	2954±29	1257BC-1234BC(11.3%)	1215BC-1126BC(56.9%)	1269BC-1053BC(95.4%)	



## 第7章　まとめ

### 1　遺跡の立地

砂子瀬遺跡は、岩木川と湯ノ沢川に挟まれた河岸段丘上に位置し、標高はおよそ190～200mである。調査区は、旧砂子瀬集落の跡地であったため、大部分が造成による影響を受けているが、縁辺部の一部に遺構が残存している。水上(3)遺跡・水上(4)遺跡も岩木川右岸の河岸段丘上に位置し、標高は170～180m前後である。調査区は津軽ダムが建設される以前の集落跡で、平坦部を中心に戸畠が広がっていた記録はあるものの、現況は草原に雜木が茂り、僅かに旧道が確認でき、ダム湖(美山湖)の増水期には大部分が水没している。

### 2　検出遺構

調査した遺構は、砂子瀬遺跡では、竪穴住居跡1軒、土坑30基( D区の3基を含む)、土器埋設遺構14基、配石遺構5基、屋外配石炉1基である。水上(3)遺跡では、土坑1基とピット4基で、水上(4)遺跡では土坑7基、ピット4基、配石遺構1基、遺物捨て場1カ所で、いずれも縄文時代と考えられる。

### 3　出土遺物

出土した遺物は、砂子瀬遺跡が段ボール箱で73箱分、水上(3)遺跡が段ボール箱で9箱分、水上(4)遺跡が段ボール箱で53箱分である。時期は縄文時代中期から晩期にかけての遺物である。

### 4　まとめ

調査の結果、砂子瀬遺跡のC区は、疊層を掘り込んで縄文時代後期前半の遺構が構築されているが、遺物は縄文時代中期から晩期までと幅広く出土し、周辺に当該時期の後期前半以外の遺構が存在すると思われる。

配石遺構の中で扁平な川原石を箱状に組み合わせているものが2基確認されており、周辺からは土器棺と思われる土器破片も出土していることから石棺墓の可能性が考えられる。土器埋設遺構は調査区内に点在し、第10号土器埋設遺構の年代測定からBC2,200という縄文時代後期の値で土器形式からも妥当と考えられる。

屋外配石炉は、環状列石で国史跡に指定されている青森市小牧野遺跡の石組と同じく規則的に縦横に配置されており、このような屋外配石炉は、県内では小牧野遺跡に次いで2例目である。

D区もC区と同様に、旧砂子瀬集落によって大部分が削平されており、一部残存している部分から縄文時代中期後半と思われる土坑が検出されている。D区の遺構確認面は疊層ではなく、縄文時代中期(第6章：放射性年代測定の項参照)に河川の氾濫によって疊層上に堆積した粘土質土層である。

水上(3)遺跡は、工事計画の変更やダム湖の水位が上昇し調査区の一部が水没したことなどにより、当初予定していた範囲確認の調査は途中で見送られ、木戸ヶ沢に面した東端部分と工事用道路部分の発掘調査が行われた。調査では縄文時代後期後半の注口土器破片が多量に出土しており意図

的な廃棄だとすれば注目される。今後の調査が必要な面積は、約 27,000 m<sup>2</sup>である。

水上(4)遺跡では、工事用道路部分の発掘調査を行った。平坦部に土坑などが検出されたものの堅穴住居跡は確認されていない。しかし、調査した沢からは、縄文時代中期中葉と後期後葉の土器が多く出土しており、周辺に当該時期の集落が存在する可能性を示唆している。また、調査では縄文時代の遺物捨て場が、北側に広がっていることが分かり、今後調査が必要な面積は約 3,000 m<sup>2</sup>と推定される。

今後も津軽ダムの完成まで発掘調査が続けられ、調査対象遺跡も広範囲になることから、海岸線から遠く離れた標高 200 m 以上の山奥に生活を求めた縄文時代の人々の生活がより明らかになっていくと考えられる。今後の調査に期待したい。

最後に調査に協力していただきました多くの方々に心から感謝申し上げます。

(調査担当者)

#### 《引用・参考文献》

- 青森県教育委員会 1992 『富ノ沢(2) V 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 143 集
- 青森県教育委員会 1993 『富ノ沢(2) 遺跡VI-富ノ沢(3) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 147 集
- 青森県教育委員会 1998 『青森県遺跡地図』
- 青森県教育委員会 2006 『川原平(1)・(4) 遺跡 大川添(1)・(2) 遺跡 水上遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 409 集
- 青森県教育委員会 2008 『水上遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第 452 集
- 東北地方整備局津軽ダム工事事務所 2005 『津軽ダム西目屋地域生活文化調査報告書』
- 北海道文化財研究所 1987 『ヘロカルウス遺跡』北海道文化財研究所報告書第 3 集
- 北海道沿村教育委員会 1997 『ヘロカルウス遺跡 E ~ G 地点』埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
- 西目屋村役場 1991 村制施行百周年記念『西目屋村誌』
- 安孫子 昭二 1994 『瘤付土器』縄文文化の研究 4 雄山閣出版株式会社
- 葛 西 勲 2002 『再葬土器棺墓の研究』- 縄文時代の洗骨葬 - 再葬土器棺墓の研究刊行会
- 葛 西 勲 2006 『続・再葬土器棺墓の研究』- 切断壺形土器と子供の再葬を考える - 再葬土器棺墓の研究刊行会
- 小林 主一 2003 『東北北半における縄文晚期前葉の注口土器』『研究紀要創刊号』(財) 山形県埋蔵文化財センター
- 鈴木 克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年研究』雄山閣出版株式会社
- 鈴木 克彦 1994 『亀ヶ岡式土器』『縄文文化の研究 4』雄山閣出版株式会社
- 村越 潔 1984 『円筒土器文化』雄山閣出版株式会社

## 土器 觀察表

#### 06 水上(2)遺跡(美山湖右岸上流遺跡)

外語番号	出土地・部位	形・種	部 位	外 文	文 横	内面構造	分類	備 考
HS-1	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縁部	口縁部 - 帽状	口縁部 - U縁文	三 万 手	III	
HS-2	トレンチ - 03 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-3	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-4	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-5	トレンチ - 02 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-6	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	III	
HS-7	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-8	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-9	トレンチ - 02 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-10	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-11	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-12	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-13	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-14	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-15	トレンチ - 02 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-16	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-17	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-18	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-19	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	口縫部 - L縫文	口縫部 - U縫文	三 万 手	II	
HS-20	トレンチ - 02 頂面	尖錐	細部	剥離	剥離 - U縫文	三 万 手	II	
HS-21	トレンチ - 01 頂面	尖錐	細部	剥離	剥離 - U縫文	三 万 手	II	外語スズ状模化付帯
HS-22	トレンチ - 01 頂面	尖錐	細部	剥離	剥離 - U縫文	三 万 手	II	
HS-23	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	剥離 - 帽状	剥離 - U縫文	三 万 手	II	
HS-24	トレンチ - 02 頂面	尖錐	細部	剥離	剥離 - U縫文	三 万 手	II	
HS-25	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	剥離	剥離 - U縫文	三 万 手	II	
HS-26	トレンチ - 01 頂面	尖錐	細部	剥離	剥離 - U縫文	三 万 手	II	
HS-27	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	剥離	剥離 - U縫文	三 万 手	IV	赤色顔料付帯
HS-28	トレンチ - 01 頂面	尖錐	細部	剥離	剥離 - U縫文	三 万 手	IV	
HS-29	トレンチ - 01 頂面	尖錐	細部	剥離	剥離 - U縫文	三 万 手	IV	
HS-30	トレンチ - 01 頂面	尖錐	細部	剥離	剥離 - U縫文	三 万 手	IV	
HS-31	トレンチ - 01 頂面	尖錐	口縫部	剥離	剥離 - U縫文	三 万 手	IV	
HS-32	トレンチ - 03 頂面	尖錐	口縫部 - 縫合部	剥離 - 剥離	剥離 - U縫文	三 万 手	IV	外語スズ状模化付帯

#### 06 水上(3)遺跡(美山湖右岸下流域遺跡)

改回番号	出生年月・属機	機種	部位	外観・文様	内部構造	分類	備考
改回-1	ドレンシ-04	翼端	尖鋸	口縁部-凹形尖鋸片	三刃半	IV	
改回-2	ドレンシ-04	翼端	尖鋸	口縁部-丸鋸	三刃半	IV	
改回-3	ドレンシ-04	翼端	尖鋸	口縁部-複数刃鋸片	三刃半	IV	
改回-4	ドレンシ-03	翼端	尖鋸	口縁部-凹形尖鋸片	三刃半	V	

06 砂子瀨村元遺跡

回数	出土地名・部位	器種	部位	外形・文様		内部構造	分類	備考
				絵文	縹文			
006-5	トレンチA	口縹	足縹	口縹文	絵文？ 貼付上部縹	折返し口縹	三ガキ	III
006-6	トレンチA	口縹	足縹	口縹	折返し口縹	三ガキ	III	
006-7	トレンチA	口縹	足縹	口縹	U縹文	三ガキ	III	
006-8	トレンチA	口縹	足縹	口縹	縹文	三ガキ	III	
006-9	トレンチA	口縹	足縹	口縹	縹文	三ガキ	III	
006-10	トレンチB	口縹	足縹	口縹	U縹文	三ガキ	IV	内面ス状模化物付 縹文
006-11	トレンチB	口縹	足縹	口縹	縹文？ 沈縹	三ガキ	IV	
006-12	トレンチD	口縹	足縹	口縹	縹文	三ガキ	IV	

06 砂子灘遺跡

品番	出力位置・周辺	部	種	品	位	外	内	規	内面規	分類	備
000-13	レンチード-01 横面	支承	樹脂	L0004	7	沈縫?	沈縫	IV	三万円	IV	
000-14	レンチード-01 横面	支承	樹脂	L0004	8	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-15	レンチード-01 横面	支承	樹脂	L0004	9	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-16	レンチード-04 横面	支承	樹脂	L0004	10	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-17	レンチード-02 横面	支承	口締部	L0004	11	沈縫	中間樹脂接着部第1層	IV	三万円	IV	
000-18	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	12	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-19	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	13	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-20	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	14	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-21	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	15	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-22	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	16	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-23	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	17	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-24	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	18	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-25	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	19	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-26	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	20	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-27	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	21	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-28	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	22	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-29	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	23	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-30	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	24	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-31	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	25	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-32	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	26	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-33	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	27	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-34	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	28	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-35	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	29	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-36	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	30	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	崩落
000-37	レンチード-02 横面	支承	口締部	L0004	31	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	内面スラスト化物行重
000-38	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	32	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-39	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	33	沈縫	沈縫	IV	三万円	IV	
000-40	レンチード-01 横面	支承	口締部	L0004	34	沈縫	沈縫	IV	三万円	V-1	大潤区

#### 07 砂子灘遺跡 穩穴住居跡

田间调查号	出土位置·层数	器 物	层 面	位 置	出 土 文 横	内部分割·分量		编 号
						上层	下层	
ISL-2-1	SI-L2-2	斧	深灰	口棱部	RW 红烧带体第1层	三三半	一	
ISL-2-2	SI-L2-2	斧	浅灰	口棱部-腹部	RW 红烧带体第1层	三三半	一	
ISL-2-3	SI-L2-2	斧	浅灰	口棱部-腹部	RW 红烧带体第1层	三三半	一	
ISL-2-3'	SI-L2-2	斧	深灰	断面	RW 红烧带体第1层	三三半	一	
ISL-2-4	SI-L2-2	斧	深灰	断面	RW 红烧带体第1层	三三半	IV	
ISL-2-4'	SI-L2-2	斧	深灰	小型上端	底部	一二半	一	P-5d
ISL-2-5	SI-L2-2	斧	深灰	断面	底部	一二半	一	
ISL-2-6	SI-L2-2	斧	深灰	断面	底部	一二半	一	
ISL-2-7	SI-L2-2	斧	深灰	断面	底部-腹部	一二半	一	
ISL-2-8	SI-L2-2	斧	深灰?	口棱部	横状把手	一二半	一	
ISL-2-9	SI-L2-2	斧	深灰?	口棱部	横状把手	一二半	一	P-25-27

英18-1 5K-5 鹽土

回路-2	SK 6	覆土	沟槽	口槽部	次槽	LBBW文	三刀井	IV
回路-3	SK 6	覆土	沟槽	口槽部	次槽	LBBW文	三刀井	IV
回路-4	SK 6	覆土	沟槽	口槽部	次槽	LBBW文	三刀井	IV
回路-5	SK 6	覆土	沟槽	口槽部	次槽	LBBW文	三刀井	IV













砂子瀬・水上(3)・水上(4)遺跡遠景(東→)



砂子瀬遺跡 屋外配石炉(南東→)

写真1 砂子瀬・水上(3)・水上(4)遺跡



水上(2)遺跡トレンチ⑤-03〔南→〕



水上(2)遺跡トレンチ⑤-02〔西→〕



砂子瀬村元遺跡(トレンチD)〔北→〕



砂子瀬村元遺跡 旧集落の石積みK トレンチD〔北東→〕



水上(2)遺跡トレンチ⑥-06〔東→〕



水上(2)遺跡トレンチ⑥-02〔西→〕

写真2 平成18年度の発掘調査



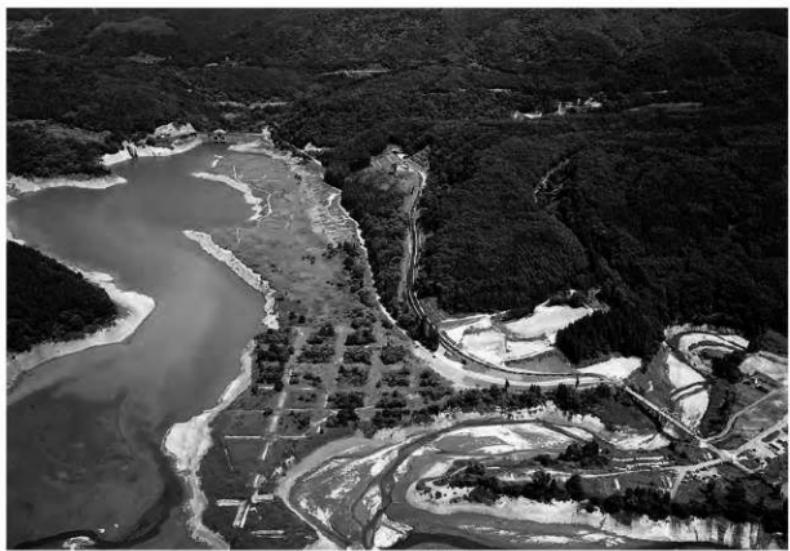
砂子瀬遺跡 トレンチ④-01【南→】



水上(2) 遺跡トレンチ①-01【南→】



砂子瀬遺跡 トレンチ⑤-02【西→】



水上(2)(3)(4) 遺跡全墨西→)

写真3 平成18年度の発掘調査



砂子瀬遺跡 トレンチ④-01【南→】



水上(2) 遺跡トレンチ①-01【南→】



砂子瀬遺跡 トレンチ⑤-02【西→】



水上(2)(3)(4) 遺跡全墨西→)

写真3 平成18年度の発掘調査



砂子瀬遺跡全照(南→)



C区作業状況



D区作業状況



C区作業状況



C区作業状況

写真4 砂子瀬遺跡



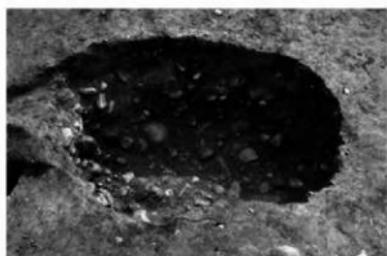
第2号竪穴住居跡・第D号・第1号土坑完掘 南西→)



第2号竪穴住居跡土壁断面 西→)



第2号竪穴住居跡 遺物出土状況 西→)

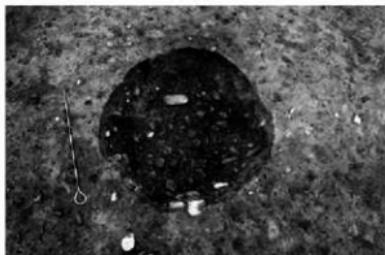


第6号土坑完掘 北東→)



第15号土坑完掘 南→)

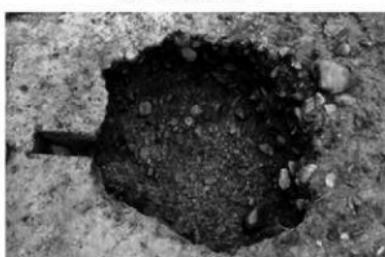
写真5 砂子瀬遺跡 竪穴住居跡・土坑



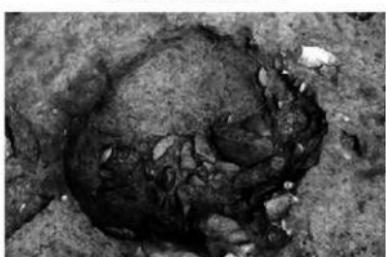
第17号土坑完掘(南→)



第21号土坑土層断面(西→)



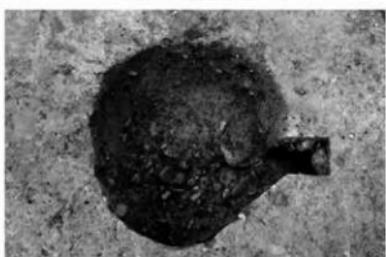
第26号土坑完掘(南→)



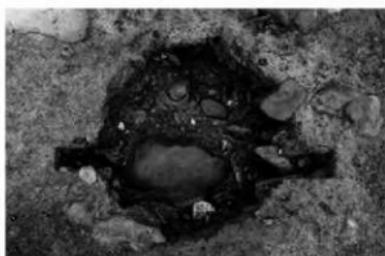
第28号土坑完掘(南東→)



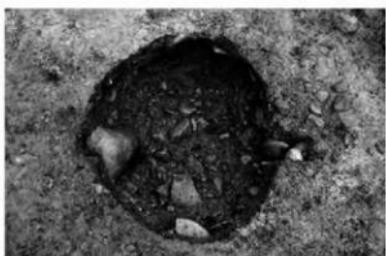
第31号土坑完掘(南東→)



第32号土坑完掘(南西→)



第36号土坑完掘(南→)



第37号土坑完掘(南→)

写真6 砂子瀬遺跡 土坑



第1号配石遺構(南西→)



第1号配石遺構土層断面(東→)



第2号配石遺構(南西→)



第3号配石遺構(南→)



第4号配石遺構(南西→)



第5号配石遺構(西→)



屋外配石炉土層断面(西→)



屋外配石炉レプリカ作製作業

写真7 砂子瀬遺跡 配石遺構・屋外配石炉



第2号土器埋設遺構土層断面図( 北西 → )



第6号土器埋設遺構土層断面図( 南西 → )



第9号土器埋設遺構土層断面図( 南東 → )



第10号土器埋設遺構土層断面図( 南西 → )



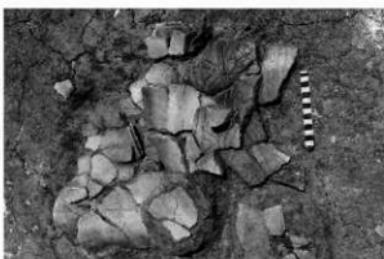
第14号土器埋設遺構土層断面図( 北 → )



砂子瀬遺跡作業状況



遺構外土器( 図46-1 ) 出土状況



土器集中域の土器( 図44-1 ) 出土状況

写真 8 砂子瀬遺跡 土器埋設遺構・遺構外出土遺物



水上(3) 遺跡調査区全景(南西→)



調査区(東→)



作業状況



作業状況



土器出土状況

写真9 水上(3)遺跡



水上(4)遺跡調査区全貌(南東→)



第1号配石遺構 東→)



遺物捨て場作業状況



作業状況



作業状況

写真10 水上(4)遺跡

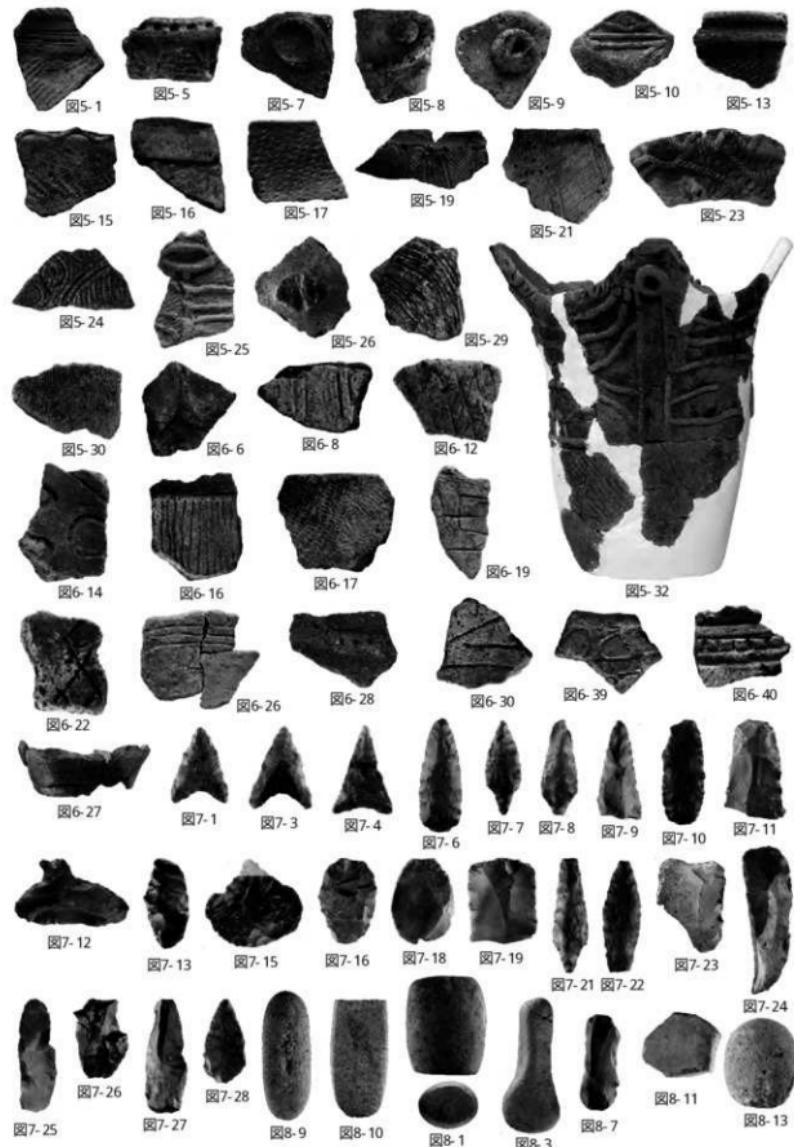


写真11 平成18年度の出土遺物

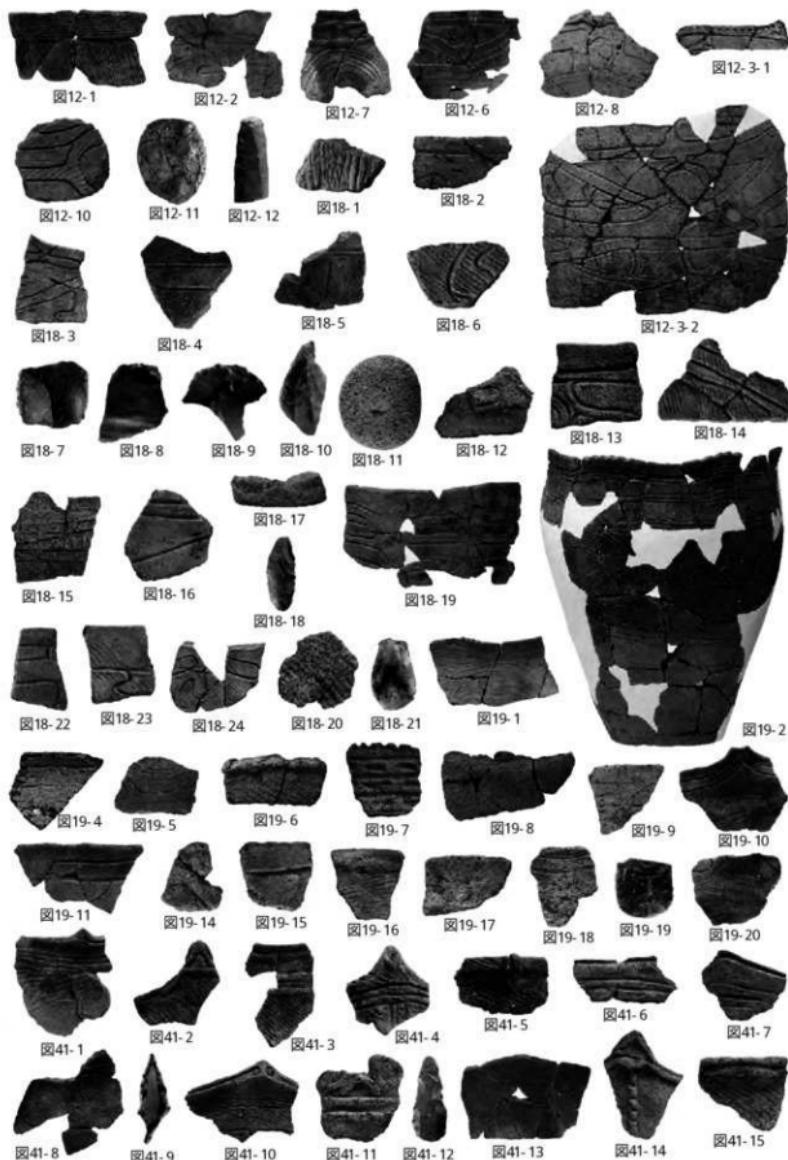


写真12 砂子漬遺跡竪穴住居跡・土坑出土遺物

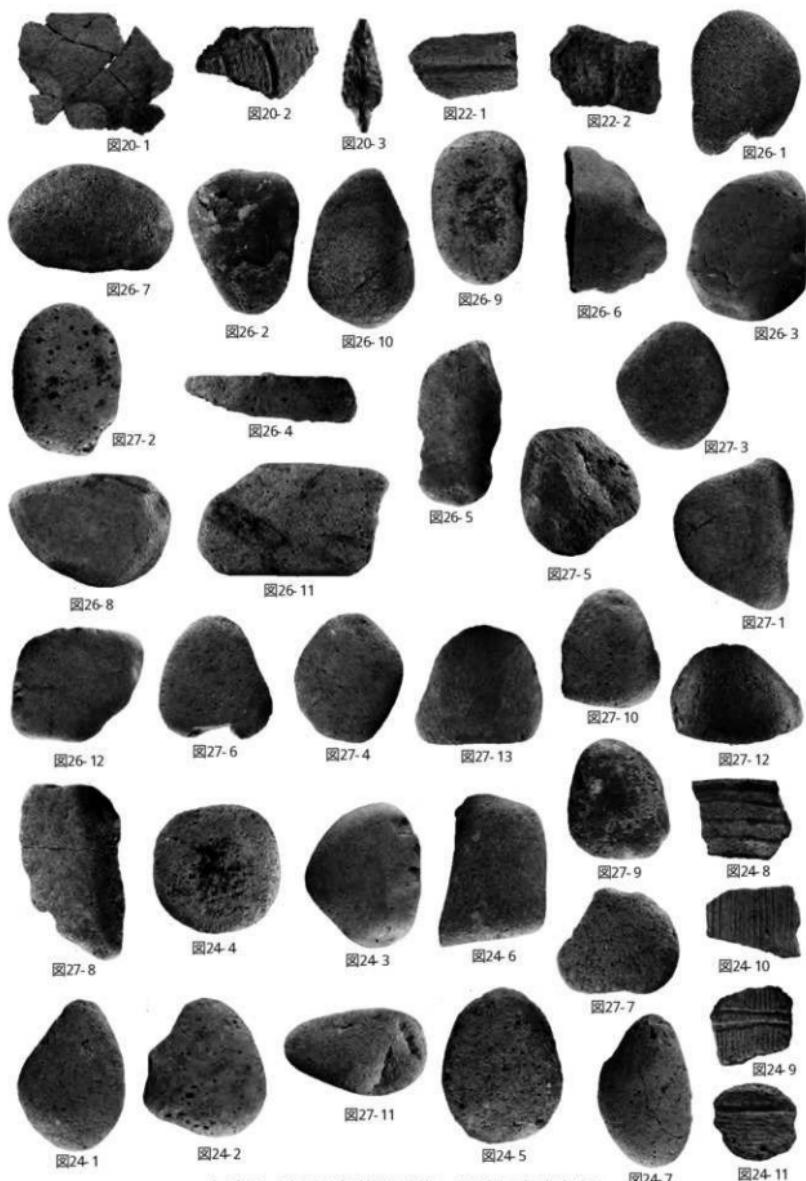


写真13 砂子瀬遺跡配石遺構・屋外配石炉出土遺物

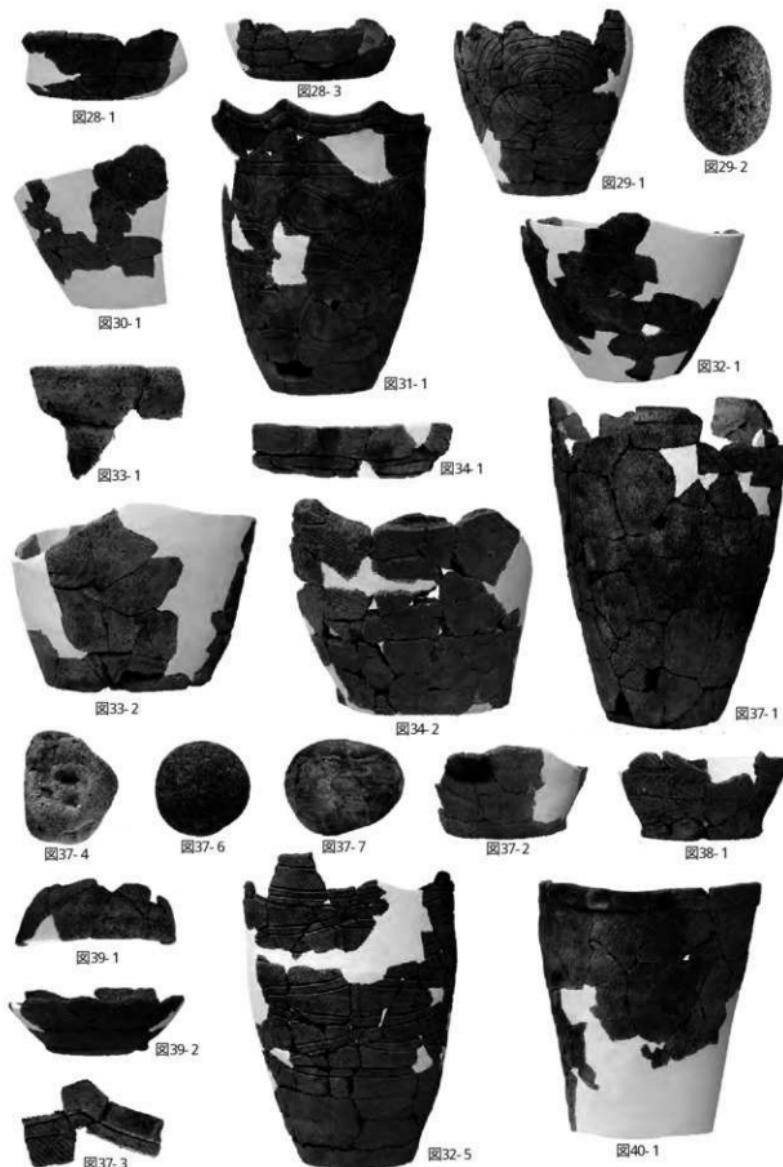


写真14 砂子瀬遺跡 土器埋設構出土遺物

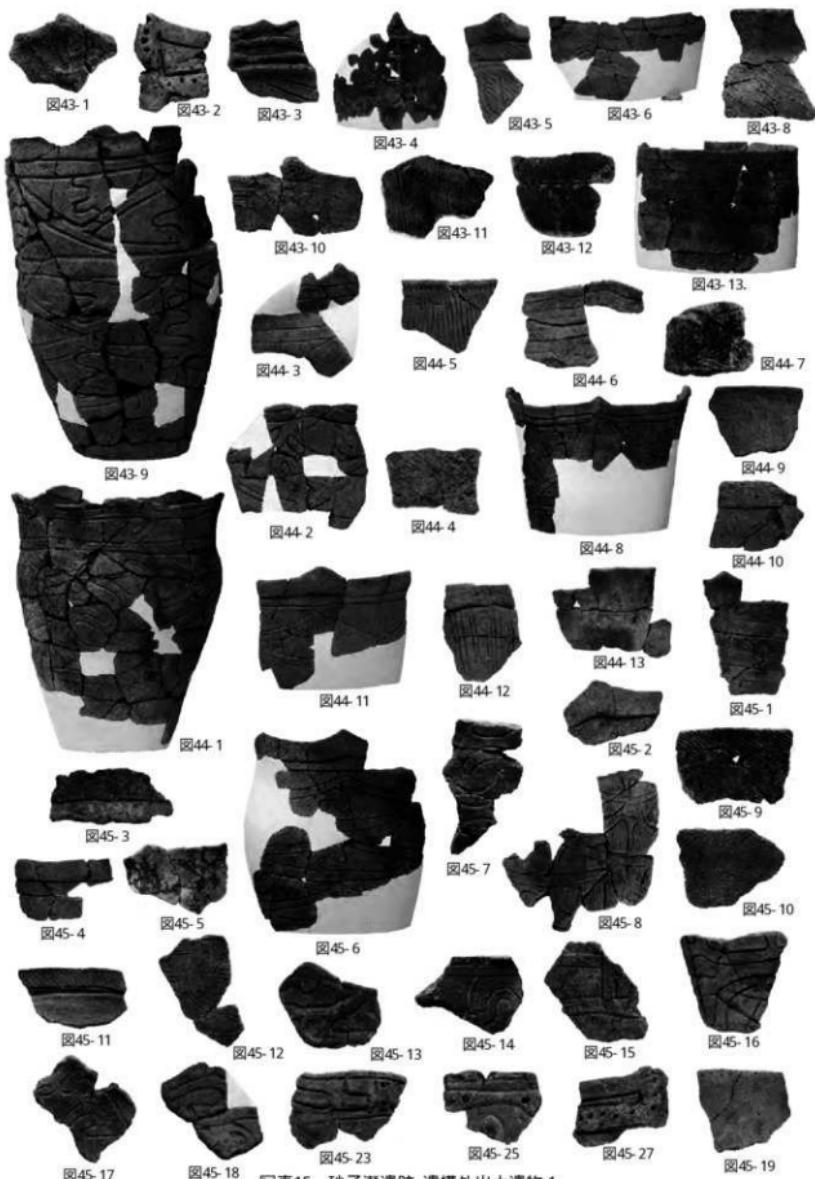
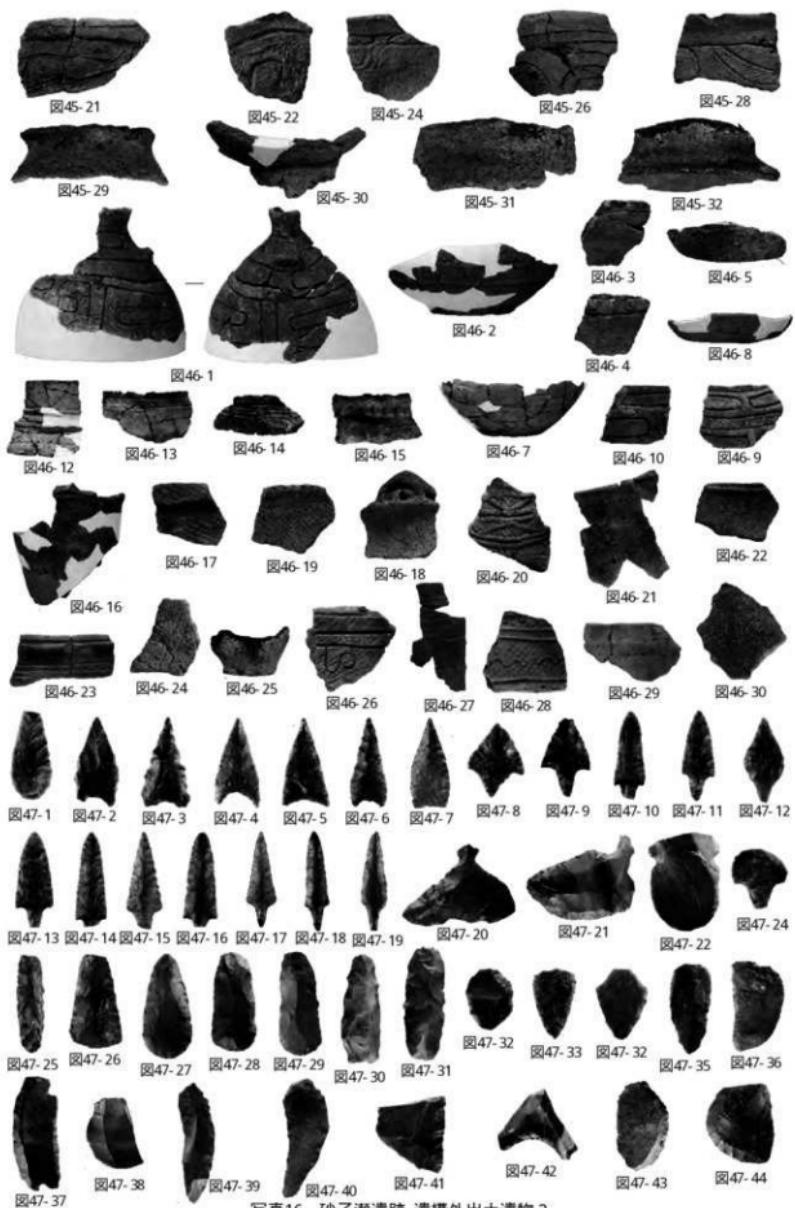


写真15 砂子瀬遺跡 遺構外出土遺物 1



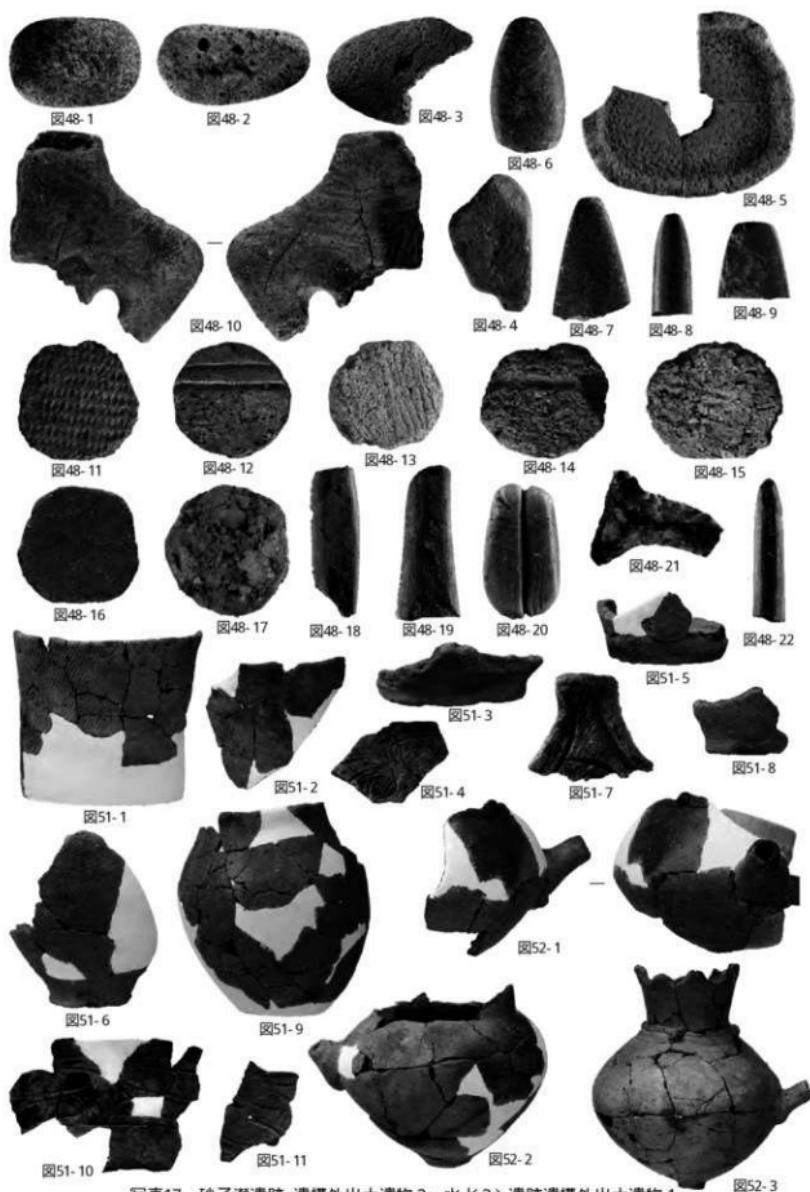


写真17 砂子瀬遺跡 遺構外出土遺物 3・水丘3) 遺跡遺構外出土遺物 1

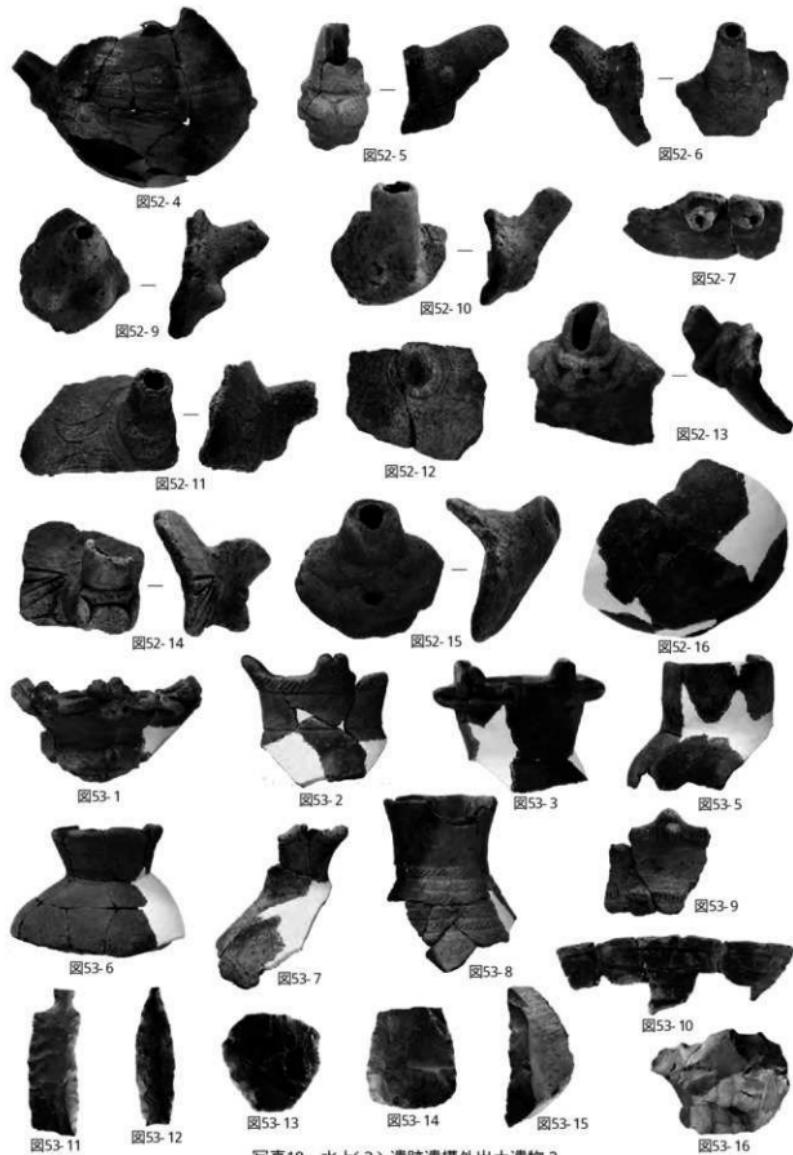


写真18 水上(3)遺跡遺構外出土遺物2



写真19 水上(4) 遺跡遺構内・遺構外出土遺物 1

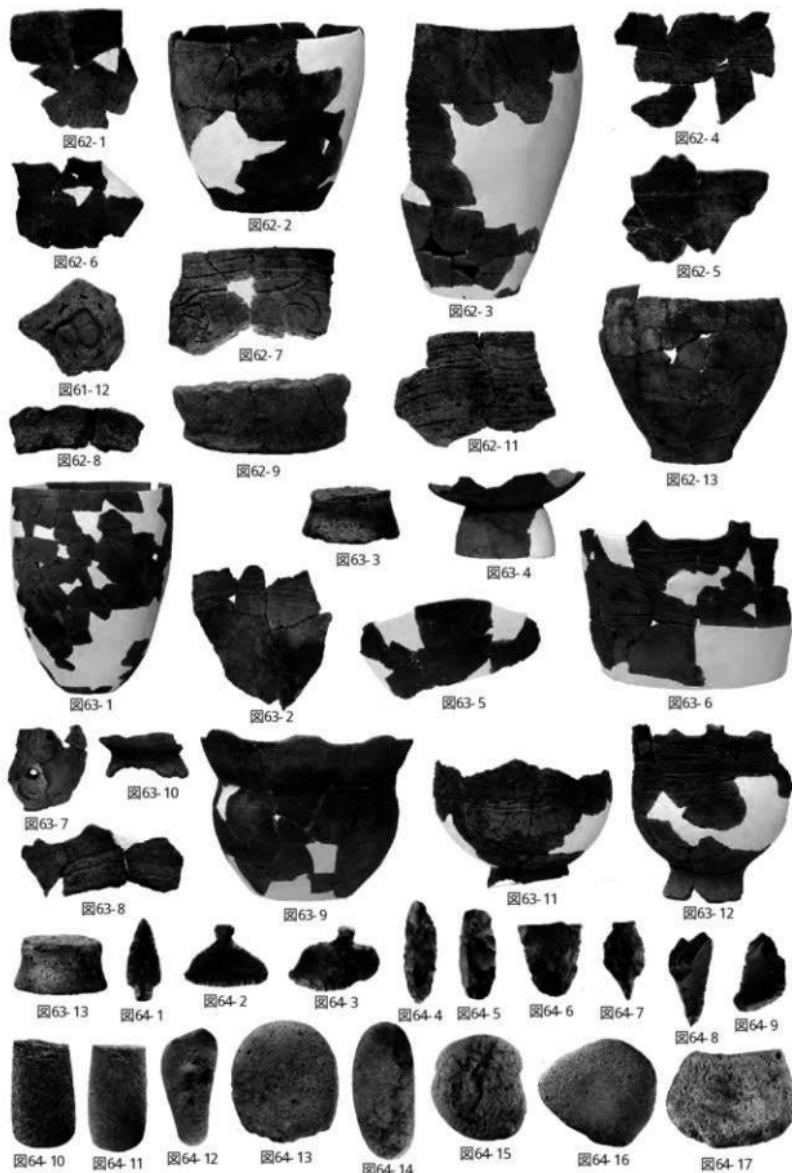


写真20 水上(4)遺跡遺構外出土遺物2

# 報告書抄録

ふりがな	すなこせいせき、みずかみ3)いせき、みずかみ4)いせき						
書名	砂子瀬遺跡、水上3)遺跡、水上4)遺跡						
副書名	津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告						
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第466集						
編著者名	中嶋 友文・佐藤 純子・神 昌樹・菅原 優太						
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152 15 TEL: 017-788-5701 FAX: 017-788-5702						
発行機関	青森県教育委員会						
発行年月日	西暦2009年3月6日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
すなこせ 砂子瀬遺跡	あおもりけんなかつがるぐん 青森県中津軽郡 にしのやわらすなこせ 西目屋村砂子瀬 あおもりと 字宮元	市町村 25008	遺跡番号	北緯 東経 40°31'37" 140°14'59" 40°32'03" 140°15'33" 40°31'58" 140°15'21"	20070508 ~ 20071031	13,300 2,100 4,500	津軽ダム建設 事業に伴う事 前調査
みずかみ 水上(3)遺跡	あおもりけんなかつがるぐん 青森県中津軽郡 にしのやわらすなこせ 西目屋村砂子瀬 あおもりと 字水上		02343	25026			
みずかみ 水上(4)遺跡	あおもりけんなかつがるぐん 青森県中津軽郡 にしのやわらすなこせ 西目屋村砂子瀬 あおもりと 字水上	25029					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
砂子瀬遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 土坑 土器埋設遺構 配石遺構 屋外配石炉	1軒 30基 14基 5基 1基	縄文土器 石器 土製品 石製品	屋外配石炉 は、青森市小 牧野遺跡で検 出されたもの とみで、組みで ては、同様の石 組みで、2例目であ る。	
水上(3)遺跡	散布地	縄文時代	土坑	1基			
水上(4)遺跡	散布地	縄文時代	土坑 配石(集石)遺構 遺物捨て場	7基 2基 1ヶ所			

要 約

調査の結果、砂子瀬遺跡では旧集落の造成による影響を受けていたが、湯ノ沢川沿いの一部に遺構が残存している。検出した竪穴住居跡や土坑などの遺構は、縄文時代後期前半と考えられ、いずれも疊層を掘り込んで構築されている。また、配石遺構の中に、青森市的小牧野遺跡で検出された石組と同様の屋外配石炉が検出され、県内では2例目となった。

水上(3)遺跡では、竪穴住居跡などは確認できなかった。出土遺物の中に後期後半から晩期にかけての注口土器破片が約60点以上も出土している。

水上(4)遺跡では、中期中葉から後期の時期と思われる遺物捨て場や配石(集石)遺構が確認されている。

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第466集

砂 子 瀬 遺 跡

水 上 ( 3 ) 遺 跡

水 上 ( 4 ) 遺 跡

- 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 -

発行年月日 平成21年3月6日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15  
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 青森相互印刷株式会社  
〒038-0013 青森市久須志四丁目1-25  
TEL 017-766-5161 FAX 017-766-5162

---